
ONE PIECE NOVEL -SHISHI BREAK STORY-

伝龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE NOVEL - SHISHI BREAK
STORY -

【Nコード】

N3682K

【作者名】

伝龍

【あらすじ】

俺の名前は仁道獅子、どこにでもいる普通の学生だ。しかし、まさか帰宅中に神様の使いらしき奴が出てきてあんなことに巻き込まれるとは……。ワンピースの世界に行った主人公が結末を変えるために暴れ回る？作品です。

この物語はご都合主義です。更新も不定期になると思います。原作も崩壊させたいと思っています。もし気に入らないという方がいるなら至急回れ右をお願いします。

5ノ8タイトル変更しました。

プロローグ

「相変わらずあの先生の説教は長いよな。」

そんなことを言いながら夕焼け色に染まった歩道を歩いている青年がいた。

名前は仁道獅子、近くの学校に通う学生である。

「まあ、いいや。それよりも早くコンビニ行かねーと。」

そう言っただけ獅子は歩みを少し速める。今日は某週刊誌の発売でその雑誌に掲載されている漫画ワン　ースを読むためだ。獅子は毎週欠かさずに立ち寄り、それを帰りに見ながら帰るのが習慣となっており、今週も同じようにコンビニで購入して読みながら歩いていた。

「しかし、この展開は有りって言ったら有りだし、無しって言ったら無しだな。」

俺は漫画の最後のページを読み終え、雑誌を閉じた。今現在の状況として黒ひげが白ひげの能力を奪い、世界に震撼を与える場面で終わっている。

「この戦争の初めの方は連携とか取れてたけど、白ひげが負傷してからの動揺が激しすぎるし……」

今回の戦いを最初から読んでいた獅子は改めて振り返り、自分が思ったことを口にしていく。

「何よりもまず戦力の差だな。物語の構成とはいえ、隊長達でさえ

苦戦している大将の実力があもはつきり示されたら他の奴じゃ対応しきれないし、さらに中将や七武海がいるからなあ。」

腕組みをしながらブツブツと独り言を話す様は他人の目から見れば、気持ち悪いことこの上ないのだが、そんなことは気にせずどんどん口にしていく。

「ルフィ達も合流したけど、それでもあまり戦力差に変化もないし……何より救出されたエース本人が挑発に乗って、返り討ちにあつたら元も子もないな。気持ちに分からなくもないが……」

エースにとって白ひげは自分を救ってくれた人であり、かけがえのない大切な家族……そんな人をバカにされたりもしたら怒りもするだろう。

「だからこそ、こういう展開になったんだろうけどな。」

そこまでを口にするのと横断歩道にさしかかり、信号が青に変わるまで歩みを止めた。

「もし、あの場に圧倒的な力……それこそチート並の能力を持った奴がいたら状況は変わってくるんだろうけど、それはあくまで創作小説の中での話だからな。」

よくネットのサイトでチートや能力最強などの投稿小説があるが、あれはあくまでそれぞれ個人がこういう風にしたいと思って書いている物であり、実際の漫画で同じ事をするとうパワーバランスを無視するし、何より面白みがほぼ皆無になってしまう。

故にそういった小説は好きな人と嫌いな人に明確に別れる物なので

ある。

「まあ、俺はチート肯定派だからそういった小説は好きだけどね。」
そこまで喋り終わると信号が青に変わり、再び獅子は歩き始めた。

「さてと、それじゃ来週の話も楽しみに……！？」

横断歩道を渡ろうとして歩き始めた途端、急に目の前が強力なライトに照らされたかのように明るくなった。

「（くっ……これは一体！？）」

突然の出来事に動揺した獅子だったが、次の瞬間、光が体全体を包み込むかのように覆い被さり、意識を失った。

「ん……んん……」

まぶたをゆっくり開けながら獅子は目を覚ました。

「……ここはどこだ？確か横断歩道を渡るつもりとして、いきなり目の前が真っ白になったと思ったら……」

そう言いながら辺りを見回そうとした瞬間……

「やつほー！目が覚めた？」

目の前に桃色の髪の毛に白のローブを着た美少女の顔があった。

「おわっ!!!」

急に出てきた顔に驚き、横たわっている体を起こした。その結果……

ゴン!!!!!!!

「っ!」

「いったあああああ……いい!!!」

鈍い音が響き渡り、二人しておでこを押さえた。

「ちよつと!!!いきなり起き上がらないでよね!!!」

少し涙目になりながら少女が文句を言うてくる。

「ああ、すまない……って何で俺が謝らなければならんだ!!!」

「そっちからぶつかって来たんでしょ!!!」

「ふざけんな!お前がいきなり顔を出すからだろ!」

「何よ!」

「何だよ!」

おでこを押さえながら水掛け論を繰り返し、にらみ合う二人。

「ううー……ハッ!こんな事してる場合じゃなかった。」

これ以上は無駄と判断したのか、急に少女が何か思い出し方のように表情を変えた。

「おい、話はまだ終わって……」

「あなた、仁道獅子よね？」

「話聞けよ……まあ、そうだが？」

呆れながらも獅子は少女に聞かれた質問に答えた。

「良かった。それじゃあ、はいこれ。」

そう言うと少女はローブに手を突っ込み、一枚の紙を取り出して獅子に渡した。差し出された紙を受け取り、俺は不審そうに眺めた。

「何だこれ？」

「読めば分かるから。」

「は？ていうかこっつて一体どこ……」

「いいから読んで!!」

急に顔を真っ赤にして怒り出す少女……俺、何か悪いことした？

「わ、分かったよ。えーと、なにになに……」

そう言うと俺は紙を見た……何やら文字が書かれている。

『初めまして、私、神様と言います。そして、おめでとございませぬ仁道獅子殿。あなたはこの度、好きな世界への移動する権利を獲得いたしました。つきましては注意事項や特典についてをご説明したいと思います。』

「おい、冗談は……」

「いいから最後まで読んでください!!」

「またも顔を真っ赤にして怒り出す少女……だから、俺何か悪いことした？」

『なお、全てをご説明したあとに移動するかしないかをお近くの使いの者にお伝えください。』

「だから冗だ……」

「……………」

再び抗議しようとして少女の方を見ると……般若がいた。

「……………すいませんでした。」

その迫力に思わず頭を下げ、再び文章を読み始めた。

『まず特典についてご説明いたします。簡潔に言いますと、あなたの要望したことを全て反映します。例えば肉体を強化したいと望めば肉体を理想の形で強化しますし、不老不死になりたいと望めばその通りになります。』

「（本当に簡単に言ったな……）」

『次に注意事項といたしまして、もし移動するを希望された場合はこれまでになっていた世界でのあなたに関する記憶等などは抹消されます。』

「オイ!!！」

さらりと出た爆弾発言に思わずツッコミを入れる。

『しかし、ご安心ください。移動しない場合も何の問題もなくこれまでの生活に戻る事が出来ます。但し、これまでの出来事の記憶は消させていただきます。以上で説明を終了いたします。なお、ご質問等がありましたら使いの者にお聞きください。』

そこで文章は終わっており、読み終えた獅子は軽く溜息をついた。

「ふう……何か漫画や小説でよく見るお約束通りの展開だな。」

「お約束通りの展開だけど、今起きているのは事実だからね。」

先ほどまで般若のような顔をしていた少女が笑顔で再び話しかけてきた。

「さて、それじゃあ何か質問はあるかしら？」

「いろいろと聞きたいが、まず……ここはどこだ？」

目が覚めたらいきなり変な手紙を問答無用で読まされて気にとめて

いなかったが、改めて周りを見てみて思った事……それは……

「（何も無い…そして真っ白）」

文字通りどこまでも続く白一色の世界…そこにいるのは自分と少女だけ。

「ああ、ここね？ここは他の世界へ移動するための説明や準備等の最終確認を行うために神様が作った空間で、権利を獲得しなければここに来ることはできないの」

「何でこんな所でするんだ？別にその場でも出来るんじゃないか？」

「普通、神様は人間個人に干渉することは出来ないの。そこでこの空間に呼び込んで、干渉の制限を軽くするの。まあ、それでもまだ厳しくて、私達みたいな使いの者を寄こすんですけどね。」

いつの間にか黒の三角メガネをつけた少女がクイツとメガネを軽く持ち上げる。

「なるほどね。じゃあ次の質問、何で俺を選んだんだ？」

その質問をした途端に少女の目がキラーンと光り、顔を近づけてくる。

「あなたが選ばれた理由…それは……」

「ゴク……」

何故か緊迫した空気がその場を包み込み、思わず息を呑む。

「ダーツよ！……！」

「……は？」

思わず目が点になる獅子。

「すまん…もう一回言ってくれないか？」

「だからダーツですよダーツ！」

すると、どこからともなく某番組でよく使われている円形の板が現れた。その表面の一角所に『仁道獅子』と書かれており、その部分に穴が開いていた。

「これにダーツの矢を投げて決めたんですよ。」

「……………」

余りの事にポカンとする獅子。まさか選ばれた理由がダーツで決められたなんて誰も予想できないだろう。しかも……

「何でパジエが入ってんだよ……！」

よく見ると自分の名前の少し横に一番の高額商品である名前があった。

「ああ、それは気にしないでください。別に神様がその番組が好きで作って、ついでだからここに名前書きちゃってというのが真実じゃないですから。」

「そんなおまけ的な理由で選ばれたの!? 俺!」

思わず膝をつきがつくりうなだれる獅子。

「まあ、そう気を落とさないで。ある意味 ジェロより当たるの難しいですし。」

「フォーローになってねえよ!!!」

少し涙目になる俺……さすがにぶっちゃけ過ぎたのを悪いと思ったのか少女は少し焦りながら話を進めた。

「ほらっ、他に質問はありませんか?」

「ぐっ……じゃあ、これに書かれている特典についてなんだが。」

気を取り直して、紙に書かれていた特典についてのことを聞いた。

「それについては言葉通りでああなたの望んだことが全て反映されま
す。但し、移動した後での要望は叶えられません。あくまでこの空
間で望んだ事のみですので、その点については気をつけてくださ
い。」

「つまり移動後の強化は不可能ってことか。」

「はい。ですが、ここではどんな事でも叶えられますので、そんな
に問題はないかと思いません。」

「分かった。それじゃあ、最後の質問だ。」

まだまだ聞きたいことがあるが、自分の中で一番気になっていることを口にする。

「移動した後は俺の記憶等が抹消されるってあるんだが……」

それに関しては不真面目に答えることができないのか、焦った表情から真剣な表情に変わる。

「あちらでの混乱を避けるために『あなたが存在したという事実』自体を抹消しますので、最初から存在していなかった事になります。」

「……」

「干渉制限と同時にこの空間は最終確認の場でもあるんです。何しる人一人の存在が消えてしまふんですから……」

「……」

「ですが、もし移動しないを選択した場合は今までの生活に戻ることも出来ます。その際、これまでのやりとりの記憶は消去させていただきます。」

そう言って少女は頭を軽く下げた。

プロローグ（後書き）

今現在のONE PIECEを見ていて、無性に書きたくありません。
た。

もしかしたら、今後の展開によっては修正が入るかもしれません。

誤字や脱字がありましたら報告お願いいたします。

プロローグ2

「……………」

少女の言葉に俺は表情を固くしたまま黙り込んだ。極端な話、移動すればこれまでの人生を忘れて、新たに別世界での人生を送れと言っているのだ。

「……………もし仮にここで断つたとしたら、この権利はどうなるんだ？」

「断つた場合はその権利は他の方に移りますが、恐らくあなたが生きていく間に再び手にすることはほぼ皆無と言っていいでしょう」

「……………」

つまりこういう体験は二度と無い……………一期一会に似たような事と言ってもいいだろう。

「さあ、どうします？移動しますか？それともしませんか？」

少女は獅子を見つめながら選択を迫る。

「……………もっ少しだけ考えさせてくれるか？」

「分かりました。では、決まったら話しかけてください。」

そう言って少女は無言のまま、その場に立ち尽くした。それと同時に俺は少女に背を向けて、正面を見つめて考え始めた。

「（確かにこんな出来事は俺のこれからの人生でもう二度と無いだろう。だけど……）」

頭の中にある事が浮かぶ……自分をここまで育ててくれた両親や学校で出来た気の合う友達……
それらの人達が自分の事を全て忘れてしまう……いや、存在しなかった事になってしまふのだ。

「（存在がなくなると言うのは人が本当の意味で死を迎えると言う人もいるからな。）」

人は亡くなっても、その記憶さえ残っていればその人がいたという証明ができる。しかし、記憶自体が消された場合、最初からいないという事になってしまう。

故に人は死んだ事を忘れてはいけないと言っているのである。

「（だけど、それでも……）」

俺はゆっくりと少女の方へと振り返った。少女もその気配に気づいたのか再び質問をする。

「決まりましたか？」

「ああ、俺は……他の世界へ移動する」

「よろしいんですか？」

「構わないさ。もし断ったら、こんな話は二度と無いからな。それに俺が元の世界で存在したっていう事実は家族や友達が忘れても、

俺が家族や友達の事を覚えている……それだけで充分だ。」

そう言っただけ俺は上を見上げた……さっきと同じ光景だったが、なぜか違う光景のように思えた。

「分かりました。では……………ふへえ……………」

俺が余韻に浸っていると、突然、少女が大きく息を吐き出した。

「ど、どうした？」

「ん？真面目な話だったから、何とか真面目に頑張ってたんだけど……もう限界ね。」

そう言っただけロープで風を送る少女の光景に啞然とする俺。

「な！？じゃあ、さっきまでの演技だったのか！？」

「ま、仕事だしね。それくらいの演技が出来なかったら、この仕事やってけないし。」

その言葉にプルプルと肩を震わせて、俺は叫んでいた。

「謝れ！！俺とこの小説を読んでいる読者に謝れ！！」

「何よ、それくらい大目に見てくれてもいいじゃない」

そう言っただけ自分の髪の毛先を指にクルクル巻きつけて遊んでいた。

「何か、さっそく後悔してきた……………」

おでこを押さえながら、やっぱり断つとけば良かったと思い始める獅子だった。

「まあまあ、細かいことは気にしないで。まずはどこの世界に移動するかを決めてちょうだい。」

「はあー……分かったよ。それじゃあワンピースの世界で頼む。ちなみに知ってるのか？」

溜息をつきながらも、俺は漫画について聞いてみた。

「大丈夫です！！こう見えても神様の所に忍びこ……もとい神様からいろいろと話を聞いてますから。」

「お前の言いかけた事も気になるが、神様がなぜその漫画を知ってるのかも気になるな。」

「まあまあ、私のことはともかく神は全知全能ですから……何か細かい希望とかありますか？」

そう言いながら、いつまにか取り出した手帳とペンを持って俺の言ったことをメモしている。

「そうだなあ、じゃあ白ひげ海賊団とルフィ達が合流する前の時とかでも可能か？」

「はい！もちろんです！！ちなみに何でそこなのか聞いてもいいですか？」

「ああ、これはあくまで俺の考えだが、ルフィ達が合流するまでは白ひげ達はそれなりに連携は取れていた。だけど合流してからは本格的に攻撃が激化してきていた。リトルオーズJr.には悪いが、あいつがいたから広場への突破口も開けたしな。だから、合流してから攻撃を激化させないために相手の戦力を削るもしくは抑える必要があると判断したんだ。」

「ふむふむ、なるほどなるほど。」

俺の説明に頷きながら、少女はペンを走らせてゆく。

「そして、何よりそれを可能にするには圧倒的な力：つまりチート並の能力を持つ奴が必要となってくるんだが、残念ながらそんな奴はいなかった……そんな奴がいたら結末は大きく変わっているからな。」

俺はさらに言葉を続ける。

「そんな時にあんた達が現れたんだ。好きな世界へ移動に加えて望みを全て叶えてくれるといった特典を持ってきてな？」

「ほほう……つまりグッドタイミングだったという訳ですか？」

「その通りだ」

そうやって俺と少女は互いに口の端を上げてニヤリと笑う……何か見る人が見たら裏取引しているように見えるな……誰もいないけど。

「分かりました。他には特にはないですか？」

「そうだな、それくらいだな。」

「了解しました。では次に特典の方をお願いします。」

「よしっ、それじゃあ、まずは原作で今まで判明している物とこれから判明する物、そして俺の世界でネットで創作された悪魔の実の能力と全ての技・霸王色の覇気を使えるようにしてほしい。もちろん、悪魔の実の能力は同時使用も可能、自分に不利な効果は全て除外だな。」

「ふむふむ。初っ端から飛ばしてますねー。」

「これくらいしないとチート並とは言えないからな。」

黒ひげのヤミヤミの実の能力自体があの時点でじゃ圧倒的だったし、海軍の方も大将達に対抗するにはこちらもこれくらいしておかないとな。

「次に肉体強化だな。何時間戦い続けても疲れず、負傷してもすぐに回復するようにしてくれ…あと不老不死も頼む。」

「またまたすごいチートですねえ…というか不老不死って必要ないような気がするんですけど?」

ペンを止めて、俺の要望に疑問を投げかける少女。

「もしも万が一イレギュラーが発生した場合、隙が出来る可能性があるからな。それを無くすためでもある。」

白ひげが黒ひげに対して過信や軽率が弱点と言っていたし、何より

能力者であろうがなかるうがどんな相手にも俺は油断はしないと決めているからな。

「ふんふん、了解。もう他にはない？」

「あとは容姿だな…見習い時代のシャンクスに近い顔に、レイリーの髪型で毛の長さはミドル、色は白銀で。」

「何となくいいとこ取りした選択ですねえー。」

「何でも要望が叶うんだからいいだろ？それに相手に印象づけた方がその分、戦力がこちらに向いてくれるから好都合だ。」

俺はやれやれのポーズをしながら答えた。

「あとは武器だが、刀を一本自由に出せるようにしてくれ。」

「？一本だけでいいの？」

「ああ、七武海の一人で鷹の目が使っていた最上大業物の黒刀『夜』に勝るとも劣らない俺が考えた最上大業物の刀…白刀『明』。」

「なんかかつこいいですねえ！でも白刀って？」

俺の聞き慣れない言葉に体ごと首を傾げる少女。

「恐竜が踏んでも1ミリも曲がらない『硬さ』ってのが黒刀の特性なら、いかなる力にも屈さない芯を持った『堅さ』ってのが白刀の特性だ。それに炭でも黒炭と白炭ってのがあって、黒炭に比べて白炭の方が堅さは上って言われている点からこの刀を考えたんだ。」

「ほうほう、なるほどねえ。」

自分の知らない事に素直に頷きながらもペンを動かさし、仕事を行っていく。

「とりあえずはこんな所かな？多分、要望は出し尽くしたと思う。」

「わかりましたー！では、準備するのでちょっと待ってくださいねー」

そう言いながら、少女は書き終えたメモをローブの中に入れて、腕を背中に回してゴソゴソし始めた。

「準備？？」

「えーと……これでもない……これでもない」

ローブの中に手を入れて、何やら物色している少女を俺は怪訝な目で見ていた。

「さっきから何を……」

「あっ！あつたあつたー！！」

何かを見つけたようで、腕を前に持ってくる……そこから出てきたのは……

「……………ピロピロ　ンマー？」

「はい、叩いて かぶって でおなじみのピコピコハン ーです。」
少女の手にはおもちゃ屋では定番と言っているほどのおもちゃが握られていた。ダーツの時と同じく目を点にする俺。

「あー…それでどうするわけ？」

「どうするってどうするんですよ。」

俺が呆気に取られていると、少女はもう片方の手の人差し指をこめかみに当てて、目を閉じた。すると……

「!?!」

突然、ピコピコハ マーが光り始め、どんどん大きくなりさっきよりも10倍の大きさになっていった。

「今、神様に連絡をしてあなたを別世界へ送るための力を送ってもらいました。これで叩けば、全て終了です。さあ!! やっちゃいましょう!!」

そう言っつて、少女は大きくなったピコピコハンマーを振り上げる。

「ちょっと待て!! もっと他に方法がなかったのか!？」

あまりのことに驚いて後ずさる俺……おもちゃとはいえ、あんなだけでかい物で殴られたらかすり傷程度で済むはずがない。

「これが一番効率がいいんですよ。今はこれですけど、昔は金属バットやフライパンだったらしいですよ?」

「何でそんな無敵とか夢は世界征服とか野望持つてる高校生が持つてるような物ばっかりなんだよ!!」

「そんな事知らないわよ。とにかくさっさと済ませるわよ!!」

再びハンマーを振り上げながら、満面の笑顔でジリジリと寄ってくる。

「だ、だからちょっと待って!! あっ、そうだ! 名前! 名前をまだ聞いてなかった!!」

「……確かにまだ名乗ってませんでしたね。私の名前はメル工と言います。それじゃあ、いつてらっしやい!!」

メル工は思いっきりハンマーを振り下ろした。

「おいつ!! ちよっ!! まっ……」

次の瞬間、俺は再び意識を失った。

プロローグ2（後書き）

前回で全てを書ききれなかったので、もう一話だけプロローグを書きました。この次は本編に行きたいと思います。

第01話「援軍到着」

ドガアアアアアアン！！！！

ドン！！ドン！！ドン！！

砲撃や銃撃の音が辺り一面に鳴り響いた……その場所は偉大なる航路の「マリンフォード」と呼ばれる三日月型をした島にある『海軍本部』……世界中にある正義の名を持つ戦力の最高峰と呼ばれる場所でもある。

事の発端は新世界で四皇と呼ばれ、『海賊王』ゴール・D・ロジャ―と唯一互角に渡り合ったとされる海賊エドワード・ニューゲート……通称『白ひげ』と呼ばれる男の2番隊長であり、『火拳のエース』と知られるポートガス・D・エースが元白ひげ海賊団の団員であり、現七武海でもあるマーシャル・D・ティーチ……通称『黒ひげ』と呼ばれる男に捕らえられ、深海の大監獄と呼ばれるインペルダウ―ンに収監、その後、処刑をマリンフォードで行うと発表される。

この処刑には大きな意味があった……それはエースの父親の存在だった。実の父親が白ひげではなく、あの『海賊王』ゴール・D・ロジャーだったという真実……それは海賊次世代において、新たな『海賊王』の再来を意味していた。

かくしてエースの救出とその処刑を食い止めるべく、『白ひげ』率いる新世界の海賊艦隊47隻がマリンフォードに集結し、グラグラの実の能力者であり地震人間でもある白ひげが起こした海震による津波によって、その戦いは始まった。

場面は津波は海軍の最高戦力である大将『青キジ』のヒエヒエの実の力によって、氷漬けにされた氷上での戦いに移る。

「フフフフフ！！何がおかしいのかってか！？教えてやる…今！！この時代の中心にいる感じだ……フッフッフツツ！！」

愉快に笑いながら話す、金髪にサングラスとピンク色の羽で出来たコートを身につけた一人の男がいた…名前はドンキホーテ・ドフラミンゴ、黒ひげと同じ七武海の一人であり元懸賞金3億4千万ベリ一の大物海賊でもある。

「今この場所こそ『中立』だとは思わないか！？白ひげ海賊団13番隊隊長水牛アトモス！！」

目の前のバイキングヘルムを被り、2本の湾刀を持った大男に問いかけるドフラミンゴ…そう言って右手を動かした。

「……………！しまった！！？お前ら！今すぐ俺から離れる！！」

「！？？」

突然、慌てながら警告する隊長の言葉に驚く隊員達……次の瞬間。

「うわぁー！！」

「ぎゃあっ…！！」

自分達の隊長であるアトモスがまるで操られているかのように手に持った湾刀で斬りつけてきた。

「ぐっ！やめるお！！ドフラミンゴ！！お前ら、俺に近づくんじやねえ！！！」

「アトモス隊長！？」

突然の隊長の行動に動揺する隊員達。

詳細は不明だが、他人の体を自由に操る……これがドフラミンゴの能力だった。先程もオーズの攻撃を難なくかわし、宙に舞いながらオーズの右足を軽々と切断した。

「海賊が悪！！？海軍が正義！！？そんなものはいくらでも塗り替えられて来た！！！」

大口を開けながら話すドフラミンゴ。

「『平和』を知らねえガキ共と『戦争』を知らねえガキ共とは持つ価値観が違う！！誰が正義の反対は悪だと決めた！？何故、悪だと滅ぼされなきゃいけないえ！？正義は勝つ！？そりゃそうだ！！！」

戦争が続き、常に死と隣り合わせの状況で育った子供はこれが当たり前の事だと思い、平和で裕福な状況で育った子供はそれが当たり前だと思つ。

人が認識するものは常に変わる……そこまで言うと、ドフラミンゴは最後に自分自身が持つ「力が全て」の考えを声高らかに上げた。

「どれが正義か悪なのか関係ねえ！！勝者だけが正義だ！！！」

その頃、別の場所では……

「この機を逃すなあ！！オーズの開いた道から湾内へ進めえ！！！」

「こんな氷塊、あたしにとっては朝飯前だよ！」

そんな言葉の後、すぐに白ひげ海賊団の傘下である『氷の魔女』の異名を持つホワイティベイが乗る砕氷船が湾頭を突破し、青キジによって凍らされた氷の海を進もうとしていた。

「報告します！！湾頭の2ヶ所を突破されました。このままでは大きく攻め込まれる事になります！センゴク元帥！！！」

「……問題はない。」

海兵からその様子を伝えられた海軍本部のトップであり全海兵を束ねる最高権力者でもあるセンゴクは処刑台から眉一つ動かさずに答えた。

「そろそろ頃合いだな……」

そう言つて電伝虫を手にとると、ある人物に通信を入れた。

「おつるさん、作戦に移るぞ。」

センゴクが通信を入れたのは海軍本部中將であるつるであり、大参謀としての役目を担っていた

「そろそろかい？分かつたよ……全艦全兵に通信を！」

その言葉を機に至るところで、海兵達が持つ電伝虫に通信が入つた……その様子を一人の男だけが気づいていた。

黒のバンダナに三日月の様な白いひげ、常人と比べ遙かに大きい体に大小の傷をあり、右手には巨大な薙刀を持った白ひげ海賊団船長『白ひげ』エドワード・ニューゲートであつた。

「グラララララ……あいつめ、何か企んでやがるな……。智将……
『仏のセンゴク』……！！」

そう言いながら白ひげは処刑台にいるセンゴクを睨みつけていた。

一方、通信を終えたセンゴクは再び口を閉じ、処刑台から白ひげを

監視していた。その隣には膝をつき、後ろ手に海楼石と呼ばれる手錠をはめられて傷ついたエースの姿があった……そこへ……

「ジジイ……」

「何の用だ？ ガープ……まさかお前……」

「心配せんでも海賊の悪党にや同情せんわい。」

後ろから姿を現したのはつると同じ海軍本部中將で、過去にセンゴクと共に何度もロジャーを追い込んだ実績から海軍の『英雄』と称され、ルフィの祖父でもあるモンキー・D・ガープであった。

「ならば何をしに来た？」

「ここにおるくらいいいじゃろうが……」

そう言つて、エースの隣まで進み、あぐらで座り込んだ。

「……悪党に同情はせんが、家族は違つ……！！！！」

そう言つたガープの頭に過去の記憶が浮かんでいた。

『死ぬ間際に産まれてくる子供の事を頼むロジャーとの場面』

『その子供の出産に立ち会う場面』

『友人の元へ預け、ルフィを紹介する場面』

その他にも様々な記憶が浮かぶ中、ガープは再び口を開いた。

「わしは……一体、どうすりゃいいんじやつ……！エース……！貴様何故言うとおりに生きなかつた！！」

ガープは目に涙を浮かべながら、頭を押さえ込んだ……エースとルフィは共に世界最悪の血を受け継いだ存在だった……だが、二人とて受け継ぎたくて受け取ったわけではない。子供は親を選べない……その事をガープは理解していた。

だからこそ、ガープはその存在を隠すために二人を海兵にしようとした。

海兵になれば、自分の部隊に配属することも可能であり、例え正体がばれても庇ってやることが出来る……海軍の英雄と呼ばれるほどの実績があれば、センゴク以外の説得なら容易に出来るだろう。センゴクに関しても「海兵になったのなら、問題はないじゃろ？」ぐらいのノリでゴリ押しするくらいはするだろう。

だが、二人は共に海賊になってしまった……一人は白ひげ海賊団の隊長となり、一人は赤髪に憧れ、数々の事件を起こした存在になった……こうなれば、もう手の打ちようがなかった。

海賊になれば自分は海軍本部の中将であり、二人を捕まえなければならぬ……

「ジジイ……！！！！」

エースは今まで見たことないガープの顔に驚きを隠せなかった。

「……言うておくが、今、妙な行動を起こせば……ガープ……貴様と

て容赦はせんぞ。」

「ふんっ、やるんならとっくの昔にやっとなるわい。」

釘を刺すセンゴクにガープは感情を抑えながら言った。

戦いが激しくなる中、二人の若い海兵がさっきの電伝虫の通信で伝えられた作戦について話していた。

「聞きました!?!今の作戦!?!」

「ああ。」

ピンク色の髪をした青年が金髪にオールバックの青年に話しかけた。彼らの名前はコビーとヘルメツポ……ガープ中將の部下であり、共にルフィ達とは知り合いであり、彼らもこの戦争に招集されていた。

つい先程、電伝虫から通信が届き、その内容に驚いていた……その内容は……

「エースさんの処刑を予定を無視して行っつて……!?!……そんな事したら、海賊達がますます……」

「分かってるけど、」等じゃどうしようもねえだろ!？」

伝えられた作戦に顔を引きつらせているコビーにヘルメツポは慌てながら返答し返した。さっきの通信の内容は『エースの処刑予定時刻を無視して行く』とのことだった。

もし、そんなことをすればますます海賊達が処刑台に向かってなだれ込んでくる……そんな内容にコビーは信じられなかった。

「と、とにかく、しっかりしないと……」

「そ、そうだな………ん？」

ふとヘルメツポが空を見上げると、何か黒い点の様な物が見えた。

「どうしました?」

「何か空から降ってくるぞ?」

「え?」

そう言っつてコビーも上を見上げた。

「おい!何だあれ!何か降ってくるぞ!」

氷上で戦っている多くの海兵達にも空から何か降ってくる光景に目をとめ、一人の海兵が指さした。

「え」

その声に処刑台にいるエースも思わず空を見上げた。その時、上方から声が聞こえてきた……

「いた！！おーーーーー！！！！エーーーーー！！！！スー
ーーーーー！！！！」

そんな呼びかけをしながら笑顔で手を振る麦わら帽子の男……

「おい！麦わらア！！てめエ、何暢気に手エなんか振ってたア！！」

その横でギヤアギヤア叫びながら文句を言っている赤鼻の男……

「大きな声出すんじゃないガネ！！気付かれたらどうするカネ！！」

さらに横で慌てた表情で、赤鼻にツッコミを入れる髪の毛を数字の3に結った男……

「ふん、もう遅せえよ……バカが。」

右手で葉巻を持ちながら、左手のフックを持ち上げて、下を睨みつける黒の分厚いロングコートを来た男……

「どうやら間に合っチャブルね！でも……さすがに総力戦だけあって

数がハンパじゃナツシブルね!!」

麦わら帽子の男の反対で戦場を見る紫のパーマヘアに厚化粧をした巨大な顔の女?^{オカマ}……

「……………」

その隣で無言で腕を組みながら、同じく戦場を見るちょんまげを結い、着物を来た魚人の男……

そして……

「しししし!! ありがとな!! シシのおかげで無事に降りられそうだし。でも、お前:ほんとにシャンクスに似てるよな!」

そう言って麦わら帽子の男:モンキー・D・ルフィは帽子を押さえ、振り返りながら船首にいる男の名を呼び、礼を言った。

「全く、その顔を見てるとだんだん腹が立つてくるぜエ!! だが……礼だけは言っておくぜエ!! ぎゃはははははは!!」

赤鼻の男:道化のバギーはふてぶてしく笑いながら、同じくシシの方に首を向ける。

「とにかく落ちずに済んだガネ。こう見えても私は義理堅い男でネ……礼はいずれするガネ。」

髪の毛を3に結った男:Mr.3は右手の人差し指でメガネを持ち上げる。

「……ふん、あとで覚えておけよ。」

ロングコートの男…クロコダイルは葉巻に火をつけ、煙を出しながらシシを睨みつける。

「しかし、ヴァナタ……一体何者なブル？」

巨大な顔の女？…エンポリオ・イワンコフは訝しむようにシシを見やる。

「この度のエースさん救出への助力……感謝する。」

そう言っつて着物を来た男…ジンベエは頭を下げた。

「礼なんかいらねーよ。俺はただエースを救出しただけなんだからよ。それとクロコダイル、相手なら終わってからしてやる。」

そう言っつと男は船首からルフィ達へと歩み寄る……身長は180ぐらいで青のTシャツにデニム生地の黒の長ズボン、白い靴を履いており、歩く度に白銀の髪の毛が揺れていた。

彼らは今、インペルダウンから脱獄した際に奪った軍艦で空を落ちていた……否、降りていた。

「まあ、そう言っつなっつ……なっ？シシ!!」

ルフィの前で歩みを止めた男……名前はジンドウ・シシ……この世界に来る少し前までは仁道獅子と呼ばれていた男だった。

第01話「援軍到着」（後書き）

前回の後書きどおり本編には突入しましたが、主人公が最後の方にしか出てない……OTZ

主人公を登場させるための話を書くにあたって少し前振りが必要だ
と思い、書いていましたが……長くなりすぎたせいで主人公が後ろ
の方になってしまいました。

次こそは獅子をメインにルフィ達の出会いを書こうと思っています。
文才のない私ですが、皆さんよろしくお願いいたします。

第02話「シシ」

「な、何なんだ！？あれは一体……」

「軍艦が降りて来ている……？」

ゆっくりと降りてくる軍艦の様子は戦場にいた海兵や海賊だけではなく、映像電伝虫からの通信によって世界中の人々が観戦していた。

「……！」

「？」

処刑台から自分の目で見ていたセンゴクと自分の船の上から見ていた白ひげは何事かと反応を返していた。

やがて軍艦は白ひげ海賊団3番隊隊長『ダイヤモンド』ジョズによつて、先程空けられた氷の海にゆっくりと着水し、甲板上に大勢の人が集まっていた。

「……………！！ルフィ！！！！」

センゴクと同じように処刑台からその光景を見ていたエースだが、その中に自分の弟がいることに気付き思わず名前を叫んだ。

「エース……！！！！！！！！来たぞ……！！！！！！！！」

「覚悟しやがれえ！！！！！！！！」

「……………」

「改めてみると壮絶な光景だっチャブル！」

「…エースさん……………」

「「「うおおおおおおお！！！！！！」「」「」

その呼びかけに答えるかのようにルフィや他のメンバー、脱獄囚達も思い思いに言葉を発する。

そして最後に……………」

「ほー……………こりやまたすげえ光景だな。やっぱり実際に目で見るのは違うな。」

ルフィの隣でシシはポケットに手をつ込み、首をゆっくり左右に振りながら辺りを見回していた。

「ガープ！！！！また貴様の『家族』が問題を起こしているぞ！！！！」

「！！！！ルフィ……………！！！！」

ルフィの姿にセンゴクは厄介事を増やしてくれたかのような言い方でガープに怒鳴りつけ、ガープもまた予想外の出来事に頭を抱えながら、孫の名を叫んでいた。

ルフィのその姿に三大勢力の一つで世界政府公認の7名の大海賊で構成された王下七武海と呼ばれる面々も思い思いの言葉を発した。

「『麦わら』……話題に尽きない男だ。」

黒のテンガロンハットを被り、背中に巨大な黒い刀を背負った男：
ジュラキユール・ミホーク：通称『鷹の目』と呼ばれる男がその目
でルフィを捉えていた。

「ムーギーーワアーラー！！？あの野郎！！生きてや
がったのか！！！」

「……………」

2本の角に尖った耳の巨大な男：ゲッコウ・モリアは因縁のある男
の姿に怒りを露わにし、その横では熊の耳がついた帽子を被り、手
に聖書を持った同じく巨大な男：バーソロミュー・くまは無表情で
見つめていた。

「ルフィ…よくぞ無事で……………」

頬を赤くしながら、熱い視線を送っている女：ボア・ハンコックは
自分が愛する人の無事な姿に安心していた。

「フッフッフッ！！新旧の七武海に革命軍幹部のイワンコフ……そ
して、噂の大問題ルーキー『麦わら』か。」

ドフラミンゴもそのメンバーに思わず笑いが零れた。

「あれは…エースが前にいつか言ってた弟じゃねエかよい。」

別の戦場で戦っていた白ひげ海賊団1番隊隊長マルコはいつもエー

スが話した自分の弟の事について、思い出していた。

「スモーカーさん！！あれ！見てください！！！」

「たしぎ！！余所見すんじゃねエ！！……！あれは麦わらにクロコ
ダイル？どういうことだ……？」

以前にローグダウンでルフィと戦った事のあるスモーカーとその部下たしぎは奇妙な組み合わせに訝しんでいた。

また別の場所では海軍大将達もそれぞれの感想を述べていた……

「あらま……えらいの連れて来てんじゃないの。」

額にアイマスクとパーマの髪の毛の男……海軍大将の『青キジ』ことクザンは見知った顔の男と一緒にいるメンバーに気だるそうに頭をかいた。

「おおーおおー……また会えるとはねえ〜」

サングラスを掛け、間延びした口調で同じく大将である黄猿はつい先日に関戦した男との事を思い出していた。

「あいつがそうかい。英雄ガープの孫にして最悪の犯罪者ドラゴンの息子……ここで確実に消したかには後々やっかないことになるけんのう。」

帽子を被り直しながら、大将最後の一人……『赤犬』ことサカズキはルフィの姿を睨みつけた。

「な、アレはクロコダイルにジンベエ!？」

「それに革命軍のイワンコフに後ろにいるのはインペルダウンの脱獄囚達だ!！」

戦場の海兵も船にいる面々を見て、口々に叫び始めた。

その中に……

「…?おい、『麦わらのルフィ』の隣にいるあの男は誰だ？」

「見たことない顔だが……」

「誰か知ってるか？」

ルフィの隣にズボンのポケットに手を突っ込んで、堂々と立っている男の姿に海兵達はもちろん、七武海や大将、センゴクやガープもその存在に気づき、話をし始めた。

「あの男は……」

その姿を見た瞬間、鷹の目が何かを感じ取ったかのように呟いた。

「キシキシシ!!誰だ、あの野郎は?知ってるか？」

「……………」

「チツ!愛想のねえヤローだぜ。」

モリアは笑いながら問いかけるも、無言のまま見つめるくまに機嫌

を損ねた。

「他の男に興味はない。」

ルフィの隣に居る男を軽く一瞥すると、ハンコックは自分の愛しき人に再び視線を戻した。

「謎の新星と言った所か、こいつは面白い…フッフッフッ!!」

ドフラミンゴも謎の男の正体にワクワクしながら、笑っていた。

「あいつ…一体何者よ!?」

マルコはエースの弟の隣に立つ男に何か謎めいた物を感じ取った。

「また、新しいのが出てきたね…誰か知ってるかい?」

「いゝやあ、初めて見る顔だねエエ。サカズキ、君知ってるかい?」

「知ろうが知るまいが、海賊は皆、始末したらええんじゃあ。」

3大将の面々も記憶にない男の存在に興味を持ち、その姿を睨みつけていた。

「あの男…何者なんでしょうか?」

「さあな…だが、少なくとも麦わら達と一緒にいるって事は俺達の敵ってわけだ。気を抜くなよ?」

質問するたしぎにスモーカーは敵の攻撃を躲しながら答えた…一方、

処刑台ではセンゴクがエースに詰め寄っていた。

「本当に白ひげ海賊団の団員ではないんだな？」

「……ああ、俺の隊にも他の隊にもあんな男はいなかったよ。」

エースが頂垂れながら、センゴクの質問に答えた……その質問とは『あの男は白ひげ海賊団の団員か？』と言ったものだった。

「そうか……」

そう言っただけでセンゴクは踵を返し、再び男の元へ視線を移した……他の海兵達が男の正体を知ろうとする中、センゴクとガープだけがそれは別の事に注目していた。

「センゴク、あの能力……」

ガープは何か気付いた様子でセンゴクへと話しかけていた。

「お前も気付いたか。そうだ……22年前、ロジャーが処刑される1週間前にこのマリントワードにたった一人で攻め込み、その2年後、インペルダウンからの脱獄に成功した空飛ぶ海賊『金獅子』のシキが持っていた能力だ。」

そう言うセンゴクとガープの頭の中には22年前の記憶が蘇っていた。

「だが、おかしいじゃろ？悪魔の実は同じ物は2つと存在せんはずじゃ。」

「悪魔の実については全てが解明されている訳ではない。そう考えれば、あの男が何らかの理由でシキの能力を得たとも考えられる。」

「じゃが……それでお前は納得するのか？」

「……………今、その事を深く考えても仕方がない。今はエースの処刑と白ひげ海賊団の殲滅が最優先だ。お前もそれだけに集中しろ。」

センゴクの返答にガープは深刻な顔をして、再び戦場に視線を向けた。

彼らは知らない……………後にその男の見せる力がさらなる驚きをもたらす事を……………

「ほー……こりやまたすげえ光景だな。やっぱり実際に目で見るのは違うな。」

そんな事を言いながら俺はポケットに手を入れたまま、辺りを見回していた。

「やっぱり絵で見るのと実際に目で見るのとは雲泥の差だな。」

絵で見ただけじゃその場の雰囲気は伝わって来ないし、何より迫力に欠けるからな……実際に横にはこの物語の主人公がいるわけだし。

そう言いながら俺はエースに向かって叫ぶルフィや他のメンバーへと見やった。

バギーは思ったよりも鼻がデカかったし、Mr.3は本当にガネガネ言ってるし、クロコダイルはうるさいし、ジンベエは義理堅いし、イワさんはホントに顔面デケーし……あんだけあったら、忘れたくても忘れらんねーな。

そして何より……

「ルフィは……ルフィのまんまだしな。」

隣で笑うルフィに俺はじつと見ていた……すると視線に気付いたのかルフィがこちらを向いて話かけてきた。

「ん？どうした？シシ」

「いや、何でもねーよ。」

「何だよお、気になるじゃんかよ。」

「大したことじゃねーよ。」

「ぶーぶー、ならいいじゃんか。言ってみろって。」

文句を言いながら、しつこく聞いてくるルフィに俺は観念した。

「ふうー…分かったよ、教えてやる。」

「おう！言ってみろ！」

腰に手を当て、どーんと胸を張るルフィに俺は思わず苦笑した。

「ああ……ルフィ達と出会った時のことを思い出していたんだ。」

「出会った時のこと？」

「ああ。」

そう言って、俺は空を見上げてルフィ達のとの出会いを思い出していた。

〈回想〉 SIDE 妻わら組

時間は白ひげが津波を起こし、それを青キジが氷漬けにした所まで遡る。

「何が起きたんだ!!!」

「何で海が凍ってんだよ!!!??」

「知るか!!!いきなり大波にさらわれたと思ったらいきなりこんな所に……」

1隻の軍艦が凍った津波の頂上で埋まり、立ち往生していた。その軍艦の乗組員：インペルダウンの脱獄囚達はいきなり起きた出来事に慌てふためいていた。彼らは正義の門を通過した後、エースがいる処刑台へと向かう途中に大波にさらわれ、そして氷漬けになった海の頂上に埋まっていた。

「ふん、下を見てみる。面白いモンが見れるぞ。」

そんな様子を余所にクロコダイルはそんな言葉を言いながら下を覗

き込んだ。

「……オヤジさん!!!!」

覗き込んだジンベエは自分の恩人である人物を叫ぶ。

「既に『戦争』は始まっチャブルね!」

同じく下を覗き込んだイワンコフも状況を把握し、言葉を発する。

「で?どうすんだよオ!!麦わらア!!」

この状況に痺れを切らしたバギーがルフィに食ってかかっていた…
それに対してルフィは……

「お前らおれの話を聞け!おれにいいアイデアがある!!これで乗り切るしかねエ!!急がねエとエースの処刑時間があと3時間もねエんだ!!」

そう言っつてルフィは全員に聞こえるように自分が考えたアイデアを伝える。そのアイデアとは……

「はア!?この凍った海を艦で滑り降りるだア!??」

「何言ってるガネ!!動かせるわけがないガネ!!」

ルフィの突拍子もないアイデアにバギーやMr.3は反対の意見を言い出す。ジンベエや囚人達は腕を組んだまま、黙ってその話を聞いていた…クロコダイルも同じく黙って話を聞いていたが、態度はどうでもいい感じだった。

「無理じゃねエ！！力を合わせれば必ず出来る！！！」

ルフィはそんな意見にも怯まず、言い返した。そんな言葉にバギーは……

「ハッ！…お、俺ならやれそうな気がしてきた……！！！」

ノリがいい奴であるバギーはこういう状況になると自分になら出来ると思ひ込み、手を武者震いの様にわなわな震わせながら呟く。さらら……

「……そうだ！！俺達にや伝説の海賊にして天下を取る男キャプテン・バギーがついている！！！！」

海賊王の元クルーであるバギーを英雄視する周りの囚人達はバギーのその言葉に崇拜するかのように叫ぶ……ズル賢い性格のバギーだが、こういう場を盛り上げ煽り立てる才能だけは長けていた。

「おう！！おめえらア！！！！いつちよやるぞオ！！！！」

「……おう！！！！」

こうなるとバギーの勢いは止められなかった。囚人達がバギーの名をコールをする中、バギーは何とも悪そうな顔で下を向く。

「（こうしてこいつらを煽っておきゃあ、後々役に立ってくれることア分かってる……！！そうすりゃ何かの間違いで白ひげの首を取ることも、勢い余って海賊王になる事も出来る……！！）そうなりゃあ、時代は俺についてくるってもんだぜエ！！！！ぎゃはははははは……！！！！」

「！」

そう言つて上を向き、大口を開けて笑うバギー……次の瞬間。

「ぶほお！！！」

突然何か重たい物がすごい勢いでバギーの顔を直撃し、そのままバギーは倒れ込んだ。

「！！！」

「……キャプテン・バギー！！！！？？？」

突然の出来事に驚くルフィや囚人達……と同時に一人の男がすくつと立ち上がり、辺りを見回した。白銀の髪に青のTシャツ、デニム生地の黒の長ズボンと白い靴を履いた男がそこにいた。

「ふう。どうやら無事に来たらしな。」

S I D E O U T

SIDE シシ

「ふう。どうやら無事に来たらしいな。」

そうやって俺はズボンについたホコリを叩きながら、辺りを見回した。漫画で見た人物達がいるのには少し感動した。

「（しかし、メルエの奴も気が利かないよな。どうせ送るんなら艦の甲板にしてくれればいいのに。何故か気付いた時には落ちていたからな。）」

メルエによって意識を失ったあの後、次にシシが意識を取り戻した時には空を落ちている真つ最中だった。

「（まあ、落ちてる時にルフィ達が乗った軍艦は見えだし、『月歩』で勢いは抑えたし、何かクッションみたいな物もあったしな。）」
いくら傷ついてもすぐに回復する体にはなったが、猛スピードで好き好んで怪我をするつもりはない俺は途中で『月歩』を使い、勢いを抑えつつも何かの上に着地した。

そんな風に考えていると……

「なあ！お前、どっから来たんだ？」

「ん？」

わくわくしながらトレードマークである麦わら帽子を被ったルフィが話しかけてきた。

「(さっそくだな。) ああ、どこからってんならあそこだな。」

そう言っつて俺は人差し指で遙か上空の空を指さした。

「空島から来たのか!？」

「うーん…そういう訳じゃないんだが、気付いたら空を落ちてた。」

正直に答える訳にもいかず、適当な理由を口走った。

「何だ?変なヤツだな。」

そう言いながらもルフィはししししと歯を見せながら笑った。そんなルフィを見た俺は……

「(おお。俺、今、主人公と話してるよ。何か感動だな…しかし、やっぱり友達になりたいキャラクターランキングの第2位だけあって好感が持てるな。こんな友達なら俺は絶対裏切らないな。)」

「な!お前、名前は?」

「俺か?俺の名前は…シシ。ジンドウ・シシだ。」

俺は前の世界で使っていた自分の名前を口にした…本当はいろいろな名前を考えていたんだが、やっぱり俺が俺でいるためには自分の名前は捨てちゃいけないなと思ったからな。

「シシか!おれは……」

「おっと、モンキー・D・ルフィだろ?知ってるぜ?何せ有名人だ

「からな。」

自分の名前を名乗ろうとしたルフィに俺は途中で言葉を挟んだ。

「！そうか。しししし！！だったらよろしくな！」

そう言っつてルフィは握手を求めてきた。

「（このサバサバした感じがルフィらしいよな…）ああ、こっちこそよろ……」

俺もその握手に答えようと手を伸ばした時……

「ちよつと待てクラア！！！！」

「……キャプテン・バギー！！！！大丈夫ですか！！？？」

俺の後ろで赤いデカツ鼻から鼻血を垂らしながら、顔がボロボロになったバギーが怒り心頭でこちらに向かってきていた。

「テメエらア！何さらつと自己紹介なんかしてやがんだア！！！」

「あ、バギー。お前いたのか？」

「最初からいるわア！！お前も一部始終見てただろうがア！！！」

その存在を忘れてたかの様に言うルフィとツツコミを入れるバギーに俺は笑いをこらえていた。

「（くくく……やっぱ、ルフィもバギーも面白れーな。だが、バギー

「は本当にデカツ鼻で赤ツ鼻だな。一体何をどうやったらあんな鼻になるんだ？」

「ああ！？テメエも一体何笑ってやがんだア！！元はと言えばテメエが落ちてきたせいで……？」

そう言つて顔を近づけてくるバギー……そんなに顔近づけんな、鼻がますますでかくなって笑っちゃうじゃねえか。

「ああーん？テメエ、どつかで見た顔だな。」

「ん？そうか？」

「……………！！そうだ！あのシャンクスの野郎に似てやがんだ！！チクシヨー！ますます腹が立ってきたぜ！！」

「……キャプテン・バギー！！そんな野郎なんかやつちまえ！！！」

「」

囚人達のそんな声と共に手をぎゅっと握りしめながらプルプルと震え、ますますバギーの怒りに拍車が掛かった。

「おおよ！もう我慢できねエ！テメエはブっ……………」

そう言いながら腕を振り上げ、殴り掛かろうとするバギーに俺は……

「はいはい。ちょっと待ちなよ。海賊王ゴールド・ロジャーの元船員にして四皇の一人『赤髪』のシャンクスとも兄弟分のバギーさん。」

「」

「!?!?…なぜそれを!!」

「そりゃあもう、そっちも有名なだからな。いろいろと噂は聞いているぜ?」

そう言つて、俺はいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「何でも昔、ロジャー海賊団の中じゃ一目置かれていたらしいじゃねえか?」

「な……. それでもねえけどよ!!」

俺の言葉にバギーは突然、動きを止めて胸を張りながら、人差し指で鼻を擦った。

「それにあのシャンクスとは兄弟分と言われているが、実際はシャンクスがお前に憧れてたとも噂されているし。」

「な、何言つてんだ。そんな事あるワケ……」

「そうかな? よく昔を思い出してみる。そんな言動があつたはずだぜ?」

「そんなのあるワケが……いや、待てよ? あの時か……. それともあの時か?」

「「「キャプテン・バギー???」「」」

否定しながらも自分が見習い時代だった時の記憶を思い出し、ブツブツと独り言を呟くバギーに囚人達も心配そうに声をかける。

さらに俺はさらに話を続ける……

「どうやら思い当たる節があるようだな。そこで、そんな伝説の男に頼みがある。そんな伝説の男の顔面を傷つけた事を許してくれねえか？」

「何だと!! 何故許さなきゃいけないんだ!!!!」

「考えても見るよ。あの囚人達はあんたを伝説の男として英雄視してる。そんな男が顔面の二つや二つ、傷をつけられたぐらいで怒っちゃあ、器の狭い男だと思う奴もいるだろう。だから、ここで寛大な気持ちで許してやれば、『何て器の大きい男なんだ!! さすがはキャプテン・バギー!! ますます気にいっちまつたぜ!!』ってなる。そうなりや、あいつらはますます喜んでお前の命令を聞くし、裏切りもしないだろう?」

「む……言われてみれば……」

俺にそう言われて納得するバギーに俺はダメ押し of 言葉を言った。

「だから、ここは許しときなつて。大丈夫、お前なら出来る!!」

「そつだ。俺なら……できそつな気がしてきた!!!!」

そつ言うとバギーはバギーコールをする囚人達の方に振り向き、右手を掲げながら叫んだ。

「聞きやがれエ!! ハデ野郎共オ!! この野郎は大胆にもこの俺様の顔面に傷をつけ、拳句の果てに無視をしゃがったア!!」

「ウオオオオオ!!! やっちまえ!!! キャプテン・バギー!!!」

「だが、しかアし!!! 許すことにした!!!」

「え!!!?? 何故なんだ!!!」

バギーの言葉に一瞬、耳を疑う囚人達にバギーはさらに言葉を続ける。

「確かにこいつは俺を傷つけた……だが!!!俺は白ひげの首……すなわち世界を取る男だぜエ!? そんな男がたかが顔を傷つけられたぐらいで、頭にきてたら底が知れらア!!!ここは俺の寛大な心で許してやるうじゃねエか!!!俺の夢はもつと先にあるんだからよオ!!!」

「……うっ……うっ……キャプテン・バギー……あんたって男はどこまでスゲー男なんだあ!!!俺ちゃあ一生あんたについていくぜ!!!バギー!!!バギー!!!バギー!!!」

バギーの台詞と共に囚人達は涙を流しながら、改めてバギーの存在を称え合った。

そんな光景を端から見ていた俺は……

「ホントにちよろいもんだな。白ひげとの対面でもあっさりと煽てられて、良いように丸め込まれてるし……マルコの台詞にも頷けるな。」

そう言いながらと再びルフィの方へと向き直った途端、ルフィが話しかけてきた。

「お前、スゲーなあ！！あれ、ホントの事なのか！？」

「シャンクスと兄弟分以外は全部嘘だよ。ああいうヤツは煽ててのせるのが一番良いからな。」

「へえー、やるなあ。」

感心するルフィに俺はさも当たり前のように答えた…その言葉にルフィは目を輝かせながら、改めて握手を求めてきた。

「邪魔が入っちまったけど、よろしくな！！！」

「ああ、こちらこそ。」

そう言って俺はルフィの手を握り替えした。そこへ……

「ヴァナタ、ちょっといいかしら？」

呼びかけたのはカマバツカ王国の元女王であり革命軍の幹部でもあるエンポリオ・イワンコフだった。

「何ですか？革命軍幹部のエンポリオ・イワンコフさん？」

「…！ヴァターシの事も知っているわけね。」

「ああ、インペルダウンに収監されつつも密かにレベル5・5「ニコークアマーランド」で同士を募り、決起を待っていた時に同胞であ

るドラゴンの息子ルフィが現れ、その援護をするために脱獄した…
とね。」

「そこまで知っているなんて…ヴァナター一体何者なブル？」

「俺の名前はジンドウ・シシ。それ以下でもそれ以上でもねーよ。」

「……………」

黙って俺を見るイワさんに俺も原作の知識を活用して、名乗りながらイワさんの顔を見上げた……ホントに顔デケーな…小さい子供が見たらトラウマになるぞ、これ。

「…まあ、いいわ。ヴァナターの事は後回しにするとして、目的は何？…どうしてここにいるの？」

「俺の目的はあんた達と同じエース救出…そのためにここに来た。」

俺は真剣な目でイワさんの顔を見つめ返した。

「…なぜヴァナターがエースボーイの救出を手伝うわけ？ヴァターシにはヴァナターがこの件について何にも関係ナッシブルな事のように思えるんだけど？」

「俺には関係なくてもルフィには関係がある。それに……………」

「？」

「これから命運を賭けた戦争に介入するのに戦力は一人でも多い方がいい。こつ見えても…俺は結構強いぜ？」

そう言つて俺は右手でGJをしながら自分の胸に押し当て、口の端をつり上げた。

「ほお……なら試させてもつおつじゃねえか。」

「……………!!」

一度聞いたら耳から離れないそんな声質の言葉と共に体を砂に変えて、俺の背後にクロコダイルが左手のフックを振り上げる。

「クロコダイル!!」

「クロコボーイ!!」

それに気付いたルフィとイワンコフが声を荒げる……しかし、次の瞬間!!

ドゴオン!!!!

俺は右に勢いよく振り返りながら、左手でクロコダイルの首根っこを掴み、そのまま後頭部から甲板に叩きつける。

「!!!!」

「な、何だア!!??」

「!!!!!!!!」

その光景に愕然とするルフィやイワンコフと突然の轟音に驚くバギ

「と囚人達を余所に俺は左手に力を込め、徐々に締め上げていった。」

「ぐ……！！！」

「おいおい、いきなりの奇襲は卑怯じゃねえのか？ま、海賊だからそんな事は当たり前だろうけど。」

「貴様…何故、俺の体を……！！！」

「ああ、確かスナスナの実の砂人間だったな？水がなきゃ触れないとでも思ったか？生憎だが、俺にはそんなの関係ねーよ。」

そう言つて俺はさらに力を込める……確かにクロコダイルの砂の体に触るには水や血などの水分が必要だが、俺にとつてはそんなものは関係ない…『自分に不利な効果は全て除外』つて言つといたからな。

「……………！！！」

「いいか？クロコダイル。俺はただエースを救いたいだけだ。てめえの相手はその後で存分にしてやる。だから黙つてろ……！！！」

顔をググツと近づけてそう言つと俺は左手を離した。

「（にしてもホントにすげーよな。ここまでチートな事になつてるとは……うまいけば、黒ひげが言つてた通り、『俺の時代だ！！』とかやれそうだな…そんなんやる気はないけど。）」

咳き込むクロコダイルの傍らで手をにぎにぎしながら、そんな事を考えていると……

「ヴァナタ、一体……」

「すっげえー……！……！」

イワンコフが呆気に取られる中、ルフィが目をその名の通り輝かせながら、俺の手を握りしめてきた……まず俺の世界じゃ絶対に見ることができない光景だな。

「なあ……どうやったんだ！？あいつは水がなきゃ触れねーんだ！
！」

「あー、どうって言われてもなあ………気合い？」

さすがに俺にはチートがあって何でも出来るんだとは言えず、適当に誤魔化せそうな理由を言っておく……こんな子供染みた理由で通るの心配だったが、その心配は無用だった。

「気合いかあ………しししし！！よし決めた！！お前、おれの仲間になれよ！！」

「は？」

突然の宣言に耳を疑う俺。

「何で仲間？」

「お前みたいなスゲーやつと冒険出来たら楽しいと思ったからだ！
！なあ、いいだろ？」

俺の疑問に当たり前の様に答えるルフィに俺は内心、苦笑しながらも改めてこう思った……ルフィはルフィだなと……

「まあ、待て。俺としてもその誘いは嬉しいが、今はまだ決められねえ。だから、エースを無事に助け出した後に必ず返事をする。それまではエース救出に専念する。それでどうだ？」

俺としても主人公であるルフィと冒険出来たら、これ以上の喜びはないだろう……だが、原作ではエースはルフィを庇って亡くなり、さらにその影響で精神が崩れたルフィも死ぬ一歩手前までになっている。白ひげも自分の息子達を守るために託して、死んでいった。隊長達もエースの生ける意志であるルフィを必死に守りながら戦っている……そんな未来は絶対に変えなければならない。

「ぶー…わかった。その代わりに、絶対に返事しろよな。」

「ああ、約束だ。」

お互いに顔を見て頷き合う…そこへ……

「あー、お取り込み中、悪いんだガネ？」

「「ん？」」

俺達は同時に首を向けると、申し訳なさそうな台詞の割には、メガネをクイツと上げながら話しかけてくるMr.3がそこにいた。

「君達が話している間に、さっき電伝虫に海軍の作戦連絡があったガネ。」

「！ホントか！？」

Mr. 3のその言葉にルフィがいち早く反応した。

「で！？どんな内容だったんだ！？」

「暗号は分からなかったが、最後に予定を早めてエースの処刑を執行すると言ってたガネ。」

「！！？何でもっと早く言わねーんだ！！！！」

そう言っただけでルフィはMr. 3の服の襟元を持ち、顔を引き寄せた。

「無理言っただけじゃないガネ！！君達が騒いでいたせいだガネ！！！」

「よせよ、ルフィ。」

俺は目を飛び出させながら反論するMr. 3からルフィの腕を掴んで、離させて落ち着かせる。

「こいつも親切に教えてくれたんだ。それに俺達にも原因はある。文句を言うのは筋違いってやつだ。」

「だけだよ！」

「それよりもエースの処刑時間が早まるって言うなら急ぐべきなんじゃないか？」

「ハッ！そうだった。おーい！！バギー！！！」

俺がそう言つと思ひ出したかのようにルフィはバギーを呼びにいった。そして、俺は傍にいたMr.3に話しかけた。

「悪かったな。俺が騒ぎを起こしちまったせいで重要な情報を逃すところだったよ。」

俺は素直に頭を下げた……原作じゃあ、すんなり電伝虫でエース処刑の予定変更の連絡を聞いていたが、今回に限っては俺が介入したせいで聞くことが出来なかったしな。

「気にすることないガネ。私も成り行き上、共に行動しているだけで一応、報告はしといた方が良いと思っただけだガネ。」

そう言つとMr.3はくるりと後ろを向いた……俺はそのまま構わず、話し続けた。

「だけど、あんたには期待してる。いざとなつたら頼むぜ？ボンちゃんのために……な。」

「……」

そう言う俺の言葉に少し肩が揺れるのが分かった……処刑台が破壊された時にMr.3が落下しながらも鍵を作り、そこにいる理由を打ち明けた時に俺はこいつに俺は男を感じたね。

「お前、それをどこで……」

「おーい！！シシー……！！」

Mr.3が何か言いかけた時、ルフィが手を振りながらこっちへ向

かって来ていた。

「どうした？」

「こっから滑り降りる準備をするから手伝ってくれねえか？」

「その事なんだが、俺に任せてくれないか？」

「ん？なんだ？何かあるのか？」

「ああ、あとルフィとイワさんに協力してほしいことがある。」

「？」

「アラ？ヴァターシモなの？」

俺はルフィとMr.3と同じく傍にいたイワさんの顔を交互に見やる。

「ああ、二人は俺が合図したら下の氷を破壊してほしいんだ。」

「「！！！」」

俺の提案に驚く二人。

「大丈夫、そのあとは俺に任せてくれ……頼む……！」

そんな二人に俺は真剣な顔と目つきで頼み込む……せつかくチートでここに来たんだから、それを使わない手はない……それに原作を読んで、これにぴったりの能力もあるしな。

「分かった。」

俺の熱意に動かされたのかルフィが大きく頷く。

「!!!いいのか?」

「ああ、それに俺はシシを信じる!」

そう言うルフィはバシツと左の拳を右の手の平に打ち付ける。

「麦わらボーイが信じるって言うんだツチャブルなら、ヴァターシも信じないわけにいかナツシブルね…やってみなさい。」

イワさんも腕を組みながらルフィと同じように頷いた。

「ありがとう二人共。」

その言葉に俺は頭を下げた…突然現れたこんな俺を信じてくれる二人のためにも必ずエースは助けてみせる…その決意を固くする俺だった。

「よし、じゃあ皆を集めてくれ。」

「「わかった(わ)」」

そう言うと二人は他のメンバーに声をかけに行った。数分後、メンバーが集まり、俺は船首の方へ向かっていった。

「準備はいいか?」

「おう！いつでもいいぞ！！」

「こつちも準備は出来てナブルよ。」

「ホントに大丈夫なんだろうなア！！」

「ふん……」

「……………」

俺の問いかけにルフィ達が思い思いに反応する……俺は一瞬まぶたを閉じ、勢いよく開いた。

「やってくれ！！！！」

「『ゴムゴムの』オ〜〜〜」

「『DEATH』……」

ルフィが足を振り上げて、目一杯伸ばすのと同時にイワさんも目をカッと見開く。

「『戦斧』（おの）！！！！」

「『WINK』！！！！」

ドゴオオオオオン！！！！

二人の技によって分厚い氷が割れて、艦が一瞬空中に浮き上がるが、

すぐに落下を始めようとする。しかし……

「おい、見てみるよ」

一人の囚人がおもむろに艦の甲板から下を見ると……

「この艦…浮いてるぞ!!!」

その言葉に他の囚人達も同じように下を見て驚いていた。

「よし、これで無事に降りられるな。」

俺はそんな光景を船首から眺めていた……原作を見て、俺は無事にルフィ達を降ろせないかと思った。そこで、俺が思いついたのは最新映画で『金獅子』のシキが使っていたフワフワの実の能力だった。これなら俺が触れた物なら、重力に関係なく浮かせられるからな…本来この能力で自分以外の生き物は浮かせられないが、そんな制限は取っ払ってるから本当は一人一人を浮かせて、そのまま連れて行っても良かったんだが時間が掛かるしな。

「シシ！お前、能力者だったのか！」

ルフィが同じように下を見た後に驚きながら俺に話しかけてきた。

「ああ、黙ってて悪かったな。」

「気にすんな。それに俺はシシを信じてたからな！しししし!!」

謝罪する俺にルフィは気にする様子もなく笑っていた。

「ありがとな。それじゃあ……行くぞ……!」

「おう……!」

俺とルフィの声と共に艦は下に降りていった。

S I D E O U T

〈回想終了〉

「てな事があつたよな。」

「そうだな。おかげで無事に降りられたし……ありがとな!」

ついさっきの事を話しながら、俺は処刑台にいるエースの姿を見つめた……項垂れているエースの姿についてエースの亡くなるシーンが浮かんだが、すぐに思い直した。

「ルフィ……」

「ん？」

「必ず…エースを助けるぞ!!」

「おっ……」

第02話「シシ」（後書き）

第2話が完成しましたが……長い!!!これまでの話を合わせたのと同じぐらいの長さです。申し訳ありません> (´ー´) <

自分で書いていて何なんです、長くなったなと思いました。ホントは2、3日前に投稿する予定だったのですが、いろいろと書いている内にずると伸びて今日まで掛かりました。

今回は前回の後書き通りにシシをメインに出会いを書きましたが……書けてるのかな？不安になってきた……自分の中ではシシとルフィ達の艦での出会いは重要だと思っていましたので、これは外せないなと感じました。

一番苦労したのが、ワンピースの世界観を出しつつも、シシの存在感を出すことでした。自分的には出来る限り表現したと思いますが、いかがだったでしょうか？個人的にはクロコダイルとのやりとりが書いていて一番楽しいと思いました。

さて、さっそくシシが能力を使いましたが、フワフワの実についてはこの話を書く前から頭にありましたので、これ以外には考えつきませんでした。

最後に今現在、PVは20000以上、ユニークはまもなく5000を超えます。この作品を見てくださっている方や感想・評価・お気に入り登録などをされている方に厚くご御礼します。次の話もいつになるか分かりませんが、話も長くなるかもしれませんが、応援よろしく願いたいします。> (´ー´) <

第03話「回合」

「それが貴様の答えと受け取っていいんだな！？ジンベエ！！！」

「そうじゃー！！わしゃあはもう七武海の称号はいらん！！こっからは好きにやらせてもらうー！！」

俺とルフィが会話をしている中、センゴクの確認の声と共にジンベエが七武海脱退の言葉を表明する…そのやりとりに俺はジンベエに問い掛けた。

「いいのか？ジンベエさんよ？七武海の称号を手放すって事はまた海軍の奴らに追われる事になるんだぜ？」

王下七武海の称号はいわば世界政府公認のフリーパスの様な物であり、未開地や海賊のみ略奪行為が許可されている『敵船拿捕許可状』の所持や自身にかけられていた懸賞金等もリセットされるなどの特権が付与される。唯一、その収獲の内の何割かを世界政府に上納金として義務付けされているが、その程度のリスクで済むのなら安い対価である。

但し、誰もがなれるわけではなく実力を示した者にしかこの勧誘の声はかからない…過去にエースはスピード海賊団として旗揚げし、ルーキーながら名を轟かせて誘いを受け、現王下七武海である『黒ひげ』ことティーチはエースとの死闘で勝利した実績でクロコダイルの後任として加盟した。

エースはその際に断ったが、この称号を欲している奴は海賊の中にはごまんと存在しており、ましてや自らこの称号を手放すなど皆無

なのである。

「構わん！わしは既にエースさんを救出すると決めた時から覚悟を決めとる！それにオヤジさんには返しきれない大恩があるんじゃ！それに報いるためなら称号の一つや二つ惜しくはない！！」

キツパリと言い切るジンベエに俺は彼の二つ名である『海侠』の通り名は彼の為にある言葉だなと痛感した。

「そうか…そこまでの決意ならもう何も言わねえよ。」

「礼を言う…シシ君。そして、すまぬ……」

「？」

そう言いながら、ジンベエは俺に向かって頭を下げた。

「わしはいきなり君が現れた時、最初は得体の知れない奴じゃと思つた。だが…それと同時に君には何か希望に似た様な物を感じたんじゃ。」

「……………」

「わしはこの戦争を死に場所と決めとる！わしはここで倒れても構わん！！だが、エースさんだけは助けたいんじゃ！！オヤジさんやルフィ君のためにも！！力を貸してくれ！！！」

そう言つて、ジンベエは目を閉じ、さらに頭を深く下げた……その光景に俺は……

「…頭を上げてくれ、ジンベエ。」

「……………」

「最初にも言ったが、俺の目的はエースの救出だ。例え、あんたに怪しまれようがしまいが、俺は必ずエースを助け出す…!!……………それだけは信じてくれ。」

今度は逆に俺がそう言って頭を下げた。

「シシ君……………かたじけない。」

俺の言葉にジンベエは感謝の意を示すかのように礼をした。

「さて……………まあ、頭を下げるのはこれぐらいにしてとっととエースを……………」

そこまで言いかけた時……………

「あんにやる!!…いつの間にあんな所に!!…抜け駆けは許さねえぞ!!……………」

そんなバギーの声が聞こえ、その方向に視線を向けるとクロコダイルが体を砂に変えて、白ひげを討ち取るうと背後からフックを構えていた。

「クロコダイルの奴!!…オヤジの首を!?!…」

「危ねえ!!…オヤジ!!……………」

戦場にいる団員達が『白ひげ』の危機に気付き、声を荒げる。

「チツ……あの野郎！」

俺は舌打ちすると、掌にくまが持つニキュニキュの実の能力である肉球を出現させ、空気を弾いて超高速移動でクロコダイルの前に立ちはだかり、フックの腕を弾き返した…と同時にルフィが足が濡れた状態で同じようにクロコダイルの前に立ちはだかった。

「！！！」

思わぬ展開にクロコダイルは驚いて、俺達から距離を取って身構える。

「俺との協定は火拳の救出のためインペルダウンからの脱獄と戦争に参加するためここ海軍本部へ来ることはず……その協定が達成された今、なぜお前らが白ひげをかばう？」

「！やっぱりこのデカいおっさんが『白ひげ』か。エースはこのおっさんを気にいつてんだ！！手は出させねえ！！！」

「…協定が達成されてるって言うなら、ここから何をしようが俺の勝手だろ？」

そう言いながら構えをとって、俺はチラリと『白ひげ』の背中のコートに描かれた白ひげ海賊団のマークを見る…エースを救出するのが最優先だが、出来れば『白ひげ』も死なせたくないとも俺は思っていた。『白ひげ』がガキの頃から欲しがっていた『家族』……その『家族』を過去に1人失い、目の前で新たに1人失った…その原因がどちらも同じ人物である『黒ひげ』に自分の命を懸けても、仇

を取ろうとした。

だが、仇を討つことは出来ずに最後は『家族』に感謝して逝った…
『白ひげ』は満足かもしれないねえが、残された『家族』を思うなら
何が何でも生きるといふ選択肢もあったと思う…だから俺は考え
てしまう…エースが助ければ、そんな選択すら必要とせずには仇を討
てたかもしれない…と。

「おい小僧共…」

その時、背後から白ひげから声を掛けてきた。

「そっちの麦わら帽子…昔、『赤髪』が被ってたやつにそっくりだ
な。」

昔、ロジャーと戦った時に麦わら帽子を被った赤髪の青年の姿を白
ひげは思い出していた。

「！おっさん、シャンクスを知ってんのか？これ、シャンクスから
預かってんだ。」

「そうか。…それとそっちの白銀の小僧…お前、名前は？」

「俺はシシ…ジンドウ・シシだ。」

そうやって俺は構えを解き、『白ひげ』に向き直った…改めて正面
から見ると、その体の大きさと威圧感に多少だが驚いた。

「（これが四皇の一人か…さすがだな…）」

「シシか…どっかで見たことある顔だと思ったが、昔の『赤髪』に似てやがるな。」

「俺は別にそうは思っていないけどな（まあ、ホントは嘘だけだな）。

」

「……まあいい。それとお前ら、エースを助けに来たのか？」

「そうだ！！エースは俺の兄貴なんだ！！」

ルフィは鼻息を荒くしながら、臆する事なく答える。

「…俺がこの戦争に参戦する目的はエースの救出だ。あいつは死なせたらいけない存在……もちろん、こっちにいるルフィも…な。」

そう言って俺は指の代わりに首でルフィを指した…その時…

「お前ら、相手が誰だか分かってんのか？おめえら程度のカリヤ戦場に出ても、命はねえぞ！！」

白ひげが怒気を含ませ脅しにも似た言葉で俺達を威嚇するが、ルフィは…

「うるせえ！！そんな事はお前が決めるんじゃないやねえ！！そして、おれは知ってたんだ！！お前、『海賊王』になりてエんだろ！？『海賊王』になるのはこのおれだ！！な？シシ！！」

「……………！！」

「(え~~~~~~~~!!!!???)」

「
あの『白ひげ』に対して、全く怯みもせず『海賊王』になることを宣言し、同意を俺に求めてくるその態度に思わず海賊や海兵達が驚きを見せる。」

「クククツ…ルフィ、お前ホントにすげーよな？あの『白ひげ』に対してそんな事言えるのここじゃお前くらいなんじゃねえのか？」

俺は笑いを堪えながら、ルフィの肝の大きさには感心していた…何しろ世界最強の大海賊で、『ひとつなぎの大秘宝』に最も近いとされている男だ。その名でさえ、聞いて恐怖する海賊もいるというのに、それどころかお前やおっさん呼ばわりして『海賊王』になるとライバル宣言とも取れる発言まで飛び出しのである…まあ、その大海賊の前で笑いを堪えている俺も我ながらスゲーと思うが…。

「まあ、それくらいの度胸がなくちゃな…と、言うわけだ。『白ひげ』！あんたが何を言おうと構わないが、俺達の邪魔だけはするなよ？」

「（またまた、え~~~~~）~~~~~！！！！
????）」

「！！……………」

笑顔で言う俺にまたも海賊や海賊達が驚きを見せた。あまりの俺達の発言にこめかみに青筋を立てる『白ひげ』だが……

「…クソ生意気な……………」

ニヤリと笑い、口を開いた。

「グラララララー！俺の前でそれだけの事を言ったんだ！もし、足手まといにでもなったら容赦しねえぞ！ガキンチョ共が！！！」

「おれはおれのやりてえ様にやる！！エースは俺の兄貴だ！！俺が助ける！！！」

「そつちこそ、無理して体壊すんじゃねーぞ！！！」

笑う『白ひげ』の手荒い言葉にも俺とルフィは戦いの準備をしながら、そんな事は関係ないかの如く言い返した。

「（『白ひげ』に張り合つとるー！！！？何なんだ、あの2人は！！！！）」

「……………！！！」

一連のやりとりを見ていたイワンコフとバギーは冷や汗をたらだら流しながら、口をあんどり開けて同じ事を考え、他の奴らもあまりの事に言葉が出ず、口から泡を吹いていた。

「それと一つだけ言っておくことがある。」

「？」

俺は海軍の作戦連絡に『エースの処刑時刻が早まる』という事を伝える。

「エースの処刑時刻が早まる！？確かにそう言ったのを聞いたんだ

な!？」

「ああ、間違いない。」

「おれも聞いたぞ!!何か準備ができてからと言ってたけど、他は暗号とかでよくわかんなかった。」

『白ひげ』の問いに俺とルフィは共に肯定の言葉を放つ。

「そうか…それは重要な事を聞いた…すまねエな!」

「いいんだ!!気にすんな!!」

「俺達の目的は一緒なんだ。これくらいの情報は共有しといた方がいいだろ?」

まるで(ある意味)仲間の様な会話を俺とルフィはニツと笑ってしたが、他の奴らは……

「……(何であんたら『白ひげ』とタメ口張ってんだー……!!……)」

もはやこれしか言葉が浮かばないと言ったぐらいに混乱していた。

「シシ!!おれは先に行くから、あとで来いよ!!エース!今助けるぞ!!……おおおおお!!」

「えっ、あ、おい!ルフィ!!」

言い終わるや否や俺の呼びかけを無視してルフィは叫び声を上げな

がら、戦場へと突入していった。

「はあー…ったく、いきなり突っ込む奴がいるかあ？……いや、ルフィならあり得るな。」

溜息をつきながら、やれやれといった感じで俺は首の骨をコキッと鳴らして再びフワフワの実の能力を使って浮かび上がる。

「……！」

「んじゃ、俺も行くとするか。ルフィの負担を少しでも減らしたかねーとな。」

「待て、シシ。」

ルフィの目の前の敵を片付けるために向かおうとした時、『白ひげ』が俺を呼び止めた。

「何だ？」

「お前……一体何者だ？」

「何者って…ただの『海賊』だけど？」

『白ひげ』の質問に俺は戯けて答える……しかし、『白ひげ』はそんな答えでは納得しないかの様にこちらを睨みつけていた。

「その能力は昔、シキの野郎が持ってやがった能力だ。あの馬鹿は今どこで何をしているのか知らねえが、まず同じ能力を持つ奴はいねえ。それにさっきもここへ来る時に何か能力を使っていたな。」

「！！！」

くまの能力を使ったのは一瞬だったはずだが、そこまで見抜いているとは……伊達に四皇と呼ばれている訳ではないらしい。

「まあ、お前が正体を明かしたくねえならそれでもいい。だが……！！！」

そう言つて『白ひげ』は手に持った薙刀の勢いよく振り、刃先を俺の目の前にで止める……その影響で髪の毛が何本か切れてハラリと落ちた。

「あれだけ大口を叩いてもし俺の息子を助けられなきゃ、そんな時は俺がお前の命を取る！！それだけは覚えておけ！！！」

「……ああ、覚えておく。心配すんな……それじゃあな」

鋭い眼光で覇気を出す『白ひげ』に俺は徐々に高度を上げ、ルフィが飛び出していった方向と同じ方へ飛び立った……同時に青い炎を纏った男とすれ違ったが、おそらく1番隊隊長のマルコだろう。

おそらく『白ひげ』にエースの処刑時刻が早まるとの情報を伝えるつもりだ……2人が話しているのを一瞥した俺はスピードを上げた。

SIDE 白ひげ

「オヤジ！海兵達に入った通信でエースの処刑を予定を無視して始めるって情報が…！」

「ああ、聞いた…」

俺はシシと入れ替わりに来たマルコからの情報に耳を傾けていた。

「聞いた…と言うとあの2人からかよい？」

「ああ、そうだ。」

そうやって俺とマルコは飛び去っていくシシと戦場に突っ込むルフィを見る。

「しかしオヤジ、エースの弟はともかくあっちの白銀の男は何者なんだよ！あんな男は見た事も聞いた事がないよい。」

当然の様にシシの事を質問してくるマルコに俺は知る限りの情報を教えてやる。

「あいつの名はジンドウ・シシ…能力者だ。」

「ジンドウ・シシか。まあ、確かに能力者というのは見れば分かるが…」

「まあな。だが、マルコ…あの能力、見覚えがねえか？」

「?…あんな能力見たこ…!!!」

そんな時、マルコは何かに気付いたかのような表情を浮かべて俺に詰め寄った。その表情は自分の中にある記憶がほぼ間違いない事を物語っていた。

「だが、おかしいよい…! 悪魔の実と同じ物は存在しない…あり得ない事よい!」

「俺もそうは思ってる。だが、もっとあり得ない事を俺は見ちまっ
た。」

「?」

慌てるマルコに俺はさらなる衝撃の発言を続けた。

「あいつはあの能力以外にもう1つ能力を使いやがった。」

「!!!!」

「驚いたようだな。俺もさすがに目を疑ったが、紛れもない事実だ。」

「……………」

黙り込むマルコ。そりゃあそうだ…悪魔の実の能力は1人1つまでというのは決定事項だ。それを無視するなんて事はいえねえ事だ…しかし、俺は……

「……………マルコ、俺はあいつを信じて見ようと思う。」

「オヤジ!？」

驚いた表情で俺の顔を見るマルコ。

「確かにあいつを見た時、何か得体の知れない力があるのかもしれないと感じた。だが、同時に何かを成し遂げてくれるような物も感じたんだ。」

「……………」

「お前が不審がるのも分かる…だが、ここは俺を信じろ。なに、もしエースの救出が失敗したら、あいつの命を取ると釘も刺してある。」

そう言って俺はマルコの肩に手を置いた。

「オヤジ……分かったよ。」

マルコはそう言って頷くと俺を守るように前に立ちはだかった。

「(さあ、俺にここまでさせたんだ。お前の力…俺に示してみろ!」

「！！」

俺は激しくなる戦場に再び視線を向けた。

S I D E
O U T

第03話「回合」（後書き）

第03話が完成しました。今回は白ひげとのやりとりを描いてみました。

白ひげも個人的には好きなキャラでしたので、出来ればあんな結末になってほしくないと思いました。文才がまだまだ未熟な私ですが、これからもよろしくお願いいたします。

次回はいよいよシシが戦争に参加します。が、今考えている内容として

- ・ルフィをサポートしつつも、シシが暴れていく。
- ・ルフィとは別の場所でシシが暴れていく。

この2つのどちらにしようかと悩んでいます。もし希望がありましたら、感想までお願いします。

第04話「参戦」(前書き)

総合PV80000、ユニーク13000を突破いたしました!!
皆様、ありがとうございます>>「——<<
これからも応援よろしくお願いいたします。
それでは第04話をどうぞ。

第04話「参戦」

「さてと、ルフィの負担を減らすとは言ったが……俺はどうするかねえ。」

俺はスピードを緩め、徐々に下へと降りていく中、腕を組みながら戦場を見回してみる……両軍共に入り乱れて銃弾や砲弾が飛び交い、ガキン！と刃がぶつかり合う音があちらこちらから聞こえてくる。

その中にルフィが雄叫びを上げながら、エースの処刑台へ向かう姿が見えた。

「（ルフィに関しては、イワさんやジンベエに任しても大丈夫だろう。それに白ひげ海賊団の隊長達も援護も入るから、結果的に処刑台には辿り着けるわけだし……）」

俺は下手にルフィをサポートしながら戦うよりも、俺個人が敵を引きつければ多少なりとも手助けになるだろうと考え、それを実行に移すことにした。

そこへ……

ズウン！！！！！！

巨大な轟音と共に爆発が起こり、その余波がこちらにも伝わってきた。

「おっと、こりゃ『黄猿』のレーザーだな。全く、いくら天竜人に急かされてるからってここまでやるか？味方の兵もいただろうに……」

…つとー!!」

俺が黄猿の無茶苦茶な行動に呆れていると突然の爆発の中からレーザーが現れ、俺は軽くステップを踏むかのように避けた。

「おゝ、今のを避けるとはねエゝ。」

間延びした声でハイキックの体勢で黄猿が俺をサングラス越しに俺を見ていた。

「おいおい、挨拶もなしか?」

「海賊相手に名乗る必要もないからねえゝ。まあ一応言っておくけど、わっしはボルサリーノ…海軍大将で『黄猿』なんて呼ばれてるがねえ。君、麦わらのルフィと一緒にいた男だよねゝ?どこの誰だか知らないけど、死んでもらうよおゝ。」

そう言つて黄猿は人差し指をこちらへ向け、光を収束してレーザーを放ってきた。

「ふうー……『偏光』（デフレクション）。」

「?」

いきなりの攻撃にも俺は軽く溜息をつくつと、両手を前に突き出して身構えた。その光景に黄猿も疑問を感じたが、次の瞬間……

キュインー!!

「!?!」

俺に向かって放たれたレーザーは目の前で別方向に逸れて、他の場所へと着弾して爆発した。その光景にさすがの黄猿も驚きの表情を見せた。

「お〜！ビックリしたねエ〜。今のは何なんだい？」

「何、ちょっと光の軌道を変えただけだ。」

ニヤリと笑う俺の前には薄い透明の板の様な物が展開されていた。それを見た黄猿は当然の質問を俺に投げかけた。

「お前さん、能力者かい？」

「ああ、これは『タテタテの実』の能力。あらゆる盾を作ることが出来る『盾人間』とでも言っておこうか。」

これは俺の世界でネットで名前は創作されていた物だが、内容は少しアレンジした物だ。この実の能力は自分の前に盾を作ることが出来る、その用途は様々な物に応用が出来る物だ。今のはエネルギーフィールドを展開することによって、レーザー等の光線を屈折させる事が出来る『偏光シールド』と呼ばれる架空物を真似た物である。但し、この能力で作った盾は攻撃を受けると徐々に耐久力が下がっていく上、自分の前面にしか作ることが出来ない。そして、一度盾を作ると破壊されるまで次の盾を作ることができないのだが、そんな条件はチートの俺には関係ない。

そう言っただ俺は目の前の盾を解除して、黄猿を睨みつける。

「面白いねえ、名前を聞いておこうか。」

「俺はジンドウ・シシ。目的はエースの救出だ！」

「麦わらのルフィと同じ目的だねえ。ところで、今君は浮いているけどそれも君の能力かい？ だったらおつかしいねえ、悪魔の実は1人1つのはずだよ？」

「さあな？ それを教える義理はない。」

「そっかい？ それじゃあもう一つ聞くが……」

そう言うと黄猿は体を変えて、俺の背後に回り込み、シャボンディ諸島でバジル・ホーキンスに言ったセリフを口にする。

「速度は『重さ』…『光』の速度で蹴られたことはあるかい？」

同時に黄猿の蹴りが俺のこめかみに向かうが……

スカッ！！

「!?!」

蹴りはこめかみを通過し、振り抜いた後の足を覇気を出して俺は掴み、そのまま全力で氷の地面へ投げつけた。

「え……!?!黄猿さん!?!」

「あそこにいるぞ!!! 撃て!!! 撃て!!!!!!!」

戦っていた海兵達は仰向けに倒れている『黄猿』の姿に驚き、俺の方へ視線を向けると銃撃や砲撃を浴びせるように撃ちまくる。

「悪いな、いくら『光』の『重さ』で蹴ろうが『幻』相手じゃ意味はない…じゃあな。」

俺は飛んでくる銃弾や砲撃を躲しながら、さらに先へ進むため再び移動を開始した。シシが黄猿の蹴りを躲したのは『イリュイリュの実』の能力であり、自分を『無いもの』としたためである。つまり黄猿はシシがそこにいるつもりで蹴りを放った訳だが、シシは自分を『幻』の状態としてその蹴りを躲しただけなのだ……どんなに強力な攻撃であろうと、そこに対象がいなければ意味がないのである。

しかし、この実にも弱点はあり、能力を使用している間は一切動くことができない。つまり防御については効力を存分に発揮できるが、反撃などを行う場合は必ず実体になる必要があるので危険を伴うのだが、言わずもがなシシには適用されない。

「大丈夫ですか！？黄ざ……あ。」

シシが去った後に海兵達が黄猿の安否を確認するために駆けつけるが、何事もなかったかのように黄猿はスタスタと歩いていく。

「んんん、腹が立つねエ。」

そんな言葉と言う黄猿の顔は笑っているが、その周りには怒りのオーラが立ちこめており、思わず海兵達は黙り込んでいた。

「しっかし、厄介だねエ。あー、誰かいるかい？」

「ハッ！は、はい！！！！」

黄猿の呼びかけに、1人の海兵が慌てながら返事をして敬礼をする。

「中将達とその他の部隊に通信を入れてくれるかい？あとセンゴクさんにもねー。」

「わ、分かりました！！」

そう言つと海兵は通信を入れるための準備を始めた。

一方、処刑台ではセンゴクとガープ、それにエースがどんどんと突入してくる白ひげ海賊団と海兵達の戦い、そしてルフィの姿を見て

いた。

「ルフィ……みんな……」

悲痛にも似た表情で弟と仲間の心配をするエース。そこへ……

「センゴク元帥!!」

「…どうした?」

連絡兵がセンゴクの元へ慌てた様子で駆け寄ってきた。

「ハッ!黄猿大将からの通信が入りまして、その報告にと!!」

「分かった、聞こう。」

「はい!湾内にて、『麦わらのルフィ』の隣にいた白銀の男と接触し、戦闘を行ったそうです!!」

「!!」

その報告にセンゴクはやや驚きはしたものの平常を保ったまま、次の報告を待った。

「名前はジンドウ・シシ!目的は『麦わらのルフィ』と同じくエース救出だと思われまます!!」

「そうか…で?その男は捕らえたのか?」

「いえ…それが……」

センゴクが男の捕縛について確認すると、連絡兵がたまらず言い淀んだ。その様子にセンゴクは違和感を感じ、問いただした。

「?どうした?早く報告しろ。」

「黄猿大将を退け、そのままこちらへ向かっているそうです。」

「何だと!?!」

この報告にさすがのセンゴクも驚きを隠せず、連絡兵に詰め寄った。海軍本部最高戦力とも称される存在であり、その実力は海軍のみならず海賊達にも知られている存在……それを相手に退けるなど並大抵の事ではない。

「あと……もう一つ報告が……」

「!?!……今度は何だ?」

「はい。これは自分も信じられないのですが……黄猿大将が言うにはその男は悪魔の实の能力を複数使ったとの事です……」

「!?!?!」

「あの黄猿大将が嘘をつくとは考えられません……ですので本当の事かと思われませぬ。」

恐る恐る答える海兵に苛立っていたセンゴクは声にならない驚愕の表情で青ざめていた。

「なお、中将達やその他の部隊にも通信を入れておりますので、じきに対応できるかと思いますが……」

「なるべく早急に対処させろ！！準備が整うまで保たせるんだ！！」

「ハッ！！」

センゴクの苛立った声に連絡兵は敬礼をして再び戦場へと戻っていった。

「（いったい何だと言った……！！あの男は……！！）」

「いたぞ！！報告にあった男だ！！」

「何としても討ち取れえー！！！！！！！！」

センゴクが海兵からの報告を受けたのと同時刻、シシは処刑台からやや右に逸れた場所から広場に向かって移動していた。その道中に『黄猿』から連絡を受けたであろう部隊がシシの姿を確認すると、銃や刀を手に襲いかかってきた。

「どうやらうまくいったみたいだな…『鉄塊』!!」

俺は飛んでくる銃弾を鉄の甲殻まで固めた体で受け止め、さらに……

「くらえええ!!!」

「『紙絵』!『獣蔵』(ジユゴン)!!」

「ぐお!？」

刀で斬りつけてくる海兵の攻撃をヒラリと躲し、カウンターでCP9のフクロウが使っていたパンチを繰り出し、仕留めていく。

「な!?何なんだ!あの男は!!」

奇妙な技を使う俺に周りの海兵達が思わずたじろいでいく姿に俺は満足気に見ていた。

「六式はCP9が修得している物だからな…一部の海兵を除いては知らない奴もいるだろうな。しかし、まさか『黄猿』の奴も自分が利用されたなんて気付いてないんだろうな。」

俺はボソッと独り言を言った……なぜ、あの時に奴を仕留めておかなかったのか?その理由は単純明快…俺の存在をアピールするためだ。あの大将を退け、さらに能力をいくつも使えば海軍にとっては、

包囲壁展開とパシフィスタによる追撃作戦に支障をきたす事になり、もし今の段階で作戦を中止すれば、いずれは『白ひげ』が広場の上陸し、猛威を許すことになる…その前に俺をどうにかしなければいけないと考えるだろう。

「（まあ、俺のこんな考えなんか成功確率の低い…というかすぐにバレルもんだと思っていたが…：儲けものだったな）」

そう考えていると……

「来るな！！ルフィーーーーー！！！」

エースの声が戦場に響き渡る……その後「これは俺の問題だ」「おれにはおれの仲間がいる」などルフィーの行動を責めるものばかりだったが、心の中では弟を道連れにしたくない…兄貴らしい事をしやりたいという思いを秘めていることは誰の目にも明らかだった……しかし……

「おれは弟だ！！！！！」

そう叫ぶルフィーはどんどん敵を倒しながら進んでいく…その最中にセンゴクがルフィーの出生を明らかにし、皆が驚く中、ルフィーはさらに言葉を続けた。

「好きなだけ何でも言えエ！！おれは死んでも助けるぞオオオオ！！！！！！」

ルフィーは一度自分で決めた事は意地でも変えない…それを一番よく知っているエースは唇を噛んで俯いた。

「やめとけエース！！！！ルフィは一度決めた事はやり遂げるまで止まらねえよ！！！！」

「……………！！！！！！！！！！」

「！！あなたは……………」

「シシ！！」

俺の叫びはルフィやエース、海軍と海賊両方に届き、どちらも俺の方へと視線を向ける。

「俺はジンドウ・シシって言うモンだ！！今はあんたを救出するためにルフィ達と共に行動している！エース！！あんたは自分の弟や仲間が危険を顧みず、必死になってあんたを救おうとして伸ばしている手を拒むのか！？」

「だが、俺は……………」

「いつまでも悩んでんじゃねえ！！！！これだけは言っておくぞ！！！！あんたが誰の子供だろうが、あんたはあんただ！！！！皆、それを分かっただけだ！！お前が望んだ物は目の前にあるんだ！！！！」

「そっだぜえ、エース！！！！俺達はお前を助け出すぞ！！！！」

「諦めるんじゃねえ！！！！」

「待ってるエース……………！！！！！！！！！！」

「……………！！！」

俺の叫びに続けと言わんばかりに白ひげ海賊団やその傘下の海賊達から声が上がリ、その光景にエースは目を少し潤ませた。

「『ホワイト・ランチャー』！！」

「お？」

突如、俺に向かって煙が迫り、十手を俺の胸元に押しつけてそのまま仰向けに倒した。

「お前だな？報告にあつた『麦わら』の隣にいた男は？」

厚手のジャケットに葉巻を加えた白髪の方がこちらを睨みつけてくる。

「ああ、さつきも言ったが俺はジンドウ・シシだ。初めましてかな？スモーカー准将？」

「ああ、いきなりで悪いがお前を始末させてもらう！」

そう言つてスモーカーは手に持った十手にググツと力を入れる…まあ、俺にとっては初めてではないし、俺にとってはこんな物、何の役に立たないんだが……

「へえー…海楼石入りね。」

「ほう、よく気がついたな。お前がなぜ2つ以上の能力を使えるのは知らねえが、能力者ならこいつは効くだろ？」

海楼石が効いている演技をしながら、俺はなぜスモーカーがここにいるのかを考えていた。確かこいつはルフィの進路上にいたはずだが……

「ところで、俺なんかに構ってていいのか？ルフィを叩き潰すんじゃないのか？」

「！！どうして、お前がそれを……まあいい。報告を聞いた時から興味が出てな…一度顔を見ておきたいと思っただけだ。『麦わら』ならあとで始末する…あいつの能力じゃ俺には勝てないからな。」

スモーカーがそう言うのと俺は納得した。なるほど、俺が登場したせいで原作がさっそく変わってきているのか。まあ、『黄猿』が仕掛けてきた時点ですでに変わっているが……

「なるほどな。ああ、それと……」

「あん？」

「俺にこんな物通用しないから。」

そう言っただ俺は覇気を出しながら、スモーカーの横つ面を全力でぶん殴って吹き飛ばした。

「！？」

突然の出来事に驚くスモーカーに俺は何事もなかったかのように起き上がりシャツやズボンについたホコリを叩いた。

第04話「参戦」（後書き）

仕事が終わってからちよつとずつ書いていた第04話が、やっと完成しました。

今回はやっとシシが戦闘に介入しました。前回の提案で「ルフィとは別行動」という意見を採用させていただきました。やっぱり、別行動を書くのは難しかったです。しかし、やりがいもあったので良かったと思えました。協力していただいた方々、本当にありがとうございます。なお、キャラクターの話し方や性格についてはやや変わっているかも知れませんが、よろしくお願いいたします。

最後に今回出てきた悪魔の実を紹介したいと思います。

名前：タテタテの実

種類：超人系パラミシア

能力：いろいろな盾を作成することができる。

備考：作る盾によっては耐久力が変わり、攻撃を受ける度に耐久力が減少する。

自分の前面にしか展開できず、盾が破壊されるまで次の盾を作ることができない。

名前：イリュイリュの実

種類：超人系パラミシア

能力：自分の体を『幻』にすることが出来る。

備考：幻になった場合、いかなる攻撃も受け流す事が出来る。

この能力を使用している間は一切動くことが出来ず、動けば能力は解除される。

（自然系ロギアではないのは、自らの意志で幻になっているため）

第05話「奮闘」

「スモーカー准将!!」

「あいつ！何で海楼石が効いてないんだ!？」

「能力者なんじゃないのか!？」

周りにいた海兵が驚きの声を上げる中、スモーカーは体勢を立て直す、十手を俺に向けて威嚇するように俺を睨みつける……その額には冷や汗が滲んでいる。

「くっ…！てめえ、何者だ!？」

「へえ、あんたでもそんな顔するんだな？」

「ふざけるんじゃないやねえ!!能力者であるなら、海と同じエネルギーを発している海楼石は弱点のはず!!それをお前は弱るところか、逆に『煙』の俺に攻撃をしゃがった!!答える!!」

軽いノリで言ったつもりなのに、怒りを露わにしてギリッと葉巻を噛み締めるスモーカーを見ながら俺は頭を掻いた。

「まあ、あんたに攻撃できたのは『覇気』を使ったからだ。」

「!?!『覇気』だと…あの女と同じか。」

おそらくハンコックが持つ九蛇の『覇気』が頭に浮かんだのだろう…やや納得した表情を見せた。

「それと海楼石についてだが……」

そう言つて、拳を鳴らしながら、俺は腰を屈めて戦闘態勢に入った。

「知りたきゃ力ずくで聞いてみる!! 『剃』!!」

「くっ!!」

俺が一気に間合いを詰め、パンチを繰り出すとスモーカーは十手で攻撃を受け止めた。その間にも、俺は脇腹を狙つて、回し蹴りをするが……

「無礼るな! 『ホワイト・ブロー』!!」

スモーカーは強引に十手で俺の手を弾くと、続けて俺に目がけて自身の腕を煙状に変えて攻撃を仕掛けてきた。

「よっ!!」

俺は上に飛んで攻撃を避けると、スモーカーの首に狙いを定めて蹴りを放とうとする。その姿を見たスモーカーは体を煙にして受け流そうとするが……

「おらぁ!!!!」

ドガッ!!!!!!!!

「!!!!」

強烈な音と共に俺の『覇気』を持った蹴りがスモーカーの首に決まり、そのまま振り抜くとスモーカーは膝をついた。

「言っただけだぜ？俺は『覇気』を使う……と」

「ハア……ハア……！！」

「確かにあなたの海兵としての実力は相当なもんだ。ルフィが苦戦するのも分かる……だが、あんたじゃ俺には勝てねえよ。」

首を押さえて、顔をしかめながら息を荒くするスモーカーの前で、俺は俺との実力差を口にするとうっかりと立ち上がり、再び十手を俺に向けて再び口を開いた。

「随分と余裕があるじゃねえか……！！だが、例え実力差があろうが、俺は海兵として己の信じる正義に基づいて……お前を始末する……！！」
「ホワイトスネーク……！！」

「『剃』……！！」

腕全体を蛇状の煙にして襲いかかるも、俺は間合いを取って体勢を整えた。

「そうか……分かった。だが、こっちもエースを助けるために引くわけにはいかないんでな。特別に面白いものを見せてやるよ。」

そう言うと俺は目を閉じて、力を入れ始めると顔と体を白い毛が覆い、口には牙が生え始め、尻尾が伸び始めた。

「……！！？」

「おい！！何だ！！あの姿は！？」

「あんなの見た事無いぞ！！」

スモーカーと周りの海兵が俺の姿に驚いている間にも俺の体は通常の倍近い大きさとなり、手足には巨大な爪、顔には黒の模様が表れていた……その姿はまるで……

ガオオオオオオオオオン！！！！

俺が口を開けて雄叫びを上げると、大気が震えて周りにいる海兵達が思わずたじろいた。

「てめえ……その姿は……！！」

「『ネコネコの実』……モデル『白獅子』（ホワイトレオ）。悪いけど時間が勿体ないんで……すぐに決着をつけさせてもらう！！』剃！！」

さらに睨みを鋭くするスモーカーだったが、その前に俺は突進しながら両手の爪を出して、上から下に振り下ろすようにに引っ掻いた。

「『爪研』（つめとき）！！」

「（ちっ！速い！！）ガフッ……！！！！」

「『スモーカー准将！！』」

先程よりも素早い行動にスモーカーは驚き、攻撃を防ごうとするが、

一歩及ばずその攻撃をまともに受けて傷口から血を出しながら、後ろに倒れ込む姿に海兵達が彼の名を叫んだ。

その後、俺は人獣型から人型に戻ると、気絶しているスモーカーに歩み寄ってそばに落ちていた火のついた葉巻を加えさせた。俺にとつちゃあ、スモーカーは嫌いな人物ではない…己の『正義』を信じるあまりに民衆に冷酷な行動を取る奴や利益目当てで動く正義のかけらもない奴もいる中で、この男も己の『正義』を信じているが、それを民衆に向けることは絶対にせず、アラバスタでルフィ達に助けられた借りは返すほどの男である…そんな男だからこそルフィにも好かれているのだらう。

「だが、あんたには悪いがここは通らせてもらうよ。エースを死なせるわけにはいかないからね。」

倒れているスモーカーの横を通り、再び先へ向かおうとした時……

「待て。」

俺を呼び止める声と共にザツつと俺の前に1人の男が立ちはだかつた…世界最強と言われる黒刀『黒』を手に持ち、鷹のような鋭い目つきでこちらを見ている姿を見て、俺はやや驚きながらもその男に声を掛けた。

「まさか、あんたもここに来るとはね……『鷹の目』!!」

一方、その頃ルフィ達は次々と周りにいる海兵達をなぎ倒して、エースのいる処刑台へと向かっていた。

「んにやるお!!」

また1人襲いかかってくる海兵にルフィは蹴りを入れて吹き飛ばした。

「ハア……!!キリがないな!こりゃ……せっかく、あいつに鍵をもらったのに!」

そう言っただけで走りながら、手に持った鍵を見る……先程、隙をつかれて一気に襲いかかってくる海兵達に、ハンコックが『スレイファロー膚の矢』で石化させた後、エースの手錠を手渡してくれたのだ……その時、ルフィは感激のあまりに思わず抱きついて感謝した。

「そついやあいつ倒れてたみたいだけど、大丈夫か？」

そう言つて少し後ろを見るルフィ……ルフィが離れた後、膝をつくハンコックの姿を見た海兵達は『鯖折りだ！ぶち嘸ましからの鯖折りだ！』とか言っているが、実際は全く違う状況だったということに気付く者は本人しかいない。

「『麦わら』……！」

「ん？」

走るルフィの前方に刀の柄の部分で両手で握つて構えている女海兵……海軍本部少尉のたしぎの姿があつた。

「お前、確かケムリンと一緒にいた……！」

「あなたは私が止めます……！」

見覚えがある顔にルフィは走るのをやめる……その間にたしぎは刀の峰を顔の横まで近づけて戦闘態勢を見せる。その姿にルフィは警戒するが、とある疑問が浮かび、たしぎに声を掛けた

「そつ言えばケムリンはどうしたんだ？」

「……あの人なら別の……ジンドウ・シシの所へ行きました。」

「シシ？」

「ええ、報告を聞いた後に『興味がわいた』とか言つて……だから、

あの人がここに戻るまでの間、あなたの相手をします!!」

刀をさらに強く握るたしぎの姿にルフィは……

「そつか!! なら大丈夫だな。」

「!?!」

ニツと笑いながら答えるルフィにたしぎは驚き、刀を構えたまま質問する。

「大丈夫とはどういうことですか!!」

「シシなら大丈夫だって言ったんだ。」

「!?!……スモーカーさんが負けても言いたいんですか!?!」

ルフィの答えにたしぎがやや怒りを見せながら、声を荒げた……自信の上司であり、その実力も重々理解しているたしぎにとつては、多少実力のある海賊に負けるわけがないと思っっている節もあった。

「シシは強いからな。」

「!?! もついいです!!」

自信に満ちたルフィの言葉にたしぎは会話を打ち切り、そのまま斬りかかる。

「こんなとこで立ち止まってるわけにはいかねえ!! 『ギア2』!」

ルフィは両足をポンプの代わりにして血流を加速させると全身から蒸気を噴き出し、一瞬にしてたしぎの攻撃を躲して先へと進んだ。

「まさか『王下七武海』の奴がここに来るなんてな……」

俺は凄まじい威圧感を発しながら、獲物を見るかのような『鷹の目の姿に思わず武者震いをした…この男も原作ではルフィの前に圧倒的な力でエース救出を阻んだが、白ひげ海賊団5番隊長『花剣のビスタ』によつて足止めをくらい、結果的にルフィの進行を許してしまったのだが今回はルフィを追わずにこちらの方へと出てきたの

である。

「なるほど…俺の剣士としての直感は正しかったな。その心力の強さ……『強き者』だな。」

「!! 『鷹の目』にそこまで言われるとは…恐れ入るね。」

黒刀の切っ先を俺に向けて、強敵と認識する言葉に俺は謙遜して言葉を返した。バラティエで初めてゾロと対峙した時に最初は『弱者』として短刀で相手をしていたが、ゾロの心力の強さに『強き者』と認めて、剣士として黒刀『夜』でゾロを沈めたが、初対面の俺に初っ端から『強き者』と呼ぶとは……

「俺も認められたってことなのかな？」

「お前には何か心力の強さ以外にも秘めた物があると感じた。俺が剣士として認めた者はお前で2人目だ。」

『鷹の目』が言った2人目の言葉に俺はすぐさま答えを返した。

「…もう1人はゾロだろ？ ロロノア・ゾロ。」

「!! ほう、知っているのか？」

「知っているさ。あいつは世界一の大剣豪になる男…つまり、あんなを越える男だ。知らなきゃおかしいだろ？ だが……」

そう言っただけ俺は両手の親指と人差し指で四角を作って、ある能力を発動させる。

「？何を…」

「『ハコハコの実』……『武器箱』（ウエポン・ボックス）！！」

『鷹の目』が訝しそうに俺を見る中、俺が作った四角の中から細長い白の箱が現れ、そのまま縦に向き、ストンツと地面についた。

「ゾロには悪いが、俺があんたを越えさせてもらう。それに…あんたにならこいつも存分に試せそうだ。」

俺はゆっくりと箱を開けると中には1本の刀が納められていた……ここにくる前に俺が特典の中で作って欲しいと言っていた白刀『明』だ。

「ほう、ロロナアと同じ刀の使い手か。」

白い鞘に白い柄と白一色の刀に思わず『鷹の目』は声を漏らした。

「まあな…だが、この刀はあんたと同じ最上大業物でもある……名は白刀『明』。」

俺は『明』を手に取り、鞘から刀を抜くとその中から同じく白に輝く刀身が現れた。

「見事な刀だ。だが、白刀とは？」

「あんたの持つ世界最強の黒刀『夜』に勝るとも劣らない刀さ。」

聞き慣れない名前に質問する『鷹の目』に俺も『明』の切っ先を向けながら、簡潔に刀の説明をする。

「フツ、面白い。ならば、その刀とお前の力……存分に見せてもらおう！そして、俺を越えて見せよ！！『強き者』よ！！」

「望むところだ！！」

そう口元に笑みを浮かべる『鷹の目』に俺も同じ笑みを浮かべると、互いに刀を両手で握り直して、相手に斬りかかる。

ガキイイイイイイイン！！！！

互いの刀がぶつかり合い、強烈な金属音と衝撃がそこを中心に広がった。

第05話「奮闘」（後書き）

はい！というわけで第05話が完成しましたが、1つここで謝っておきます……

スモーカーファンの人！！本当にすいませんでしたー！> m

（――） m <

原作じゃルフィをねじ伏せるぐらいの実力でしたけど、この話に関しては噛ませ犬程度の実力にまでダウンさせてしまいました。でも、原作崩壊とシシのチートな能力を生かすには、これくらいじゃないとできないと考えてこういう展開になりました。

別の展開としてスモーカーではなく、中将の内の2人をシシと戦わせるという内容も考えていたのですが、やっぱりローグタウンから出ているルフィとは因縁のある人物でしたので、この人物を選びました。

『鷹の目』についてはシシが注文した刀を使うには絶好の相手、ルフィの進行を邪魔するという原作のストーリーを崩壊させる2点で迷いはありませんでした。

では今回も出てきた悪魔の実の能力を紹介します。

名前：ネコネコの実（モデル『白獅子』（ホワイトレオ））

種類：動物系
ソオン

備考：希少種とも言われる白いライオンに変身する事ができる。

そのため『古代種』や『幻獣種』と並ぶ希少な種類として分類される。

また、肉食種の中でもその凶暴性はロブ・ルツチの持つ豹レオバルドよりも上
だと言われている。

技名：爪研つめとぎ

備考：変身したシシが使ったもので両手の爪をむき出しにして相手の体を上から下に引つ掻く技（技名の由来は猫が木などで爪を研ぐ姿から）。

名前：ハコハコの実

種類：超人系パラミシア

能力：いろいろな『箱』を作ることができる。

備考：両手の親指と人差し指で四角を作ることによって、どんな形・サイズの箱でも作ることができる。シシは自分の刀を入れた箱を『武器箱』（ウエポン・ボックス）と呼んで出現させた。

第06話「危険視」(前書き)

総合PV15万、ユニーク2万5千を突破しました!!
正直、こんなに見てくれるとは殆ど思っていませんでした。
これからも、応援よろしくお願いいたします。

第06話「危険視」

「ほう…やるな。」

「あんたもな!!」

互いに刀身で鏝迫り合いをしながら、相手の実力を確かめ合う2人。

「…だが、それでは俺を越えることはできない!!」

『鷹の目』がそう言うのと同時に刀を上へ払い、そのまま袈裟斬りの形で俺へと振り下ろすが……

「させるか!!」

俺は払われた刀を盾にして攻撃を防ぎ、続けて『鷹の目』に胴切りを見舞った。

「!!」

俺の攻撃に『鷹の目』は同じように刀を盾にして防ぐ……その目は依然、鋭い獲物を見る目つきそのままである。

「良い腕をしている…良い勝負になりそうだ。」

「『良い勝負』…ね。それじゃあ、困るんだけど……な!!!!」

そんな『鷹の目』の言葉に俺はさらに力を込めて、そのまま振り抜くと『鷹の目』は一度、後方に飛んで間合いを取った。

「言つたる？俺はあんたを越えるって……ゾロ、悪いが技借りるぜ？一刀流……」

そう言うと俺は刀を左手に持ち替え、右手で左腕関節の内側を押さえて左腕に力を込める。

「『三十六煩惱鳳』！！！！」

左手の力を一気に解放して『明』を振ると、螺旋状の斬撃が発生し、相手に向かって飛んでいく。

「……」

一瞬、驚いた『鷹の目』だが、迫り来る斬撃に『鷹の目』も同じように刀を振り、斬撃を発生させて相殺する。

「あー……やっぱり、これじゃダメか。」

放った斬撃が簡単に相殺される様を見た俺はやっぱりなという感じ
で手に持った刀を見る……ゾロの使っていた『三十六煩惱鳳』はゾロ
曰く『大砲』並の威力と射程があると使っていたが、さすがは世界
最強の大剣豪と呼ばれる男、剛柔共に桁外れの力を持っている……
決してゾロの技が弱い訳ではない……実際に空島ではこの技でブラハ
ムを仕留め、エニエス・ロビーでは二刀流で放った『七十二煩惱鳳』
はカクの嵐脚と互角の威力を見せているのだ。

「(さて、どうするかねー……ん？ちょっと待てよ？『鷹の目』がここにいて……)」

「どうした？これで終わりか？…ならば、こちらからも行くぞ！」
対抗策を考えていると、ふと原作の事が頭をよぎったと同時に『鷹の目』はその隙をついて、刀を振るって複数の線状の斬撃を飛ばしてくる。

「！！……ふっ！！」

思案している俺に向かって飛んでくる斬撃を全て『明』で薙ぎ払う…その光景を見た『鷹の目』は俺に声を掛けた。

「考え事か…？随分と余裕だな。」

「ん、いや大した事じゃないさ…ただ、そろそろ時間だなと思っ
な。」

「時間？」

「ああ…」

そう言いながら、俺は白ひげがいる場所の遙か後方を見る…：原作が崩壊しつつあるにしても恐らくあの作戦は実行されるだろう。海軍にとつて、白ひげ海賊団を一網打尽にするにはパシフィスタと包囲壁は必要不可欠…しかも、俺の存在も考慮するといくら智将のセンゴクと呼ばれる男でも、作戦の展開をすぐにでも始めるだろう。

「（そうなれば、同時に白ひげのイベントも発生する…その前にケリをつけねーとな。）」

俺は一度鞘に『明』を納めて、目を閉じて精神統一を行う。

「！何の真似だ？」

『鷹の目』は突然、武器をしまつて目を閉じる俺の姿に警戒し、両手で自分の刀を握り直す…その間も俺は精神を集中させる。

「……………」

「勝負を捨てたか…残念だ。これで終わりにさせてもらおう！」

俺が勝負を諦めたとも思つたのか『鷹の目』が刀を振るい、先程より数倍巨大な斬撃を俺に向かって放つた。

「全ての障害取り除き、振るうわ業断つ浄化の炎…一刀流『不動明王』…」

迫り来る斬撃を感じた俺は即座に目を開き、刀をゆっくりと抜き、正眼の構えを取つて、気迫を強める…その姿は憤怒の炎を身に纏つたかのような仏の化身！！

「『不動明王・火楼鴉陀』（ふどうみょうおう・がるうだ）！！」

俺が刀を振り下ろすと『鷹の目』と同じ大きさの斬撃が向かつていくが、徐々に斬撃は形を変えて巨大な鳥の形となり、さらに全身に炎を身に纏つて『鷹の目』の斬撃とぶつかり合うと、そのまま絡み合つて飛散した。

「これは…！」

『鷹の目』が驚きの声を上げるも、すかさず次の攻撃に移ろうとす

るが……

「『鷹の目』！！悪いが、少し本気にならせてもらった。こっちも時間の都合があるんでな！！次の一撃で決着を着けようじゃないか！！……あんたも薄々気付いているんじゃないのか？」

「！！……………」

そんな俺の提案に『鷹の目』は攻撃に移ろうとしていた手を止め、俺と周りを一瞥すると刀を一旦背中に戻し、そのままの状態で柄を掴んだ。

その光景を見た俺は……

「さすがにあんたもこの提案には賛同せざるを得ない訳か？」

俺も同じく刀を鞘に納め、攻撃体勢に移る途中に『鷹の目』が口を開いた。

「勘違いするな。確かにお前は心力以外の強さを秘めている……だが、こちらにも海軍との協定がある。お前にだけ構っている暇はない。」

「それは……ルフィを追うためか？」

「……あの次世代の申し子の命は運命が握っている。この後に兄を救出するのか……それとも、この刃によって果てるのかはそれ次第だ。」

俺の言葉に否定で返す『鷹の目』の気迫がさらに増し、それに合わせて俺も同じように気迫を強めた。

「そうか……なら、あんたの運命は俺が握ってやる。俺の攻撃を耐えるか、それとも……ここで終わるかだ!!!」

俺はそこまで言い終わった瞬間に『鷹の目』に向かって走り出す。

「『強き者』!!!お前如きに俺の運命は変えられん!!!」

同時に『鷹の目』も俺に向かって、走り出した。

「人の心の境地を分類し、天・人・修・畜・餓・地……人の迷界六道に声・縁・菩・仏の四聖、これら合わせて十界と称す。一刀流『連撃』……!!!」

徐々に間合いを詰めながら俺は素早く刀を抜き、連続して刀を振るう……『鷹の目』もそれに気づき、手に掛けた刀を振るった。

「『十界降魔枷』（じっかいごうまかせ）!!!」

「残像!?!」

しかし『鷹の目』の攻撃は俺の攻撃を捕らえることなく、全て空を切り、その隙について懐に入り込み、俺は『鷹の目』の体を上に切り上げた

「ぐっ!!!」

刀を杖代わりにして膝をつき、傷口を押さえながら俺を睨みつける『鷹の目』……そんな姿を見ながら俺は刀を鞘に納めると踵を返した。

「言っただろ?本気になったって?まあ、この程度で俺はあんたを越

えたとは思わない……だから、その役目はゾロに譲る。あんたも傷を治して、万全の状態でゾロと戦うんだな。」

「ま、まさか……『鷹の目』が負けたあ……!?」

「『七武海』の1人が敗れたぞお!!!!!!」

「さて、それじゃ世界政府の『人間兵器』ってやつを見に行くか。」

膝をつく『鷹の目』の姿を見た海兵や海賊達はその重大な出来事は直ちに知れ渡るのを確認すると、俺は湾頭へと急いだ。

「センゴク元帥！！準備が整いました！！」

「そうか…湾岸と湾頭の準備もか？」

「はい！全てです！！」

処刑台へ報告に来た海兵に再度、確認をするセンゴク…シシの読み通り、湾岸の包囲壁作動と湾頭のパシフィスタ配置が完了し、あとは作戦を実行するのみになっていた。

「ん！？おい！処刑の準備が始まったぞ！！」

「本当だ！でも、予定された時刻よりだいぶ時間が早いぞ！！」

シヤボンテイ諸島に映像電伝虫によって映し出された映像を見ている人々は処刑台の部分が映し出された時、処刑人が準備をし始めるのに気づき声を上げた。

「あいつら……！！エースに何するつもりだ！？まだ、処刑の間には早いぞ！！」

戦っていた海賊達も海軍側の予想外の行動に驚いて、戸惑っている。

「本当にエースの処刑早めるつもりなんだ！！待ってるー！！エースー！！！！！！！！」

ルフィも処刑台の様子に気付き、声を上げて走るスピードを早めた

……その頃、処刑台では再びセンゴクの言葉が飛び交っていた。

「直ちに映像電伝虫の通信を切るんだ！！この作戦によって起きる惨劇を何も世界に見せる必要はない！！不信感を持って貰っても困るからな！！」

処刑台の下にいる赤犬と青キジもセンゴクの言葉にじっと耳を傾けている。

「生ぬるい世間にとって、余りにも刺激が強すぎるだろう！だから、数時間後……再び伝えられる情報は我々の『勝利』……その二文字だけでいいんだ。」

神妙な顔で言い終えるセンゴク：確かにこの作戦によって、海軍にとっては白ひげ海賊団の殲滅とエースを処刑することによって、海軍にとって今後、脅威となりうる頭痛の種を取り除くことが出来る。

だが、同時にこれは海軍による虐殺行為に等しい作戦でもあるため、今後『世界』が海軍に疑いを持つ可能性が出てくるものでもある。そのためセンゴクは映像電伝虫の通信を切ることによって、世界の人々に『過程』を伝えずに、自分達の都合の良い『真実』だけを伝えるつもりなのだ：正義のためなら、裏ではいくら非道な事を行う……これが海軍本部のやり方なのだ。

そこへ……

「せ、センゴク元帥！！大変です！！」

「何だ？どうした？」

慌てて走り込んでくる海兵にセンゴクはギロリと睨みつける…これから始まる作戦には一瞬の油断も許されないのだ。

「は、はい。それが……」

センゴクの睨みに恐れる海兵だが、自分の持つ情報を伝えるため姿勢を正した。

「『王下七武海』の1人である『鷹の目』がジンドウ・シシに敗れました……」

「……な、何だとお……」

「……」

海兵の報告にセンゴクと2人の大將は驚きの声を上げ、表情を歪ませた…海軍大將の1人を退けただけでなく、『王下七武海』の一角を落としたとなれば、もはや見過ごすことが出来なくなってきた。

「それで！そいつの足取りは!?!」

「はっ！『鷹の目』との戦闘後、湾頭方面へ向かったとの情報が入っております……」

「『黄猿』に伝える……！ジンドウ・シシを見つけ次第、パシフィスタは最優先で排除対象として処理しろ……！他の海賊達は後回しでも構わん……」

「りよ、了解しました……」

怒号のような声でセンゴクは苦々しい表情で齒軋りを起こし、海兵に命令を下すと、海兵は逃げるようにその場から立ち去った。

「……………くそっ！！」

「センゴクさん、大丈夫なんですか？俺にはその男、『白ひげ』以上に危険なような気がするんですけどね？」

苛立つセンゴクに青キジはさっきの報告を聞いた感想を述べた…青キジも最初にシシの姿を見たときは、そんなに危険性はないと判断していた。しかし、同じ大将である『黄猿』が退けられ、今また『王下七武海』の1人が落とされたと聞いてはそんな考えは頭の中から無くなっていた。

「もう1人俺達のどちらかを回した方が「クザン！！」……………！！」

言葉の途中で赤犬が青キジの名前を叫んで遮った。

「わしらの役目はこの処刑台を守ることじゃあ！黙って、ここを守つとりゃあええんじゃ！！」

赤犬が帽子を被り直して、腕を組み青キジを睨みつけた。

「だけど、サカズキ…あなたは気にならないのか？あの男は俺達や『七武海』の連中を退けたんだぞ？」

「そんなことあ、分かっちゃよる！だが、ここの守りをしっかりせんといかんのは分かっちゃうが！！」

「……………」

赤犬の言葉に青キジは黙り込んだ……確かに赤犬の言うことにも一理はある。もし、この守りが手薄になれば、それだけエースの救出率を上げてしまう結果になってしまう。エースの処刑を行うためにもそれだけは避けなければならない。

「赤犬の言うとおりで。」

2人の会話を聞いていたセンゴクはやや落ち着いた様子で赤犬の言葉に賛同する言葉を述べる。

「ここで戦力を減らす訳にはいかん。相手はあの男1人ではない……『白ひげ』やその傘下の海賊、それとドラゴンの息子もいる。」

「……………」
「分かりました。」

センゴクのその言葉に青キジは渋々ながらも納得した……不安を残したまま……

第06話「危険視」（後書き）

第06話完成いたしました。『鷹の目』との戦いを描くのは難しかったです……orz

過去の資料やネットでいろいろと調べて書きましたが、戦闘描写をうまく描いている他の小説家の方はすごいなと思いました。自分もうまく書けるようになりたいです。

では、出てきたオリジナルの技を紹介いたします。

名前：一刀流『不動明王・火楼鴉陀』（ふどうみょうおう・がるうだ）

説明：刀1本で放つ斬撃。放った斬撃は鳥の形となり、さらに炎を纏う。その大きさはウソップの火炎鳥より遙かに超えている。名前の由来は不動明王が背中に背負った迦楼羅炎と呼ばれる炎を吐く迦楼羅から。

名前：一刀流『連撃・十界降魔枷』（れんげき・じつかいごうまかせ）

説明：刀1本で連続して斬撃を放つ。しかし、その斬撃は全て残像であり、相手が気を取られている間に懐に飛び込み、攻撃を行う。名前の由来は『十回誤魔化せ』。

第07話「狂い始める作戦」(前書き)

皆様、長らくお待たせいたしました。第07話完成いたしました。仕事やらなにやらで完成に1週間近くかかってしまいました。それではご覧ください。

いつのまにやらPV200000とユニーク300000を越えました。これからもがんばります。

第07話「狂い始める作戦」

「おい！見てみる…湾頭のところだ！！」

「！！？」

「ありやあ、バーソロミュー・くまじゃねーか！？」

「何で何人もいるんだ！？」

湾頭の入り口付近で戦っていた海賊達が煙の中に人影を発見し、その中から現れた姿に驚き、声を荒げる。

「やっと出番だ！おめエら！！待たせたな！！」

おかつぱ頭に腰掛けをし、巨大な鉞を担いだ男：海軍本部の科学部隊隊長である戦桃丸とその後ろには海軍の科学者であるDr・ベガパンクが開発した『王下七武海』の1人、バーソロミュー・くまの姿をした『人間兵器』がズラリと並んでいた。

「あいつ！！シャボンディ諸島にいたくまみたいな奴らだ！」

「く、く、くまアアア！？」

なぎ倒しながら進むルフィはかつて仲間共に仕留めた敵を思い出し、現在目の前で同じ人物と戦っているイワンコフはそのあり得ない光景に叫んでいた。

「あれが噂に聞く政府の『人間兵器』か…まったく、厄介なものを

開発しやがって……だが、このままうまく行くとは思わなよ？セン
ゴク……」

モビーディック号の上で『白ひげ』がその光景に噂で聞いていた話
を思い出して、苦々しく反応するもニヤリと笑う。

『あれはこの前、シャボンディ諸島で暴れた奴らだ！！』

『複数のバーソロミュー・くま！？』

『それに数はあの時の比じゃねエ！！20人くらいはいるんじゃない
エか！！！？』

シャボンディ諸島で通信されているこの映像を見ていた人々も、つ
い先日起こった騒動と同じ人物がいるのに驚いていた……その時の
人数は本物もいれて5人だったが、今回はそれ以上の数が勢揃いし
ているのはあまりにも現実離れしていた。

一方、湾頭で現在の状況を確認した戦桃丸は子電伝虫を取り出し、
ある所へと通信を繋いだ。

「オジキイ！！ちよつと計画と違っていている様だぜ！？わいらが出る
頃には湾内に海賊達を追い込める様になつてはるはずだが、ずいぶん
バラけてるぞ！！」

『おゝ、悪いねエ。どうやら『白ひげ』が手を打っていたみたいだ
ねエ〜。』

電伝虫から間延びした答えが返ってくる……戦桃丸が通信をつないだ
のは自分の上司である『黄猿』……彼は『オジキ』と呼んでいた。

『白ひげ』は『エースの処刑時刻が早まる』と聞いた直後から、傘下の海賊達に指揮を任せて周りの軍艦を襲うよう指示を出していた………ついでだが、その時近くにいたバギーをあっさりと騙して、手伝わしていた…そばにいたマルコは『呆れるほどチヨロイ男だよい』と呆れていた。

『けども、大した問題じゃあないよ。センゴクさんもそのまま縦に挟撃をしろって言ってるしねえ。』

「分かった。軍艦も壊れるがいいか？」

『最小限で頼むよお………それと、あともう一つ言っておくことがあってねえ。』

「？何だオジキ。」

いざ作戦を開始しようとした時に、作戦とは別の話をしてくる『黄猿』に戦桃丸は首を傾げる。

「実は『白ひげ』以上に厄介な問題が発生してねえ…出来るならそっちの方を優先的に対処してほしいんだよねえ。」

「…『白ひげ』以上に厄介？」

「…実はある男が『麦わらのルフィ』と同じようにエース救出のためと一緒にやって来てねえ、わっしが仕留めようとしたんだけど、腹が立つことに返り討ちにあってねえ。」

「…！オジキが負けたのか！？」

『黄猿』からの言葉に戦桃丸は驚き、電伝虫を強く握りしめる。

「それだけじゃあないよオ、ついさつき『王下七武海』の1人が負けたという連絡もあってねえ……さすがのセンゴクさんも作戦に支障が出ると思って、わっしに対処するよう言われたんだよねえ。」

「そうか……それは厄介だな。それで？どうすればいいんだ？オジキ」

「そうだねエ、とりあえずパシフィスタはその男を見つけ次第、仕留めてくれるかい？他の海賊達はそのついでに仕留めれば、大丈夫だろうからねえ……」

「分かった。すぐに準備に取りかかる！」

「ちなみにその男の名前はジンドウ・シシ……白銀の髪をしているからすぐに分かると思う……頼んだよオ？」

『黄猿』が言い終えるのと同時に戦桃丸は、『黄猿』からの命令を後ろに並んだパシフィスタ達に伝える。

「いいかお前ら！！これから攻撃を開始するが、ジンドウ・シシという海賊を見つけ次第、優先的に仕留めろ！！『包囲枠』から外れた海賊達はついでに仕留めながらも構わない！！行けえ、パシフィスタ！！」

戦桃丸が突撃の号令を下すとパシフィスタ達は一斉に動き始め、まずは包囲枠の外にいる傘下の海賊達を攻撃しようと掌や口からレーザーを放とうとするが……

スパツ!!!!!!!!!!

そんな音と共にパシフィスタ1体の腕がガシャンと氷の上の上に落ち、その背後には刀を抜いて戦闘態勢をとっているシシの姿があった。

「どうやらまだ大丈夫のようだな。」

そう言うと振り向きざまに、もう片方の腕を肩の付け根から切り落とす…腕を切り落とされたパシフィスタは口からレーザーを放とうと光を集めるが……

「無駄だ!!!」

シシはそう言うと幹竹割の如く、刀を振り下ろして真っ二つにした。

「（これがパシフィスタってやつか…確かに硬度は鋼鉄以上だが、大したことはないな）。」

俺は真つ二つにしたパシフィスタを見下ろしながら、他のパシフィスタを見やると驚いた表情でこちらを睨みつける戦桃丸の姿があった。

「！！お前か！オジキの言っていたジンドウ・シシってやつは！！」
我に返ったのだろう…俺の姿を見ると、本人かどうかを確認してくる戦桃丸に俺は少し意地悪をしてやることにした。

「質問に質問で返して悪いが、人に名前を聞くときはまず自分から名乗るってことを知らないのか？」

「その質問に答える義理はねえな。わいは『世界一ガードの固い男』…したがって口も固い『世界一口の固い男』でもある戦桃丸だ。言っておくが、今のは質問に答えて名乗ったんじゃないやねえぞ？自分から言っただ。」

「分かってるよ…と言うか最初からあなたの名前くらい知ってたしな…そして、あんたがオジキと呼んでる奴が『黄猿』ってこともな。」

戦桃丸の答えに俺は初めから知っていた事を明かすと、戦桃丸は顔を顰める。

「ムッ！オジキの事を知っていると云うことはお前はジンドウ・シシだな？」

「ああ、そうだ。そして、あんたらの作戦をぶっ壊すためにパシフィスタを足止めしてきた…その奴みたいにな。」

そう言つて俺はたった今、両断したパシフィスタを親指で指した……
当然のことながら、完全に機能を停止している。

「……！そついやお前、どうやってこいつらを切つた？こいつらの体は鋼鉄以上の強度で出来ている。そう易々と切れる訳がねえ……！」

「さあな？それこそ答える必要はない……さて、余計な話はいいからとつととかかつてこい！それとも今更、作戦を断念するか？」

俺は刀を持った手で挑発するように手招きをする……その行動に戦桃丸は担いでいた鉞を手に取り、俺の方へ向けてパシフィスタに命令を下した。

「作戦は止めさせねえ！お前ら！あいつがジンドウ・シシだ……！命令通り、あいつを優先的に仕留めろ……！他の海賊達はついででも構わない……！行けえ……！」

パシフィスタ達は即座に行動をし始め、俺に向けて掌や口からレーザーを発射させて仕留めようとする。

「さて、Dr.ベガパンクが開発した『人間兵器』……さっきは思わす破壊したけど、その戦闘能力はなかなかの物だし、ここは一か八かやってみるか……」

俺はレーザーを躲しながら1体のパシフィスタに近づき、刀を持った手と反対の手をパシフィスタの顔に押しつけて力を込める。すると……

『ドゥン』

電子音のような音と共にパシフィスタが向きを変え、レーザーを他のパシフィスタへと放ち始め、その内の1体にレーザーが着弾して爆発を起こした。

「!?!?何だ、こりゃあ!?!」

「おし!自信はあまり無かったが、うまくいったようだな。」

いきなり味方を攻撃し始めたパシフィスタに戦桃丸は焦りを隠せず
にいた。その様子には俺はニヤリと笑いながら、刀を納めた。

「てめえ…一体何をしやがった!?!?」

「別に大した事はしてはいない…ただ、ちょっと暴走させただけだ。」

ニヤリと笑っている俺に向かって、戦桃丸が声を荒げて質問してきたので簡潔に答えてやった。俺が使ったのは『バグバグの実』の能力で、銃や大砲などの機能を暴走させるのだが、今回はパシフィスタに搭載されている機能にバグを発生させたのだ。原作を見て、俺が思ったのはパシフィスタを利用できないかということだ。あれだけルフィ達を苦しめた兵器なのだから、破壊するよりも利用する方が効率がいいと考えた。しかし、パシフィスタについては原作でも一部以外あまり説明がされていないため、もし、うまく行かなければ即座に破壊するつもりだったが…これで『白ひげ』の重要イベントにも対応することが出来るな。

ちなみに鋼鉄の体を切れたのは『ブルブルの実』を使って、刀に目には見えないほどの細かな高周波を発生させたのだ。ホントはこん

なのを使わなくても、すんなりと切れたのだが、これはいわゆる保険のようなものだ。

「さて…どうだ？あんたらが開発した兵器が自らに牙を向いた感想は？」

「……………！！！」

俺の質問に顔を顰めながら、歯噛みをして睨みつける戦桃丸を俺は上機嫌な様子で見ながら、被害を受けていないパシフィスタ2体に近づき、両手を顔に押さえつけるとさっきと同じように力を込めると、同じ電子音が聞こえ、レーザーを放ち始めた。

「念のためだ、あともう2体暴走させておくぜ？…さあ、これで作戦を実行できるならしてみな？」

「おい！待て！！…くっ！！！」

俺はそう言つと『白ひげ』のイベントを阻止するべく、モビーディック号へと向かい始めた。戦桃丸は行かせまいと俺に迫ろうとするが、暴走パシフィスタのレーザーが手前に着弾し、爆発を起こす…このままでは巻き添えを食らうと判断したのか、その場から一旦離れて別の場所へと移った。

「ちっ！お前ら！！あいつらを止めるんだ！！壊しても構わない！！！」

正常に動いているパシフィスタに戦桃丸は命令を下すと、次にはパシフィスタ同士の戦いが始まっていた。

「おい！バーソロミュー・くまの奴らが同士討ちを始めたぞ！？」

「仲間割れか！？」

シャボンディ諸島にて映像を見ていた人々は突然、バーソロミュー・くま同士が戦いだした光景に驚いていた。

「!?!?何が起こっている!!……!!ジンドウ・シシカ!?!?」
処刑台にいたセンゴクにもその光景は見えしており、何事かと思っただがすぐにある男の名が浮かび齒軋りをしていた。

「分からない!!だが、あいつら不死身なのか!?人間じゃあねえみたいだ!!」

観客の1人が戦いを観戦していて、互いに傷を負いながらも敵を倒そうとする様子に疑問を抱き始めていた時……

ブツツ!!

突然、3つの画面の内、両端の2つの映像が途切れて画面が真っ暗になった。その出来事に観客達は響めきを上げた。

「なっ…映像が切れた!!」

「だけどまだ1つ映ってるぞ!!」

唯一、真ん中の画面だけが今もマリノフォードの戦場を映し出していた……もちろん、これは偶発的な事故ではなくセンゴクが海兵に命じて意図的に通信を切らせた物であった。

「全ての映像が切れた時点で包囲壁を作動させる!!その後、すぐにエースの処刑と共に敵を一網打尽にする!!」

「了解!!」

処刑台の上からセンゴクが命令を下すと、その場にいた海兵達が慌

ただしく動きを見せ始める……

「……やべえ！このままだと、エースが……！！急がねえと……！！ハア……ハア……！！」

傷だらけになりながらも、処刑台へと向かうルフィはその言葉に息を荒げて、必死に敵をなぎ倒していた。しかし、そこへ……

「残念だけど、振り出しに戻りなよ……」

「……」

ドガッ……！！

目の前に『黄猿』が現れ、光の速さで蹴りを放ち、その威力でルフィは後ろへと転がりながら吹っ飛ばされる。

「ルフィ君……！！」

「ハア……ハア……！！……ジンベエ……！！『大将』が出てきた……くそ……！！」
転がるルフィをジンベエが途中で体で受け止めるとルフィは体勢を立て直し、膝について息を整え始めた。

「しっかりせい！手強い相手だが、急ごう……！！ここに来る前から分かっていたはずじゃ……！！どれだけの強敵が道を塞いでくるかを……！！」

ルフィの言葉にジンベエは喝を入れると、『黄猿』の方へと目を向ける。さすがに海軍大将が相手だとこのまま進むのは厳しいと思っ
ていた矢先……

「エースの弟！！もう体力切れか！？」

「え！？」

時代劇に登場する女の髪型の男が銃を持って走りながら、声を掛けてくる…突然、知らない奴に声を掛けられて、戸惑うルフィだがジンベエは見覚えのある顔に安堵の表情を見せる。

「おお…！隊長達じゃ…！こりゃあ、百人力じゃ…！」

ジンベエの視線の先にはさっきの男以外に複数の男達が集まってきており、全て白ひげ海賊団の隊長達だった。

「『大将』 1人に止められてんじゃねエ…！一緒にいてこい…！海軍の奴らが退いていくのはこっちにとってはチャンスだ…！このチャンスを逃す手はねエ…！」

「ハア…よおし…！あんにやろうめ…！！」

頼もしい言葉と共に突き進んでいく隊長達に触発されて、ルフィも気力を振り絞った。

「お…隊長達が相手かい？…あの男に勝らず、手強いねエ……」

向かってくる敵の姿に『黄猿』は自分を退けた男の姿を浮かべながら、迎え撃った。エースの処刑のカウントダウンが始まるにつれて、ますます激化する戦闘の光景を見ながら、センゴクは未だに映像の通信が切れないことに苛立っていた…作戦を開始するためには映像を一切映さないことが必須条件であるため、始められないでいた。

「通信は切れたのか!？」

「いえ、それがまだ…少しお待ちを!！」

センゴクの声に海兵が慌てて答えるが、通信が切れる様子は一切なかった…無論、シャボンディ諸島には残りの映像が1つだけだが、映っていて、音声も聞こえている。その時……

『あー!そこにいるのは!!!』

場面が切り替わり、煙の中に佇む男をわざとらしく見つける声が聞こえてきた。

「!?!おい!何をやっている!!グズグズするな!!」

未だに映像電伝虫の通信が切れていないことに何をもたついていると言わんばかりにセンゴクは声を荒げるが、その間にも通信は続いていく…突然、場面が変わって訳の分からない声がするため、シャボンディ諸島の観客も首を傾げる。

『今までその正体をひた隠しにしていたが!!あの『海賊王』ゴールド・ロジャーの船に乗っていた『伝説の船員』の1人!!大海賊の『道化のバギー』船長では!?!』

声を掛けられ、男はクルリと振り返った…そこには……

『え?確かにそれはおれさまのことだが?』

赤くデカイ鼻は変わらなかったが、それ以外は……シシが見れば……

いや、シシのいた世界の人間が見れば、歌舞伎独特の化粧である隈取に似た化粧をしていた。しかし、バギーのしているものは、目の周りを黒く塗り、同じく頬に黒の太い3本ひげを書いており、もはや元の物とは程遠いとなっていた。

『は?』

その映像が出た瞬間、シャボンディ諸島の人人々全員の思いは1つとなった。その間にもバギーの声が映像と音声で聞こえてくる…

『おれさまが伝説の海賊だっつのは秘密にしていたはずだが…』

『…キャプテン・バギー、本当にそのメイクで合ってるんですか?何か、間違っているような気がするんですけど……?』

『バツキヤロー!!途中で話しかけてくんじゃねエ!!』

映像の向こうではバギーがセリフを言っている途中で、囚人の1人が恐る恐る手を挙げながら質問してくるので、バギーは大口を上げて、怒鳴りつける。

「さつさと映像を切れと言ってるんだ!!このままじゃ、作戦が先に進まん!!」

「それが映像電伝虫がインペルダウンの囚人共に1匹奪われまして、映像を切ることが出来ません!!」

「何だとお!!!?」

そんなやりとりを見たセンゴクは一刻も早く映像を切るよう命じる

が、映像電伝虫が奪われたとの報告を聞いて驚きを見せた……その間にもバギー達の会話は続いていく。

『いいか野郎共オ!!!』キャプテン・バギーの名を揚げる大作戦』の実行は今しかねエ!!!これが成功すれば全世界がドギモを抜かれること受け合いだ!!!』

『だけど……どうもそれじゃ、ただの落書きにしか……』

『何イー!!!お前……まさか俺が見習いの時に、たまたま読んだ『ワノ国』について書かれた書物の中の『カブキ』を疑ってんじゃねーだろうなア!!!』

『いえ!!!そんな事は!!!』

バギーの迫力に滅相もないといった感じで両手を振る囚人……バギーは見習い時代の時にたまたま略奪品の中にあつた1冊の本を軽く読んだ時の事を囚人達に聞かせていた。

『最初は興味がなかったが、ある部分を読んでおれはビビッと来たんだ!!!何でも、斬新な動きや派手な装いを取り入れたものだといっじゃねえか!!!これはおれさまにピッタリだと思わねエか!?!』

『お、思います!!!』

両手で拳を作りながら、力説するバギーに思わず頷く囚人達。

『この『クマドリ』と呼ばれる化粧は『カブキ』に必要とされている物だ!!!絵は残念ながら覚えてねえが、恐らくこれで合ってるはずだ!!!野郎共オ!!!いいから続けるぞ!!!』

『お、おう！！！キャプテン・バギーが言ってるんだ！！間違っわけがねえ！！』

バギーの言うこと成すこと全てを尊敬している囚人達はその言葉に頷き、続きを始めた。

『おい！！戦場はどうなってんだ！？』

『何で他の映像が切れたんだ！？』

『エースやバーソロミュー・くまの軍団を映せー！！』

しかし、シャボンディ諸島の観客達はそんな事よりも他の状況が気になるため、他の場面を映せとの要望の声が上がっていた。

一方、モビーディック号の甲板で一連のシシの動きを見ていた『白ひげ』はニヤリと笑いながら、眺めていた。

「あの小僧…やるじゃねえか。」

『白ひげ』が思わず、シシを賞賛する言葉を口にする…そこへ……

「オヤッさん！」

後ろから『白ひげ』を呼ぶ声が聞こえ、振り返ると額に蜘蛛の入れ墨を入れて、巨大な刀を手にした海賊がゆっくりと歩いてくる…その顔に見覚えのある『白ひげ』はその海賊の名前を呼んだ。

「スクアード！てめえ、無事だったのか。さつき連絡をくれたんだが……」

「ああ、すいません。」

『白ひげ』の傘下である『大渦蜘蛛』と呼ばれる男であり、新世界では名の轟く船長でもあった。『白ひげ』は最初、全海賊団の指揮を任せようと通信を入れたのだが、その場にいなかったため他の船長にその役目を任せられたのだった。

「後方の傘下の海賊は大丈夫の様だ……何故か奴ら、仲間割れを始めやがったから。」

スクアードは刀を構えながら、『白ひげ』の横を通り抜けて前へ出るのを見ながら『白ひげ』はこの先の事を話し始めた。

「ああ、それなら安心だ…だが、いつまでも悠長にしていられねえ……ここからは俺も出る!! 一気に攻め込むぞ。」

「……………」

『白ひげ』の言葉に黙り込むスクアード…その様子を疑問に思った『白ひげ』は再び声を掛ける。

「?どうした、スクアード。」

「いや…そうですね。俺達も全員あんにゃ大恩がある。白ひげ海賊団の為なら、この命も投げ出すつもりだ!!」

鞘から刀を抜くとゆっくりと持ち上げて構えるスクアード……その姿は少し先で戦っていたマルコにも見えていた。

「ん?スクアード、あんなところに……」

電伝虫で呼びかけた時にその場にいなかった男の姿を見つけたマルコは今までどこにいたのかという感じで見遣る……その時!!

ガキン!!!!!!!!!!

「「!?!?」」

金属音が鳴り響き、『白ひげ』とスクアードは同時に驚いていた…

その視線の先には……

「おいおい……いきなり何てことをするんだ？」

片手に刀を持ち、スクアードの刀を止めているシシの姿があった。

第07話「狂い始める作戦」（後書き）

第07話が完成いたしました。長らくお待たせいたしました。申し訳ありmせん>m(――)m<

前書きにも書きましたが、仕事が忙しく、なかなか執筆が進まず苦戦いたしました。しかし、この作品を楽しみにしている読者の皆様のために少しずつですが書き進め、出来ました。

パシフィスタ戦はシシのチートな能力を使って味方に見せてみました。感想にもありましたが、シシとの戦闘はどうなるのかとの意見もありましたが、ここは破壊するよりも自らの力を体験してもらおうということでした。

ここで再びバギー登場！『キャプテン・バギーの名を揚げる大作戦』はここで行いました。歌舞伎の人が見たら絶対怒られるだろうなという内容は完璧にオリジナル（捏造？）ですが、いいアピールになったと思います…

更新については皆様には、ご迷惑を掛けると思いますが、よろしく願いたいします。では、オリジナルの悪魔の実を……

名前：バグバグの実

種類：超人系
パラミシア

備考：銃や大砲など武器の機能を変化させる。この能力で武器の機能を低下させたり、あるいは使えなくなったりすることが出来る。今回はパシフィスタに搭載された機能を暴走させて、仲間割れさせることに使用された。但し、この能力は自動的に発動するため、敵味方問わずに行われるが、シシは自在にコントロールしている。

名前：ブルブルの実

種類：超人系パラミシア

備考：振動を発生させる事ができる。その大きさは自在に変える事ができる。しかし、振動が大きければ大きいほど発生させる時間が短くなる。今回は刀の刃の部分に高周波を発生させて、パシフィスタの鋼鉄の体を切り落とした。

第08話「息子」

「おっさん!!」

「オヤジさん!!」

「白ひげ!!」

「「「オヤジーーーーー!!!!!!」」」

『白ひげ』を刺そうとした刀の柄を両手で持つスクアードとそれを受け止める俺の姿にマルコはもちろん、ルフィやその他の数多くの海賊が見ており、思わず叫んでいた。

『大変だ!!』『白ひげ』傘下の海賊が『白ひげ』を裏切ったぞ!!!!』

『ええ!!それが……裏切ったのは新世界の海賊『大渦蜘蛛』の船長!!!!』

『『白ひげ』を庇ったあの白銀の男は何者なんだ!?!』

バギー達が持つ映像電伝虫によって、シャボンディ諸島にもその映像は流され、今起きた一大事に場は騒然としていた。

「ちつ……邪魔をしておつて。」

処刑台の近くにいた『赤犬』は誰にも聞こえないよう、小さくボソッと呟いた。

「くっ!!」

俺に刀を受け止められ、苦悶の表情を浮かべるスクアードに俺はさつきと同じ質問をしてやった。

「聞いてんのか？何でこんな事しやがんだって聞いてんだよ。」

そうやって俺は手に力を込めて、受け止めた刀を弾き返した……すると、スクアードは弾かれた体勢から再び『白ひげ』を狙って刀を振るおうとする。

「邪魔をするんじゃないぞ!!」

「……………」

俺はやや呆れながらも、スクアードの手から刀を払い落とす……と同時にスクアードの背後に能力を使って忍び寄る男：マルコの姿があった

「スクアードオー……………!!!!!!」

「!!!!……………く!!!!」

叫びながらマルコはそのままスクアードの頭を地面に押さえつけて動けないようにしながら睨みつける。

「…なぜ、お前がこんな事を!!!!」

マルコは信じられないといった様子ながらも、ワケを聞くためスク

アードを問い詰めようとすると……

「うるせエー!!こんな事させたのも、どれもこれも全部お前らのせいじゃねエかアー!!!」

その言葉と共にスクアードは腰に差したもう1本の刀をマルコに向かって振るうが、あっさりと避けられて四つん這いの姿になった。

「てめえ……!!」

未だに攻撃を仕掛けるスクアードにもう一度取り押さえようと前に出るマルコだが、その時『白ひげ』がマルコの前に無言で手を出して、制止させた。

「……………!!」

自分のオヤジでもある『白ひげ』に逆らう事は出来ず、渋々といった感じでマルコは後ろに下がる…同時に俺にも武器をしまえと視線を向けてきた。

「……………」

俺は1度頷くと刀を鞘に納めて、腕を組んでスクアードを見下ろした……観念した様子でスクアードは四つん這いの姿から腰が抜けたかのような体勢となり、口を開いた。

「こんな茶番劇やめちまえよ!!『白ひげ』!!!もう海軍の奴らと話についてんだろ!?あんたら『白ひげ海賊団』とエースの命は必ず助けるって確約されてんだろ!?!」

「！！！？」

「何言ってるんだ！！どういう事だ！！？」

スクアードの言葉に周りの軍艦を襲っていた他の海賊団の船長や船員達も動揺を見せ始める中、なおもスクアードの言葉は続いていく。

「おれ達ア、罠にハマられたんだよオ！！『白ひげ』にな！！！！！！おれア、知らなかったぞ！！エースの奴が…あの『海賊王』『ゴールド・ロジャーの……実の息子だったなんてな！！』」

「……………」

スクアードの言葉に『白ひげ』は黙って聞いていた……それでもスクアードは喋るのをやめなかった。

「おれがアンタに拾って貰った時、おれは1人だった……！！なぜだかはアンタは知ってるよなア！！おれの長く戦ってきた大切な仲間達はロジャーの手によって全滅させられたからだ……！！」

「そして、おれがどれだけロジャーの奴を恨んでるかも知ってるハズだ！！」

「……………」

『白ひげ』は表情を変えずに、スクアードと出会った頃の事を思い出していた。

「だったら、一言言ってくれりゃあ良かったんだ！！『エースはあのロジャーの息子だ。だから俺はエースを次期『海賊王』にしたい

「思っている。』って!!!」

「拾って貰った時からアンタはおれを騙して、裏切っていたんだ！
！エースと仲良くもしていた!!!…絵に描いたようなバカな話だ！
！そして、そのエースが捕まったんだ！アンタもこれはマズイと思
ったハズだ!!!」

スクアードは拳を握り、狂乱に近い状態で甲板を殴りつける。

「だからアンタはこの戦争が始まる前にセンゴクと取引をしたんだ
!!!おれ達、傘下の海賊団の43人の船長の首をやる代わりに、エ
ースと白ひげ海賊団の命と身の安全の保証をしろってな!!!それで
取引は成立して話をついた!!!そうだろ!？」

「それなのに、おれ達はエースの為や白ひげの為と言ってノコノコ
ついて来てみれば、案の定だ!!!波の氷壁で逃げ道はねえし、何よ
りもその男だ!!!」

「?」

「俺?」

スクアードがいきなり俺の事を指さした……突然、俺の事が話題に
出た事に『白ひげ』は不思議に思った。

「おれは知ってるんだ!!!その男が海軍の回し者だつてな!!!」

「!!!」

『おい!あの男!確かバーソロミュー・くまの奴らと一緒にいた奴

「じゃないか!?!」

『そう言えば……!!じゃあ、あの白銀の男は海軍側だったのか!?!』

『今まで『白ひげ』達に味方をしていたのも作戦の内だったのか!?!』

「……………」

スクアードの言葉に驚く『白ひげ』とつい先程の映像と同じ人物がいるのに納得し始めるシャボンディ諸島の観客達だが、俺は静かにスクアードの言葉を聞いていた。

「この作戦は陽動でおれ達、傘下の海賊団を欺くためだ……!本当は『白ひげ』がその男に命じておれ達を1人ずつ仕留めるつもりだったんだ!!だから、おれはやられる前に『白ひげ』を討ち取ろうとしたんだ!!!」

「何イ……!!!!!!!!!!」

「オヤツさあん!!!そりゃ、本当の事かよオー!!!!」

周りの軍艦から傘下の海賊団から真偽を確かめるための声上がる中、俺は体の内に怒りが込み上げてくるのを感じていた……

「なぜその男が邪魔をしたのかは分からねえが、もう覚悟は出来る……おれはアンタを裏切ったんだ!!!殺せよ!!!!」

そう言うスクアードの頭には海軍のある男とのやりとりが思い出させていた。

時間は『白ひげ』が全海賊団の指揮を任せる通信を入れる前……スクアードは1人の海兵と話をしていた。

『てめえの口車に乗ってたまるかよ!!』

『本当じゃあ……』『白ひげ』とは話がついちよるし、何よりその男はわしの部下でのお。既に手筈は整うとるんじゃ……あとは実行するだけじゃけエ。」

スクアードは今し方、海兵から聞いた情報に驚いていた……それは『白ひげ』がおれ達の首と引き替えに『白ひげ海賊団』の身の安全とエースの命を助けるという取引とそれを実行するために、ある男を潜り込ませているというものだった。

『なら、よお見ちよれ。その男は『白ひげ海賊団』や傘下の海賊団にも一切手エ出さんけエ……』

そう言う海兵にスクアードは半信半疑のままですの場を去った。

「そついやあ、あの男…おれ達には一切手エ出さなかったな。」

「確かに……むしろ海軍の奴らとは示し合わせたかのように戦っていたし……」

傘下の海賊達がこれまでの俺の行動に納得するかのような意見があちこちで上がってくる。一方、シャボンディ諸島でも……

『『白ひげ』が海軍に……『仲間』を売った!?!』

『白ひげ』の行動に愕然とする観客達が多数を占めていた。

「おれあ、信じられなかったよ…信じたくなかったよ!!」

そつ言つて、悲壮な表情で頭を抱え込むスクアードについて我慢できなくなったのかマルコが胸倉を掴んで、怒鳴りつけていた。

「バカ野郎!!担がれやがったな、スクアード!!!なぜオヤジを信じなかった!!」

「マルコ！！てめえまでしらばつくれやがって……！！」

マルコの言葉にスクアードも即座に反論に出る。

「オヤジは何よりも『仲間』を大切にしている！！それこそ『家族』の様にだ！！だから、おれ達はオヤジの事を『オヤジ』って呼んでるんじゃないのかよい！？」

「だったら、その男の事はどう説明するんだ！！」

「……！！最初、俺もあいつを見た時は不審に感じた……その事はオヤジにも分かってたよい！！だが、オヤジはあいつを信じると言った！！オヤジが自分の目で見て、判断した上で信じると言ったんだ……だから、俺も信じた！！お前はオヤジだけじゃなく、オヤジが信じたものまで疑うのかよい！！」

「……………」

激しく言い合うマルコとスクアードのやりとりを未だに『白ひげ』は黙って見ていた……海賊達が混乱する中、その隙についてセンゴクが最後の映像電伝虫を持ったバギー達に狙いを定めた。

「『青キジ』……！！」

「ん？」

センゴクの叫びと共に『青キジ』がその場から消えるのと同時に、バギーも何かの気配に気付いてその方向を見た瞬間、『青キジ』がバギー達と映像電伝虫を氷漬けにしていた。

ブツッ!!

『あ!最後の画面が……!!』

『おい!消えちまったぞ!?どうなってんだ!?!』

『分からねえ!!だが、この戦争は仕組まれてたってことなのか!』
『?』

最後の映像電伝虫の通信が切られた事により、シャボンディ諸島への映像が全て途切れたのと同時にセンゴクは引き続き、命令を下した。

「よし!!『包囲壁』作動!!」

「はっ!!」

すると広場と湾内の境目から水泡が発生し始め、壁が徐々に迫り上がって来るのを誰も知る由がなかった……いや、1人だけいた。先程から怒りを押し殺しながら、黙ったままマルコとスクアードを見ているシシだった。

「(ちつ…『赤犬』の野郎、原作じゃパシフィスタを使って『白ひげ』に不信感を抱かせたが、今回は予定が狂ったんで、俺を使いやがったな……なめた真似してくれてんじゃねーか!!いいだろう…そっちがその気なら、俺も少し本気になってやるうじゃねーか……だが、このまま『包囲壁』が展開されれば、少し面倒だな。)」

スクアードの言葉を聞いた俺は右手で肩の筋肉を解しながら、ジッ

と広場と湾内の境目を見る。

その時……

「おい！！ジンドウ！！」白ひげ「！！てめエら、何みつともねエ
ことしてんだ！！」

「！！」

俺と『白ひげ』はその声のする方向に視線を向けると、離れた場所
で頭から血を流して、俺達を睨みつけているクロコダイルの姿があ
った。

「『白ひげ』！！てめエが仲間を売った？ジンドウ！！てめエが海
軍の回し者？ふざけるんじゃないやねエ！！！！てめエらはそんな小細工し
なくても、充分にあいつらと渡り合えるハズだ！！特にジンドウ！
！！」

クロコダイルはフックを持ち上げて、俺の方へと向ける。

「てめエが俺達の前に現れた時、確かこう言ったよな！？『俺は強
い』と……その言葉通りに不快だが、てめエはおれを負かしたじゃね
エか！！そんなてめエが『白ひげ』と組んで仲間を売ろうなんて、
おれは絶対に認めねエぞ！！おれはそんな『卑怯な男』に敗けたつ
もりはねエぞ！！」

「……」

「クロコボーイ！！」

「クロコダイル……」

息を荒げながら、猛然と俺と『白ひげ』を責め立てるクロコダイルの姿にイワンコフやジンベエも今まで見てきたクロコダイルとは別の印象を受け、驚きを見せていた。

同じくその言葉を聞いていたマルコは……

「（確かに……オヤジもこの男は初めて会ったにも関わらず、オヤジの目に叶っていたよ。それとオヤジが言っていた能力を2つ以上隠し持っている事……加えて、あのクロコダイルの言ってることが本当だとすると、なぜそれ程の男がこんな回りくどい様な事をするのだろうか?）」

マルコはチラリとシシの顔を見る……その表情からは何を考えているかは分からなかった。

「（そして、何よりオヤジを守ったことだ……もし本当に海軍の回し者なら、万が一、取引が成立していたとしてもオヤジを仕留めるこないいいチャンスを逃す手はないよ。相手から見れば海賊……約束を守る必要はない）……!!」

マルコがこんな事を考えていると、『白ひげ』がズイッとスクアードの前に歩み寄り、上から睨みつけるとスクアードは思わず震え上がった。

「スクアード……おめえ、仮にも親を刺そうとしたんだ……覚悟は出来てんだろっな!? バカ息子!!」

「ウアア……!!」

手に持った薙刀で殺されると思ったスクアードは思わず目を閉じそうになる……しかし、『白ひげ』の次に起こした行動は……

がばっ！！

「……………ふっ」

「！！！？」

「バカな息子よ……それでも愛そう……」

俺は少しだけ、口を緩ませてその光景を見ていた……薙刀を持った手とは反対の手で膝をついて、そんなセリフを言いながら抱き寄せる『白ひげ』……てつきり殺されると思っていたスクアードは驚きと戸惑いの表情を見せていた。

「！！……………っ！？ふざけんな！？俺はお前を裏切った……………」

当然のように暴れて離れようとするスクアードだが、『白ひげ』はしっかりと抱きしめておりビクともしない……その間にも『白ひげ』は言葉を続ける。

「……忠義心が強エお前のその心を……騙して、闇へと引きずりこんだのは一体誰だ？」

優しく……それこそ親が『息子』に問い掛ける様な言葉にスクアードも暴れるのをやめて、オヤジの質問に答えようとする……

「『赤犬』だろ？大方、海軍の反乱分子とか言って、協力すれば助

けてやるとでも言われたんじゃないのか？」

「……！」

「……そうなのか？」

俺は既に知っていた答えをスクアードの代わりに答える……俺の答えにスクアードはさらに驚いた表情を浮かべた。そのやりとりに『白ひげ』は俺の言ったことが本当なのかどうかを確認するべく、再び話しかけるとスクアードは俯いたまま、静かに頷いた。

「やっぱりな……しかし、あんたも変だとは思わなかったのか？この作戦はエースの処刑と『白ひげ』を討ち取るためのもの。もし、成功すれば次はあんたら傘下の海賊の番だ……ましてや、大将の『赤犬』が言ったんだ。いくら自分の船員を守るためとはいえ、何かの策略だとは気付かなかったのか？」

「……………」

俺の言葉に黙るスクアード……俺は原作を読んで、スクアードと『赤犬』のやりとりを見て思っていた事を口にしていた。あんなに俺からさまに大将がこの作戦には反対と言ってくるなど、見え見えの罠も良いところである……まあ、あの緊張感に包まれた戦場の中で常に冷静でいることはなかなか難しいと思うが、それでも自分のオヤジを信じていれば、例え『赤犬』の言っていることが本当だったとしてもあんなことは出来ないはずだ。それをこの男は相手の言葉を信じた……つまり、『白ひげ』を信じ切れなかったって事だ。だが

……

「俺もあんたが疑ったことについては許すよ。」

「!」

俺がそう言つとスクアードはバツと顔を上げた……その目にはうつすらと涙が滲んでいた。

「確かに俺はエースを救出するために、いろいろと動いていた。そのせいで、それを逆手に取られて、俺や『白ひげ』を疑うのもよく分かる……だが、あんたがやったことは許されないことだ。だけど、あんたは自分の大切な『仲間』を守るためにそうするしかなかった……昔の様な事を2度繰り返さないように……そうだろ？」

俺が腕を組みながらスクアードの近くに歩み寄ると、スクアードは少し肩を震わせていた。

「なら俺も許すよ。けどな……エースとは仲良くしろよ？ 罪があるのはロジャーでエースじゃない。エースもお前も全部『白ひげ』の家族で『息子』じゃねえか……そうだろ？ 『白ひげ』。」

俺が『白ひげ』方へと顔を向けると、やれやれといった感じで俺を見返してきた。

「小僧……まさか、てめえに言われるとはな。だが、小僧の言う通りだ……スクアード、お前がロジャーをどれ程恨んでるのは俺が痛い程よく知つてらァ。だが、親の罪は子供には関係ねーんだ！ エースがお前に何をした？」

『白ひげ』は1度、スクアードを胸から離して肩に手を置き、ニッと笑いながら言った。

「エースだけが特別じゃねエ…皆、俺の家族なんだぜ…」

「オヤツさん……ウウ……!!」

俺と『白ひげ』の言葉にスクアードは肩をますます震わせながら、
啜り泣いていた…しかし……

「オヤツさん!!!!ウソだと言ってくれ!!」

「おれ達を本当に海軍に売ったのかあ!?!」

詳しい事情を知らない他の海賊達は未だに『白ひげ』と俺が示し合
わせているかと思っっているようで、疑いの声があちこちで上がって
いた。その声に『白ひげ』は処刑台にいるセンゴクを睨みつける。

「まったく……『智将』センゴクはまだ衰えてないようだな。俺ら
の中、引っかき回しやがって…俺が息子らの首を売ったただとお…!
?」

「待て、『白ひげ』。」

「!!…何の真似だ?小僧。」

『白ひげ』が能力を使うおうとしているところを俺は腕を掴んで止
めさせた…その行為に『白ひげ』はジロリと睨んだ。

「あんたの息子達を助ける役目…俺にも手伝わしてくれ!」

「!?!?」

「何だと!?!」

突然の俺の発言に『白ひげ』とマルコは驚いているが、俺は構わずに言葉を続ける。

「このまま、あんたが1人で助けてもいいんだが、俺も海軍に利用されたんだ。それだと俺の気が治まらねえ…だから、俺も参加させてもらう!?!」

「……………」

俺の怒気を感じ取ったのか2人はしばらく黙り込んだが、すぐに『白ひげ』が口を開いた。

「…いいだろう。やってみな。」

「サンキュー…それじゃあ、まずはあの波の氷壁からだな。俺が右の壁をやるからあんたは左の壁を頼んだ!俺の合図で能力を使ってくれ!?!」

「ほう…おれに命令するんだ。余程の力を持つてんだらうな?」

「まあな?俺も少し本気にならせてもらうよ…悪いが海軍には悪夢を見せてやる。」

俺の提案に『白ひげ』はニヤリとしながら言うと俺も悪魔の様な笑みを浮かべて、俺と『白ひげ』は腕を曲げて正面へと持ってきて、力を入れる。

「?……………まさか!?!」

俺の行動に最初は不思議に思うマルコだったが、すぐに何をやるかとしていくかに気づいて顔色を変えた。

「行くぞ！！せー……のっ！！！！！」

ドゴオオオオオオオン！！！！！！

俺の合図と共に力を込めて『白ひげ』が左側を、俺が右側の『大気』を殴りつけるとヒビが入り、巨大な波の氷壁が砕けて、海に落ちていった。

「……！！！！？」

それを見ていた海軍や海賊達全員が呆気に取られていた……何しろ『地震』を……世界を滅ぼす力を持った人間が2人もいるのだ。

「よし！これで傘下の海賊達は逃げられるな。にしても、スゲなこの能力……」

俺は跡形もなく崩れ去った氷壁を見ながら、腕を下ろした。

「ん？どうした？お二人さん。」

「てめえ……なぜ、おれの能力を……」

「……………」

ふと、何か視線のようなものを感じるのでその方向を見ると、『白ひげ』が深刻な……マルコがポカンと口を開けたまま俺を見ていた。

「なぜって…言ったろ？少し本気になった…って。」

『白ひげ』の質問に俺は笑顔で返した。

第08話「息子」（後書き）

第08話完成いたしました。

うわ、何だこの完成の速さは……自分でも驚いています。やっぱり脳が沸いてるからかな？（笑）。今回はスラスラとアイデアが出てきました。

今回は『白ひげ』負傷イベントの代わりに話を入れてみました。シシを絡ませながらなので、ほぼオリジナルになったと思います。シシと『白ひげ』とのやりとりいかだったでしょうか？

さて、ここで再びアンケートなのですが、この後の展開で『白ひげ』とルフィどちらとより絡む方がいいのかな？個人的にはどちらも捨てがたいので迷っています。感想にて受け付けてますが、あくまで『意見』として見ますので、そのの所はご理解ください。

それでは、いつになるかは分かりませんが、完成次第UPいたします。

第09話「悪夢の序章」

「……な！何イ……………!!!?」

海軍と海賊両方から同時に同じ言葉が飛び出す。

「何なんだ！！あの男は!?!」

「『グラグラの実』の能力……!!?なぜ同じ能力が2つもあるんだ!?!」

「そんな……『白ひげ』だけのものじゃなかったのか!?!」

シシと『白ひげ』が起こした出来事に海軍達は混乱の極みに陥り、気の弱い海兵は顔を青ざめて、わなわなと震えていた……それは傘下の海賊達も同じだったが、こちらはそれと同じく自分たちの壁となっていた氷壁が砕かれた事によって、別の意味でも驚いていた。

「オヤジと一緒にいるあの男……一体何者なんだ？オヤジの『地震能力』を使いやがったが……」

「分からねえ……だが、オヤジとあいつのおかげで氷の壁がなくなつた。これで、この軍艦も動かせる……おれ達はいつでも逃げられるぞ……!!」

「オヤジは……裏切つてなかったんだあ……………!!」

「あの男も海軍の回し者じゃねえ……おれ達の『味方』だ……!!」

「……………!!」

周りの軍艦を襲っていた海賊達はスクアードによってもたらされた『白ひげ』の裏切りとシシの海軍疑惑はこの一件で全て吹き飛び、雄叫びと共に士気も上がる。

「オヤジ……………」

処刑台から事の一部始終を見ていたエースは無事な姿のオヤジを見て、溜息をついた。

「……………ふん。」

鼻で笑うクロコダイルも表面は不機嫌そうな顔をしていたが、口元にはほんの少したが笑みがこぼれていた。

「シシボーイ!!」

「シシ君。」

「ウォー……………!! スッゲー ぞ!! シシ!! ……おっさん!!」

イワンコフやジンベエは驚き、ルフィは両手でガッツポーズをしてシシと『白ひげ』に感動していた。

そんな光景を処刑台で見ていたセンゴクは……

「!!……………バカな……………」

今までに見せたことのないくらい、顔を青ざめて呆然としていた。

『白ひげ』 1人だけでも厄介な存在なのに、今まさに同じ脅威を持つ男が現れたのだ…これで冷静でいられる奴がいるなら、1度見てみたい。

「センゴク…！？おい！！センゴク！！」

「……………！！」

ガープに名前を呼ばれて意識を取り戻したセンゴク…しかし、ガープも決して良い表情はしていなかった。

「しつかりせんか！！お前がそんなんでどうする！！」

「…ああ、すまない。」

軍のトップが動揺すれば、それは軍全体の士気にも関わる……さすがは元帥になるだけの男ともなるとそれが分かっているらしく、首を振っていつもの表情へと戻してシシを見る…しかし、心の中はそう簡単に落ち着けるものではなかった。

「しかし、本当に何なんじゃ？あの男は…シキの能力だけじゃなく、『白ひげ』の能力まで使いおるとは…」

「……………！！分からん！だが『白ひげ』と同じ能力を持つ以上、あの男も世界を滅ぼす力を持っている！！これを見過ごすわけにはいかん！！『赤犬』！！『青キジ』！！」

「……………！！」

ガープの質問にセンゴクはギリッと歯噛みして、やや喚き散らすか

のように答えて残りの大将達にも怒鳴り散らすかのように命令を下した。

「何としてでも、あの2人や他の海賊達を絶対広場には入れるな！『包囲壁』内にとどめるんだ！！『黄猿』にも伝える！！」

その命令を聞いた2人は即座に行動を始め、広場と包囲壁の境目へと向かっていった。

「おーおー、騒いでる騒いでる…ハハハ。」

海軍と海賊両方が俺に注目を集めているのに、俺はしてやったりの

表情で見つめていた：これで俺の存在は嫌でも、認識されたハズだ。海軍の奴らは躍起になって俺を仕留めようとしてくるだろうが……まだまだ、悪夢は終わんねーよ。

「おい小僧！！」

「！！！」

俺がそんなことを考えていると『白ひげ』が深刻な表情のまま、俺の胸倉を掴んでグイツと引き寄せた。

「どうした？」

「……………」

無言のまま俺を睨みつける『白ひげ』に俺は今の事は俺にとって当たり前だと言った態度で対応する：すると、掴んでいた手を離してチラリと戦場を突っ走るルフィの姿を見る。

「……………グラララララ！！！！」

「？」

深刻な表情から一変、ニツと口元に笑みを浮かべた後に大口で笑い出した：『白ひげ』の突然の笑いに首を傾げる俺。

「小僧：いや、シシ！！最初、てめエがあの小僧と俺の所に現れた時は生意気な事を言う小僧だと思ったが……言うだけの力を見せて貰った！！てめエみたいな面白い男は久しぶりだ！！」

そう言うと左手の手を広げて、逆手に差し出した。

「シシ…おれの息子にならねーか？」

「！！」

「てめエみたいな男程の奴が、なぜ今まで無名で俺と同じ能力を持っているのか…：そんな理由は聞かねエ！まあ、おれの命なんざ簡単に取れるもんじゃねエが…：仮にも俺の命を救った『借り』もある…：その件はそれでチャラにしてやる！！お前は旗揚げもどこかの海賊にも属しているワケでもねエ…：どうだ？」

『白ひげ』の誘いに驚く俺…：まさか、『白ひげ』から勧誘を受けるとは思わなかったな…：正直な気持ち、嬉しい事は嬉しい。あの『海賊王』ゴールド・ロジャーと渡り合った男の船団に入れるとなると最高の名誉だろう。加えて、所属しているマルコや他の海賊達も感じのいい奴らばかりだ…：しかし…：

「せつかくの誘いだが…：断らせてもらうよ。」

「「！？」」

首を振りながらの俺の答えに驚く『白ひげ』とマルコ。そりゃあ、そうだろうな…：『白ひげ』の誘いを断る男などよっぽどじゃない限り、いなかっただははずだからな…：ま、理由は話すけど。

「まあ、俺も何となく断るわけじゃねえ。実を言うとあんた以外にも勧誘を受けていてね？その返事を待たせているんだ…：エースを救出するまでな。」

「！」

そう言うと俺はルフィの姿をジッと見つめる……俺の視線の先にいる人物に気付いた『白ひげ』は何か納得したかのような感じで差し出した手を戻した。

「……そうか、あの小僧か。なら、あいつの気が変わったらいつでも来い！おれア、いつでも歓迎してやる……グララララ！！」

持った薙刀をドン！と鳴らして、再び大口で笑う『白ひげ』の前で俺は『ま、あのルフィの気が変わるとは思えないけどなあ……』とルフィの性格を考えると、絶対に諦めないだろうなと思いつながら戦闘準備を行う。

「それじゃあ、行くとするか。頼むよ？『白ひげ』。」

「言われなくても分かってらア……いいか！！てめエら！！海軍の奴らはここに居るジンドウ・シシを海軍に仕立てて、このおれを仕留めようとしやがったア！！だが、こいつはおれを守った！！そんな奴をまだ海軍の奴と文句がある奴ア、おれの所へ来い！！そして、おれと共に来る者は命捨ててついて来やがれ！！行くぞオー……！！！！」

「ウオオオオオオオ！！！！」

『白ひげ』が叫び声を上げながら船の上から氷上へと降り立つと、湾頭と湾内にいた海賊達はこれまでになく士気を上げて雄叫びを上げる。

「構えるオ！！！！動き出すぞ！！！！世界最強の男がア！！！！そして、

『白ひげ』の隣にいる男にも油断するなア！！あの男も『白ひげ』同様、世界を破壊する力を持っている！！」

『白ひげ』の参戦にセンゴクが海兵達に檄を飛ばし、俺と『白ひげ』を厄介そつに見遣る。

「さて！それじゃあ、俺も……？」

俺も『白ひげ』に続こうと、船から降りようとした時……

「ウオオオ！！……すまねえ、オヤツさん……！！すまねえ、エース……！！おれあ……大好きなオヤツさんに何て事を……！！畜生オ……！！おれあ……おれあ……！！！！」

感情を抑えきれずに、膝をついて号泣しているスクアードの姿を見つければ駆け寄ると優しく声を掛ける。

「お前……いつまで泣いているつもりだ？」

「……」

俺の声にハツと気付いたスクアードはゆっくりと顔を上げて、俺の顔を見てきた。

「お前は確かに『白ひげ』を信じ切れなかった……それを後悔をして泣くのもいいが、ホントにそれでいいのか？泣くだけが『白ひげ』に報いることか？お前も船長ならやるべき事があるんじゃないか？」

「でも……おれあ……！！」

未だに踏ん切りが着かないスクアードに俺はある事を教えてやる。

「知ってるか？今は他の船長が傘下の海賊達の指揮をとっているが、初めにその指揮を任せようと『白ひげ』が最初に通信を入れたのはお前だ。」

「…………おれに？」

「ああ、それが何故だか分かるか？それはお前を信頼しているからだ…………その信頼に答えるためにも、お前がするべき事を考えるんだ。」

「……………」

俺の言葉に反応した後、黙り込むスクアードに傍にいたマルコが声を掛ける。

「そいつの言う通りだよ。泣くことだけが報いることじゃない……………」

「マルコ……………すまねえ。」

俺達の言葉にそのまま頭を下げるスクアード…………その姿を見た後に俺とマルコは言葉を交わす。

「すまないな。おれらの仲間が迷惑を掛けたよ。」

「気にすんな。この始末は海軍の奴らにつけてもらっつからな。」

「……………そう言ってくれれば助かるよ。それと……………」

「？」

「俺はお前を信じるよい。オヤジが信じると言った奴だ…そんな奴を信じないわけにもいかない。よろしく頼むよい。」

そう言っつてマルコは手を差し出して握手を求めると俺もその握手に答えるように手をしっかりと握った。

「ああ、こっちなもな…さて、それじゃあ俺も行くとするよ。とつとと海軍の奴らに悪夢を見せてやらないとな。」

「…頼もしい男だよい。」

そう言っつと俺は手を離して、戦場へと向かっていった…マルコが言った言葉を聞きながら…

「包囲壁はまだか!？」

既に包囲壁を作動させているはずなのに、一向に展開される気配がない事にセンゴクは怒鳴りつけた。

「申し訳ありません！！想像以上に氷がぶ厚く、もう少し掛かるかと思われますー！！」

「ぬう…！！このままでは……」

その報告にセンゴクはイライラと不安募らせていた。

『白ひげ』の隣に俺は降り立つと、海賊達が俺にこれまでの事を謝罪するために話しかけてきた。

「あんた！！すまなかつたな。疑っちまってよー！！」

「俺にも謝らせてくれー！！」

「いいんだ。気にすんな！それよりあんたらのオヤジに道を開けてやれ！！敵は何かを狙ってるみたいだからな。」

「おう！分かった！！」

「あんたも気をつけてな！！」

そう言うと海賊達は『白ひげ』の道を作るために、敵の中に突っ込んでいく…それを見ていた俺は『白ひげ』に話しかけた。

「…結構良い奴らだな。」

「『結構』は余計だ。」

そんな会話をしながら、目の前の海賊達を見ると前から日本刀でそれを蹴散らす巨人の男が2人迫ってきていた…あいつは確か巨人族の海軍中将ジョン・ジャイアントと…ん？あつちの1人…誰だっけ？あんな奴、いたっけ？

「広場にや上げんぞ！！『白ひげ海賊団』！！」

「ここは通すわけにはいかない！！」

「「ふん！！」」

「「！！」」

ガキーン！！！！

俺がもう1人の巨人の存在に気を取られている内に、2人が刀を俺達に向けて振り下ろすと互いに薙刀と刀で受け止める。

「邪魔だなおい……ぬう!!」

『白ひげ』がそう言って相手の刀を弾き返すと薙刀を地面に突き立て、両手で大気を掴んでグイツと引っ張った……すると……

グラツ!!

「!何だ!? バランスが……!?!」

「うおお!?!」

地面が傾くも、俺は物ともせず周りをみると、それにより島ごと海も大きく傾いておりバランスを崩す者や艦がひっくり返るなどの事態があちらこちらで発生していた。しかし、中には……

「フッフッフッフッフッ!!なんてデタラメなジジイだ、こいつは……!」

そのあり得ない力を見たドフラミンゴは楽しそうに笑い……

「ルフィ!!ルフィは無事か……!?!」

ハンコックは自分の愛しき人の安否を心配していた……やがて傾きが戻り、安定を取り戻すと俺はやり過ぎなんじゃ無いかと思ひ、話しかける。

「おい。これ、ちょっとやり過ぎなんじゃないのか?」

「ん？何言つてやがる。これでやり過ぎなら、てめエみたいな奴はどうなんだ？」

「う…：そう言われればそうだよなあ。」

『白ひげ』の指摘に俺は思わず言葉が詰まったが……

ドオン！！

その間に『白ひげ』は体勢を立て直したジョン・ジャイアントを殴りつけて、その場所に地震を発生させて仕留めると、そのエネルギーは広場の一部を破壊し、一直線に処刑台へと向かっていく。

「うおおお！ダメだ！！止まらない！！」

「このままじゃあ、処刑台に直撃するぞ！！？」

「いいぞお！！オヤジ！！」

「そのまま処刑台をぶっ壊せえー！！！！！！」

海兵と海賊達がその光景に声を上げる間にもエネルギーはどんどん処刑台に迫っていき、あと少しで到達する所で……

ズドオオン！！

エネルギーはその手前で方向を変えて、処刑台の後ろにあるマリッフォードの町を破壊していった。

「おい見ろ！処刑台は無事みたいだ！！」

「何で逸れたんだ！？」

海兵達は処刑台が破壊されていない事に安堵と疑問の言葉が飛び出す。それは海賊達も同じだった。

「！？どういう事だ！！」

「確かに向かっていたはずなのに……ん？あ！！あれは『3大将』
！！！！」

1人の海賊が何かに気付いて処刑台の下を見ると3人の大将が両手を前にかざして守っており、そのせいでエネルギーが別の方向へと逸れていたのだ。

「はあ……さつさと包囲壁を張らねえから、こういう事になるんだ。」

『青キジ』が溜息をつきながら、文句を言うと『赤犬』が……

「何言つとるんじゃないか！！……クザン！！元はお前の氷が原因じゃろうが……！！」

その文句の原因があるのは『青キジ』にあると睨みつける……『赤犬』の言うことは理に叶っており、『青キジ』の氷によって包囲壁の展開に時間が掛かっているのだ。

「おー……なら、いい提案があるよー……サカズキ、君が溶かせばいいよー。」

その会話に『黄猿』は解決案を間延びした声で出していたが…彼らは知っているのだろうか？

まだ、悪夢は終わってはいないことに……

「あーあ、止められちゃったな。どうする？」『白ひげ』。

3大将によって防がれた『白ひげ』の攻撃に俺は言葉ではそう言いながらも、内心ではよく防いでくれたと思っていた……もちろん処刑台が破壊されてれば1番いいのだが、これぐらいで破壊されたら俺の出番がないからな。

「どうするも何もこれで終わると思っちゃいねえ。これぐらいで終いなら張り合いもねえしな。」

「それもそうだな、じゃあ…今度は俺の番だな。」

「…なんだ？まだ、そいつの相手をしていたのか？」

『白ひげ』は俺へ必死に力を入れて、刀を振り下ろそうとしている

巨人の男を見ていた……いや、だってなあ……こんな巨人いたっけ？
何となく見た覚えがあるんだけどなあ。

「ぬうううう！……！」

「おい、お前……名前は何て言うんだ？」

「……ハア……ハア……か、海賊風情に名乗る名などない……！」

「そうか、残念だ。名前だけは聞いておきたかったな。」

やや疲れてきたのだろう……少し呼吸が荒くなっている巨人族の男に俺は勢いよく弾き返して、刀を即座に納めると『白ひげ』と同じように殴りつけるが、その数は1発ではない。

「さあ、海軍大将達……地震の波状攻撃を防ぎきれるかな？」

俺はニヤリと笑って攻撃を終えると巨人は白目をむいて倒れたが、残りの全エネルギーは文字通り波の形となって再び処刑台に向かっていく。

「あの男からの攻撃が来たぞ……！」

「な、何だあれは！？津波のような形になってるぞ……！」

「よっしゃああ……！今度こそ処刑台をぶっ壊してくれえ……！」

「やってやれえ……！……ジンドウ……！」

俺の攻撃に海兵は慌てふためき、海賊達は『白ひげ』と同じように

応援の声を上げた。

「あらら…こりゃ、デカイね。」

「ちっ！！あの男…！！やっちよくれるのっ！！」

「んー…こりゃあ、大丈夫かねエー……？」

3大将にもシシの攻撃は見えしており、『青キジ』は手を再び差し出して、軽いノリで話すがその顔には少し焦りが見えていた…その隣では『赤犬』は睨みつけながら、『黄猿』は自信なさげな言葉を出しながら手を差し出したと同時にエネルギーが到達した。

「！！！！！！」

ズズッ！！

先程とは比べものにならない程のエネルギーが3人を襲い、その威力に僅かばかりだが、後ろに後退していくも……

ドガァン！！

「！！！！？」

何とかその軌道を逸らすか、マリルフォードの町は殆どがガレキの山と化し、俺は攻撃を防ぎきった3大将にパチパチとゆっくり手を叩いて、拍手をした。

「さすが海軍大将だ。この攻撃を防ぎきるとはね……だけど、これぐらいでへばるなよ？まだまだ、続きがあるんだからな。」

俺は次の行動を起こすべく、準備をし始めた。

第09話「悪夢の序章」(後書き)

第09話完成いたしました。

アンケートについては、皆様回答ありがとうございます。やはり『白ひげ』との共闘が多いですね…負傷イベントがなくなったとはいえ、まだまだ不安はあるからかな？

誤解も解けて、『白ひげ』とその仲間達に受けられるシシを今回は描いてみました。いやー、やはり圧倒的な力で敵を圧倒するというのは気持ちがいいですね。ちなみにシシにやられた巨人ですが、原作ではジヨズが氷塊を投げるシーンで巨人部隊の一番右側にいる男です。

まあ、全くといっていいほど登場がなかったので、今回の話でもそれなりの対応にさせてもらいました。名前は……巨人A(仮名)とでもしておきましょう(笑)

それでは次回も楽しみにしてください。

余談：この物語をアニメ風にしたらどうなるかを現在検討中で、曲を探していたらDoAsInfinityの「君がいない未来」の歌詞がとてもマッチしていた。とくに『時空を』のところが正にそれでした。

第10話「包囲壁突破」

「そんな…！？大将達が…！！！」

「海軍本部の最高戦力と呼ばれているんだぞ！？」

シシの攻撃で3大将が苦戦する姿を見た海兵達はますます動揺して慌てふためいていた。一方、海賊達の方は……

「ウオオー！！やってくれるぜ！！あのヤロー！！！」

「あいつの力！大将と互角…いや、それ以上かもしれねえ！！！」

「あいつとオヤジがいれば、俺達は負けねえぞオー！！！！！」

圧倒的な力を目の当たりにして、士気をますます上げた…それは湾頭にいた海賊達にも影響を与えた。

「あの男が作ってくれたチャンスが無駄にするな！！こいつらも仲間割れで戦力は減っている！！俺達が踏ん張らなきゃあ、オヤジに笑われるぞ！！！」

そう言う海賊の目の前には所々に穴があいたパシフィスタが横たわっており、さらにその先ではシシが暴走させたパシフィスタが機械の部分を露出させて、未だ暴れ回っていた。

「『足空独行』（アシガラドッコイ）！！！」

「！！！？」

ドン！！！！！！

しかし、その隙について戦桃丸の放った強力な突っ張りか海賊を吹き飛ばしたが、それでも海賊達の士気は下がらなかった。

「ちっ！！あの男！厄介な事して行きやがって……！！パンク野郎にどう説明すりゃあいいんだ!？」

パシフィスタ同士が戦って破壊されていく様子を戦桃丸は苦々しく見ながら、溜息をついた。

「何？』息子達を俺に近づけるな』…だと？」

「ああ。」

俺は次の行動を開始するために『白ひげ』にある要求をしていた。それは『白ひげ海賊団』の船員や傘下の海賊達を俺の周りに近づけさせない事だった。

「いきなりだな………どういう事が理由を聞こうじゃねーか？」

「センゴクが言っていた『包囲壁』………そいつがこれから行おうとしている作戦の要になっている。もし、『包囲壁』が展開されればこつちも相当な被害を受けるのは確かだ。だから、まずは目の前にいる敵がある程度片付ける必要がある。その間にだけ近づけないようにしてほしい………俺が出れば、間違いなくアンタの仲間らまで、被害が出るからな。」

俺はオーズが倒れている場所を指差しながら、『白ひげ』に答えた……『白ひげ』の仲間を傷つけるつもりは毛頭ないが、念には念を入れておかなければならないからな。

「ある程度の敵を片付けたら、俺は『包囲壁』を突破するための準備にかかる。そこからアンタが相手をしてくれ………それにアンタはまだ『切り札』を出していない………そうだろ？」

「………シシ、お前はホントに面白い男だな。」

俺は『白ひげ海賊団』の船が全て出揃っていないことを知っているため、その事をニヤリと笑いながら言うと、『白ひげ』もその事について知っている俺にニヤリと返しながら答えた。

「グララララ！……いいだろう！息子達には離れるよう俺が言ってやる。てめエの好きなようにしろ………」

「ありがとな。それじゃあ、海賊達のことは頼んだぜ!!」

『白ひげ』の言葉と共に俺はすぐに移動を始めると、それを見ていた『白ひげ』は……

「ますます息子に欲しいぜ…あいつは。いいか!!野郎共!!」

「」「!!」「」

シシを自分の息子にしたいという願望がますます大きくなりつつも、シシとの約束を果たすために広場に向かって突き進んでいる海賊達にも聞こえるように大声を出した。

「今からジンドウ・シシが敵を片付ける!!奴が相手をしている間、そばに寄るんじゃないぞ!!もし、近づいてケガでもしやがったら承知しねエぞ!!」

「」「オウ!!」「」

『白ひげ』の言葉に海賊達は勇ましく答えると、すぐに俺から距離を取り始めた。

一方、俺の周りから次々と海賊達が離れていく光景に海兵達は驚きと好機の声を上げる

「おい見ろ！…海賊達があのおいから離れていくぞ！？」

「一体どういう事だ…！？」

「よく分からないが、今がチャンスだ！！奴が『白ひげ』の力を使う前に何としてでも討ち取るんだ…！！」

その一言と共に海兵達は俺を討ち取ろうと続々と手にした武器で俺に襲いかかるうとするが…

「よし、そろそろいいか…『毒竜』（ヒドラ）。…さあ、行ってこい…！」

ドブン！！

俺は先に進みながら、海賊達が周りから離れたのを確認すると共に全身から紫色の液体が流れ出し、俺の頭上で3つ首の巨大な竜の形になり、腕を前に差し出すとその内の1つが前方にいる海兵達を口から飲み込んでいった。

「え！？あれは確か…インペルダウンのマゼラン監獄署長の能力！？」

「どうなってるんだ！？能力を2つ使えるなんて、あり得ないぞ！！」

「うわああああ……助けてくれエ……」

「…ぐおおああああ！！痛エよー！！！」

「その毒に触るな！！同じ目にあうぞ！！！」

俺の放った攻撃に驚愕する海兵の目の前で攻撃を受けた海兵達はその毒の凄まじい痛みでのたうち回ったり、他の海兵達に手を伸ばして助けを求めたりしていた。

「そりゃあ痛いだろうな…こいつの毒は神経性の麻痺毒だ。早く手当しないと手遅れになるぜ？」

「う、撃て…！！あの男を何としてでも止めるんだあー！！！！！！！！！！」

ドン…！！ドン…！！ドン…！！ドン…！！

「ふう、せっかく親切で言ってやってるのに……『毒の道』（ベノムロード）……」

俺の気遣いの言葉に銃や大砲で答える海兵達を見ながら、俺は軽く溜息をつきながら毒竜を海兵達の頭上へと伸ばし、その中に潜り込んで口へと移動すると腕をクロスさせて両手それぞれの親指と人差し指で輪を作る。

「『八尺瓊曲玉』（やさかにのまがたま）。」
ピカッ！！

強烈な光と共に作った輪から無数の光弾が発射され、海兵達の足下に次々と着弾して小規模の爆発を引き起こすと、その爆風により海兵達が吹き飛ばされた。

「うわああああー！！！」

「今度は『黄猿』大将の能力！？あの男は一体いくつの能力を持っているんだ！？」

「ウソだろ！？夢なら醒めてくれえー！！！！！？？」

何事もなく着地して歩を進める俺に一部の海兵達の中には恐怖に駆られて、戦意が喪失している者もいたが、それでも攻撃の手を休める事はなかった

「まだまだ！『百花繚乱』（シエンフルール）……………」

「うわっ！か、体が…！？」

「だ、ダメだ！！…腕が動かない！！！」

再び手をクロスさせると周りにいた海兵達の体から腕が生え始め、首や腕を拘束してだんだんと後ろに逸らしていき、そして……

「『クラッチ』!!」

ボキッ!!

「ぎゃあああああ!!!!」

最後の一押しとばかりに力を入れると背骨から大きな音が聞こえて、ドサドサツと口から泡を吹きながら海兵達が仰向けに倒れ込む姿を見た俺はさらに……

「もういつちよ! 『ネガティブ・ホロウ』!!」

ネガティブ ネガティブ ネガティブ ネガティブ

俺は人の心を虚ろにするゴースト達を出現させて、他の海兵達の体をすり抜けさせると海兵達は膝をつき、憂鬱な発言が飛び出す。

「何か生まれてきてすいません……」

「脇役なのに…目立ってすいません。」

「俺なんかが、海兵になるなんて…死のう。」

そんな海兵達を見ながら俺はこれだけやれば充分だろうと思ひ、目の前の大気に『ドアドアの実』の能力でドアを作ってその扉を開ける……最初からこうすれば良かったとも思ったが、『白ひげ』の負担も減らさないといけないからな…負傷は免れたとはいえ、持病には注意しないとイケねーし……

「ま、それは後にしよう。にしても……うわー…めちゃくちや沈ん

でるな。ネガティブの力、恐るべしだな。さて…そんなじゃま、包囲壁をぶつ壊すための準備でもするかな……『空気開扉』（エアドア）。『白ひげ』！！俺はこれから準備を始める！！こいつらの相手はまかせたぞ！！」

「グララララ！！…ああ！！行ってこい！！俺が行くまでには道イ開けとけ！！」

コクンッ

俺はドアの中に入る前に大笑いする『白ひげ』の方へ顔を向けて、小さく頷くとそのまま中に入ってドアを閉じた。

「き、消えた……」

「だ、だが、これで相手は『白ひげ』だけだ！！」

その光景を見ていた『白ひげ』の隙を狙って、他の海兵達が攻撃を仕掛ける。

「『白ひげ』覚悟オ！！！！」

「！？オヤジ！！あぶな……」

それに気付いた海賊達が『白ひげ』を助けようとするが……

「オラアアアアアアア！！」

『白ひげ』は手に持った薙刀に地震の能力を付加して、横に薙ぎ払うと強烈な衝撃と共に海兵達が宙を舞って吹っ飛ばされた。

「てめエらごときに俺の命が取れるか！！野郎共！このまま広場まで突っ走れエ！！！！」

「「「オオウ！！！！」」」

『白ひげ』と海賊達は一斉に行動を開始し始めた。

一方、ルフィは『白ひげ』とシシが同じ能力を使って、氷壁を砕いた光景を見た後に『白ひげ』が島を傾けたため、氷の下に落ちる所を寸前で回避していた。

「ハア……ハア……危なかったア！！もうちつとで落ちる所だった！！……にしても、あのおっさん無茶するなア！敵味方も関係ないのか！」

「心配せんでも船員達はオヤジさんの能力を分かっとする。その証拠にちゃんと彼らは避難しとるわい……それよりもわしが驚いたのはシシ君のほうじゃ。」

ルフィの不満に当然の様に答えるジンベエだが、それよりもシシが起こした行動についての方が衝撃を受けていた。

「能力者じゃとは分かっとなったが、まさか2つ以上の能力……それも1つはオヤジさんと同じ能力を使うとは……信じられん。」

ジンベエは自分の目で見た光景が信じられずにいたが、それに対してルフィは……

「そうか？おれはシシがどんな奴だろうが関係ねーし……それにアイツは悪い奴には見えねえ！だから、俺はアイツを信じるし、仲間にもしてーんだ！ー！」

「ルフィ君……」

ジンベエの言葉にも一切疑うことをせずに、シシを信じているルフィをジンベエは感心した様子で見っていた。

「よし！！邪魔がなくなっただぞ！！これで上に行ける！！」

邪魔をしていた海兵達がいなくなったことに気付いたルフィはチャンスとばかりに腕を伸ばして広場へと入ろうとするが、その時……

ガガガガガ！！！！

「！！？…何だ！？」

下から迫り上がってくる壁によって、伸ばした手が弾かれて行く手を阻まれる……他の海賊達も突如出現した壁に驚き、破壊しようとして手にした武器で殴りつけるが、逆に破壊される。

「奴らが言ってた『包囲壁』ってのは、この事か!!」

「ちくしょう!! 砲口が全部こっちに向けてやがる!!」

その間にも出現した壁は海賊達を取り囲むように展開され、広場へ突入する道が閉ざされる……ただ一部を除いて……

「オーズのいる場所の壁が……おい、どうなってるんだ!!? 完璧に作動させるんだ!!」

「はい!!……ですが『包囲壁』がオーズの巨体を持ち上げられない様子で……どうやら奴の血がシステムに入り込んで、パワーダウンを起こしている様です!!」

「ぬうう……!!」

センゴクが唯一『包囲壁』が展開されていない場所……エースを助けるために踏み込み、モリアによって倒されたオーズが横たわっている場所の『包囲壁』が作動していない事に気付いて、作動させるよう命令を下すが、海兵の報告にうなり声を出した。

「オヤジ!! あれは……!!」

「ああ、見えてらア。こいつがセンゴクの作戦か……やってくれろじゃねエか!!」

『白ひげ』は前方で展開された壁を見てやや苦々しい表情を浮かべているが、焦りはなかった、なぜなら……

「いいか！壁の事は気にするんじゃないねエ！！構わずに広場を目指せ！！アイツなら……シシなら必ずやつてくれらァ！！」

「オヤジ……そうだ！！あの男なら必ずこの状況を変えてくれるはずだ！！」

「オヤジの言うとおりに広場を目指せエーーーー！！！！」

海賊達は一時は不安になっていたが、『白ひげ』の言葉に気を持ち直して、再び進行を開始する。

「シシ……俺ア、信じてるぞ。」

『白ひげ』はニツと口元に笑みを浮かべると、手に持った薙刀を振るった。

「『ゴムゴムの……風船っ』!!」

ポヨン!!

ルフィは壁が出現した後、何とかして上に登ろうと試みるが、それを察知して備え付けられた大砲から砲弾が放たれると空気を大きく吸い込んで、腹で砲弾を跳ね返して壁にぶつけるが、ビクともしない。

「ハア……ハア……くそっ!!大砲が邪魔で前に進めねエ!!」

「こりゃあ、何とかせにゃいかんのう。」

激しく呼吸をするルフィに厄介そうに壁を見上げるジンベエ。

「こつなりゃ、強引にでも……」

そう言っつてルフィは再び手を伸ばすそうとするが……

「待てよルフィ。」

「!!!!」

突然、大気にドアが出現して開き、同時にその中から現れた人物に声を掛けられてルフィとジンベエは振り返ると、そこには……

「シシー!!」

「シシ君……!!」

2人の安堵の表情を見た俺はドアから出ると、2人の前へと歩み寄った。

「悪いな、遅くなって。」

「気にすんな!それより、あの壁をどうにかしねーといけねェんだ!シシも手伝ってくれねェか!？」

「ああ、もちろんだ。そのためにここまで来たんだからな……で?何か作戦でもあるか?」

「うーん……」

俺の問い掛けにルフィは腕を組むと、難しい顔で考え始める……そして、何か閃いたかのように頭の上に豆電球が光った。

「そうだ!!いい作戦がある!!」

「………何だ?言ってみろ。」

多分……いや、絶対にろくな事ではないと俺は感じていた……だって、ルフィの思いついた作戦だぞ?大概が無茶な事に決まっている。

「あの場所から突入するんだ!!あそこだけ壁がねェしな!!」

ルフィはそう言いながらオーズの倒れている場所を指差した…俺は思わず頭を抱え込み、そして……

「バチコーン！！！！！！」

「ぶべっ！？」

ルフィの顔に思いっきりビンタをお見舞いする…その衝撃で首が若干伸びたがすぐに戻ると、ルフィは何が何だか分からない表情で文句を言ってくる。

「何すんだよ！シシ！！」

「お前はアホかあ！！あんなにあからさまな道があったら、敵も警戒するに決まってるだろーが！！通った瞬間に狙い撃ちされるのがオチだぞー！！」

「んじゃあ、どうすんだよ！！」

大口を開け、目を飛び出させて怒鳴りつける俺に反論するルフィ…まさか、ルフィにビンタをする日が来るとは夢にも思わなかったな。

「…………シシ君の言う通りじゃ。」

俺達のやりとりを見ていたジンベエが口を開いて、俺の言葉に賛同する。

「海軍とて愚かじゃない…隙のある場所が出来たんじゃ。そこを警戒するのは最もじゃろう…だが、ルフィ君の言った事にも一理あ

る。あそこが唯一、鉄壁の穴……そこを利用するしかないじゃろう。」
チラリとオーズの倒れている場所を見るジンベエ……そんな様子に俺は頭を掻きながら、溜息をついた。

「ハアー……ルフィ、ジンベエ。」

「「？」」

「俺が何のためにここに来たのか分かってるか？あの壁をどうにかするために俺は来たんだぞ？」

ルフィもジンベエも忘れて……ここには本来いるはずのない男がいることに……

「じゃが、入り口はあそこしか……」

「なら、もつと広げれば……それで解決するだろ？」

「「!!」」

俺は2人の前に出ると、目の前にある壁を見上げて、拳を握ったり閉じたりして声を掛ける。

「これから俺はあの壁……オーズから右隣2つくらいを破壊する。それだけやれば、充分だろう。そこで2人には俺の手伝いをしてもらいたいんだが……どうだ？」

2人の方を向いて、真剣な表情で提案する俺に2人は……

「おれは手伝うぞ!! シシ!! 何か面白そうだ!!」

「……分かった。他に方法がない以上、シシ君の提案に賭けるしかないのう。」

「ありがとな2人共……それじゃあ、行くぞ!!」

「おう!!」

「ああ!!」

ルフィは笑顔を見せながらノリノリで……ジンベエは腕を組んで深々と頷くのを見た俺はすぐさま走り出し、2人も同じよう走り出した。

「ん!?! ……あれは!?!」

「おい!! 『麦わらのルフィ』だ!! ジンベエと……『白ひげ』と同じ能力のあの男もいるぞ!!」

「え!?! 確かあの男、前の方で戦ってたんじゃない……」

「分からないが、とにかくあの3人を止めるんだ!!」

迫ってくる3人を見た海兵達は一斉に攻撃を仕掛けてくるが、3人は……

「……どけえ……」

「うわああああああ!!……!!」

「ダメだ！！止められない！！」

勢いそのままに海兵達をなぎ倒して、壁の近くまでやってくると壁にある大砲がこちらに向けられる。

「それじゃあ、始めるぞ！！」

そう言うと俺は掌を氷に押しつけて、力を込めると俺の体に強力な冷気が発生し始め、そして……

「『氷河時代』（アイスエイジ）！！」

その冷気は氷を通して、オーズの隣の壁へと伝わっていき、瞬く間に氷漬けとなった。本来、この技は一面の海を凍らせる程の威力を持っているが、シシはその威力をコントロールして壁だけを凍らせるようにしていた。

「な！？壁が……凍ったあ！？」

「『黄猿』大将だけじゃなく、『青キジ』大将の能力まで使うのか！？」

目の前の出来事に驚き、慌てふためく海兵達……それを見たセンゴクと3大将は……

「こ、こんなバカな事が……」

頭を押さえながら顔を青ざめて、驚愕の表情を浮かべるセンゴク。

「まさか『白ひげ』だけじゃなくて、俺の能力まで使っちゃうとは……」

「ついさっきは、わっしの能力まで使われたからねえ……。サカズキ……こりゃあ、君の能力も持っていると考えた方がいいねえ……」

「……生意気な小僧じゃあ……」

3大将の面々もシシの行動に驚きと怒りを覚えていた。そんな中、事態を重く見たセンゴクが『赤犬』に対してすぐさま指示を出した。

「いかん……このままでは……『赤犬』……さっさと始める……」

「……」

センゴクの指示に『赤犬』は準備を始めるが……すでに遅すぎた。シシ達は壁の前まで来ており、指示を出していた。

「ジンベエ……あんたは隣の壁を頼む……俺とルフィは目の前の壁をやる……」

「分かった……『魚人空手』……」

ジンベエは方向を変えて、隣の壁の前へと移動して、構えを取る……その姿を見た俺達も壁の前へと移動して準備を整える。

「俺達もやるぞ……ルフィ……」

「ああ……」

「『ギア3』!!!『骨風船』!!!」

そう言うと俺は左手、ルフィは右手の親指を噛むと思いつき骨に空気を入れて膨らませて、それを反対の腕へと移動させる。

「『鮫瓦』……!!!」

「『『ゴムゴムの』オ~~~~~!!!」

ジンベエは右手に力を入れ、俺達は後ろに捻りながら巨大化した腕を伸ばすと、同時に技を放った。

「『正拳』!!!」

「『『2つの巨人の回転弾』(ダブル・ギガント・ライフル)!!!」

ドゴォー—————ン!!!!!!!

『王下七武海』の1人『ゲッコウ・モリア』を退けた正拳突きと巨人族の腕に回転を加えた2つのパンチが決まり、氷漬けになった壁が音を立てて崩れ去っていった。

第10話「包囲壁突破」(後書き)

第10話完成いたしました。

長い間かかってしまい、申し訳ありません>m()m<
小説を書くというのは、ネタとテンションが高揚していないと大変
ですね。でも、めげずに頑張ります。

今回は『包囲壁』を破る内容でしたが、それよりもシシの悪魔の
のオンパレード…といっても少ししかありませんが、そこは書いて
みて良かったと思ってます。あと最後のシーンは書いていた自分自
身が頭の中で想像できるくらいに気にしています。

最後に前回の余談で考えていたアニメ風について考えてみました。
ややネタバレがあると思いますがどうぞ、想像してみてください(笑)
)。曲はD O A S I n f i n i t yの『君がいない未来』です。

(前奏)

水平線から朝日が徐々に昇り、サウザンドサニー号の甲板から麦わ
らの一味がその光景を見ている。並びは左からサンジ、ウソップ、
チョッパー、ナミ、ルフィ、シシ、ゾロ、ロビン、フランキーが登
場し、ルフィとシシが上を見上げると、海賊旗が風でなびいている
シーンが出て、タイトルロゴ。

(守る)

海原を進むサウザンドサニー号でくつろぐ一味。サンジはカクテル
を2つ、甲板で椅子に座っているナミとロビンに渡す。ウソップと
チョッパーは釣り、ゾロは筋トレ、ブルックはバイオリンを弾き、
フランキーは大砲の整備をしている。

(叫び)

ルフィとシシは船の先端で前を見ていると、海が迫り上がり、そこから巨大な海王類が出現、その姿に驚きのリアクションをするウソップ、ナミ、チョッパーとは反対に好戦的な態度を取るルフィ、シシ、サンジ、ゾロ、フランキー。ロビンは口元を押さえて、クスクスと笑っている。

(涙を)

場面が変わり、処刑台の上でエースが頭を下げ、涙を流しながら、子供時代の自分とルフィの回想シーンが頭の中に浮かんで消える。

(重ねた)

最後にエースとルフィが笑顔で義兄弟の盃を交わすシーンと共にエースが頭を上げてルフィを見る。

(君が)

上空から軍艦が出現して、ゆっくりと湾内に降り立ち、その中からシシ、ルフィ、ジンベエ、イワンコフ、クロコダイル、バギーと囚人達が登場して、戦場に突入する。マリントフォードの湾内で暴れ回るルフィ、シシ、ジンベエ、イワンコフ、クロコダイル、『白ひげ』と海賊達。ルフィはギア2、ジンベエは魚人空手、イワンコフはデスワインク、クロコダイルは砂嵐、『白ひげ』は薙刀に能力を付加して薙ぎ払い。そしてシシはいろいろな能力で敵を撃破していく。

(2度と)

処刑を実行するためにセンゴクが処刑人に命じて刃を下ろすが、ルフィの覇気によって止められて驚くルフィとシシ以外の面々。

(君と臨む)

『白ひげ』が広場への突入を果たすと海軍が攻撃に出てくる。その間にもルフィとシシは前に進み、処刑台へと近づいていくと3大将や七武海が邪魔をするが、シシによって防がれる。

(時空)

ルフィとシシが背中合せになり、互いに口元に笑みを浮かべて周りを見渡して同時に敵に突っ込む。

(間奏)

王下七武海とセンゴク、3大将と超新星の海賊達、黒ひげ海賊団と白ひげ海賊団に赤髪海賊団が紹介される。

(君となら)

草原の背景になり、ルフィとシシが向かい合って、互いに歩み寄って行き、ハイタッチをして、走り出す。

(終わらない)

走っている途中に麦わら帽子が風に吹かれて、空に舞い上がるのを見るシシとルフィ。

(君がいない)

イナズマが作った道を駆け上がるルフィの前にガープが立ちはだかるも、倒して処刑台へと降り立つ。その後、センゴクが巨大化して処刑しようとするが、ルフィによって防がれ、処刑台も壊れる。エースとルフィ、Mr.3が落ちていく中、砲弾が飛んできて爆発するが、その中から炎のトンネルが出現して3人が現れる。

(時空)

その後にシシが合流し、左からルフィ、シシ、エースが構えを取って再びワンピースのロゴで終了。

第11話「シシ対3大将」

シシ達が『包囲壁』を破壊した頃、シャボンディ諸島では突然、全ての映像が途絶えた事と再び映像を映せと駐屯している海兵達に要求している観客達の姿があった。

「おい！どうなってる！？何故、映像が途切れたんだ？」

「マリンフォードの様子を映してくれ！！」

「エースは！？『白ひげ』はどうなった！！」

「向こうの映像電伝虫にトラブルがあった模様で…こちらではどうにも対処が出来ないんです。」

矢継ぎ早に質問してくる観客達に海兵は手で制しながら対応するが、それでも観客の勢いは止まらなかった。

「海軍と『白ひげ』が取引をしていたってのは本当なのか！？」

「『白ひげ』は仲間を売ったのか！？」

「ですから…こちらも情報を確認中ですよ……」

何とか対応する海兵達に大半の観客は真つ暗な画面の前で騒ぐだけだったが、一部の観客は違っていた。

「くだらねえマネしやがるな…海軍の奴ら……」

赤色の髪に四角のゴーグル、つり上がった目に毛皮のコートを着た男。『億』超えで大物ルーキーの1人。キッド海賊団船長『ユースタス・キッド』通称『キャプテン・キッド』が真つ暗な画面を見ながら不機嫌そうに声を出した。

「せつかく、ここからって時に……余興はここまでってことかなあ、キラー？」

これからがこの頂上決戦の見せ場だというのに、その見せ場が見られない事に不満を漏らしながら、横にいた顔全体をマスクで覆った男。キッド海賊団戦闘員でキッドと同じ『億』超えの『キラー』に話しかける。

「そつだろつな。」

キッドの問い掛けに簡潔に返事をするキラーにキッドはさらに言葉を続ける。

「しかし、『白ひげ』といたあの白銀の男……見たことねえ野郎だな。俺の所の生まれじゃねえな。」

キッドは『白ひげ』が刺される寸前にそれを防いだ男の姿を思い出していたが、故郷の海にそんな男はいない事はすぐに分かった。

「見た限りじゃ、実力はあるそつだ……1度、直に相手をしてみたいもんだぜ！」

キッドが不敵な笑みを浮かべると、それに続くかのようにキラーが無言で鎌の様な武器を持ち上げた。

「ちくしょう！！せつかく船を戻してまで、この『戦争』を見に来たつてのに映像電伝虫のトラブルだあ！？ふざけんじゃねえ！！」

同じく真つ暗な画面を見ていた1人の男が不満そうに声を荒げると、そこへ……

「……んなア訳ねエだろ？バツカだなア、お前は……」

ヘッドホンと四角のメガネを着用し、ピアノの鍵盤のような歯に髪の毛を1つに束ね、中国風の服を着た男…キッドと同じく『億』超えの大物ルーキーであるオンエア海賊団船長『スクラッチメン・アプー』通称『海鳴り』と呼ばれる男が部下の勘違いを訂正する。

「え！？違っんすか？」

「あつたりめえだ！いいか？映像が途切れたつて事はこれ以上は見せたくねエもんがあるから、見せねエんだよ……それも俺達、海賊や世間の一般市民にとつちゃあ、都合の悪い事がなア……！」

船長の説明に納得する部下に、アプーはもう1つ自分が感じている事を部下に話した。

「まア、それはそれでいいとして、俺はあの男の事が気になってしかたねエ。」

「あの男……というと『白ひげ』と一緒にいた白銀の男ですか？」

「その通り！あんな男は今まで見た事ねエからなア！！それにこの『戦争』の中、あそこまでやるって事あ、実力は申し分ねエはずだぜ！……」

部下の質問にアプーは両手の親指、人差し指、中指を前に突き出して答えた。

「……………」

海賊団のマークのついた帽子を被り、腰にサーベルとメイスをぶら下げ、体に『X』の文字が刻まれた男：元海軍少将であり、現在はドレーク海賊団船長である『X・ドレーク』^{ディエス}通称『赤旗』は腕を組みながら、無言で画面を見つめながらも海軍の作戦について考えていた。

「（やはり、パシフィスタを投入してきたか……バーソロミュー・くまの肉体に『黄猿』のレーザーがあそこまで形になっていれば当然だろう……しかし……）」

シャボンディ諸島でパシフィスタの完成度具合を確認したドレークは自分の予想が当たりつつも、1つだけ腑に落ちない事があった。

「（『白ひげ』といたあの男……海軍の者と言っていたが、あれほどの男は聞いた事がない。見た限り、パシフィスタを簡単に破壊し、なおかつ数体を暴走させる程の実力……恐らく能力者だろうが、例えそうでなくとも相当な実力を持っている……パシフィスタ以上に厄介な存在だ。）」

そう思いながら、ドレークは手に力を入れた。

「『白ひげ』が仲間を売っただど！？バカバカしい！！それをしねエから奴は生ける伝説と呼ばれてるんだ！！」

「……待ってください！！『頭目』（ファーザー）！！」

全身をマフィアの様なスーツとコートで纏い、黒のテンガロンハッ

トを被つて怒鳴りながら去っていく葉巻を加えた男…ファイアタンク海賊団船長『カポネ・ベッジ』通称『ギャング・ベッジ』を部下達が必死に追いかけていく。

「てめエらも、まさか『白ひげ』が仲間を売つたと思ってるんじゃないだろうな!！」

「「「い、いえ!！」」」

振り返りながら部下達を睨みつけるベッジに部下達は即座に否定した。

「それと『白ひげ』といたあの男! !あの男の事を徹底的に調べ上げろ! !この『戦争』に飛び込んで、『白ひげ』を仮にも助けたんだ! !それなりに名が通っているハズだ! !」

ベッジは『白ひげ』を助けた男の事を調べるよう部下に指示を出す
が……

「ファーザー…あんな男なんかどうでもいいじゃありませんか。『白ひげ』は助けましたが、調べる程の事じゃ……」

ベッジの指示に部下の1人が異を唱えると同時に……

ダァン! ! ! !

「ぎゃ ああああ! ! !」

「……俺に意見するつてのか?」

突然、銃声が鳴り響くとベツジが懐から取り出した銃を意見た男に向けて放っており、右肩を貫通した部下は痛みに叫び声を上げる……その光景を見ながら、銃を懐にしまつと他の部下達を睨みつけて……

「てめエらもこうなりたくなかつたら、とつとあの男の事を調べ
るんだ!!」

「分かりました!!」

例え自分の部下でも容赦はしないベツジに部下達は一斉に返事をした。

「ふむ……なかなか面白い男だな。出来れば1度会ってみたいものだ。」

僧侶の様な格好に立派なあごひげを蓄えた巨漢の男：破戒僧海賊団船長『ウルージ』通称『怪僧』はあごに手を当てて『白ひげ』といった男を思い出していたが、これ以上映像が映らないと判断するとすぐにその場から立ち去るために歩き出そうとしていた。

「続きが気になる所だが…仕方あるまい。いずれ、またの機会にするでしょう……行くつか。」

ウルージはそう言つと、部下達と共に自分の船へと戻つていった。

「……あんの男！一体何者だつていうんだ!？」

「ちよつ……!!ボニー船長!!落ち着いて!!！」

真つ黒な画面を見ながら、手に持った肉やピザをやけ食い気味に頬張りつて、苛立ちを見せるピンクの髪の女…ボニー海賊団船長『ジュエリー・ボニー』通称『大喰らい』を周りの船員達が必死に宥めようとしていた。

「あんな男がいるなんてあたしは知らないよ!!誰か知ってる奴はいないのか!？」

「いや、それが誰も知ってる奴がいなくて……」

ボニーの問い掛けに船員達は首を横に振る…その光景に彼女はますます苛立ちを募らせ、口に入った食べ物飲み込んだ。

「ちっ……あの男！『新世界』で会ったら、絶対に正体吐かせてやる！！行くよ！！」

そう言うとボニーは苛立ちながら、その場を立ち去った。

「『白ひげ』と『白ひげ海賊団』の生存確率が共に上がっている……やはり原因はあの男か。」

椅子に座り、カードを自分の体から出したいくつもの藁の上に並べて、この『戦争』についての占いを行っていた藁の色に似た長い髪の毛の男……ホーキンス海賊団船長『バジル・ホーキンス』通称『魔術師』はこの『戦争』が始まった時に行った占いの結果とあの男が現れて後の結果が大きく違っていることに驚きつつも、再びカードを手に取るとあの男の事について、占った結果が導き出された。

「……あの男がこの『戦争』の勝敗を握る確率は100%……つまり、あの男がどちらかに味方すれば、確実にこの『戦争』の結果が決まる……そして、あの男は『白ひげ』側についた。つまり……」

導き出された結果に驚きながら、宙に浮かせたカードを全て回収す

るとスクツと立ち上がって画面を見つめる。

「この『戦争』…『白ひげ』達に敗北はない。」

「へえー……こりゃあ、面白くなってきたな。特にあの男……さし
ずめ『白銀屋』とでも呼んでおこうか。あれほどの男が今まで騒が
れなかったのが不思議だが、あいつが参戦してから確実に流れは『
白ひげ』に向いてきてるな……だろ？ペボ、ジャンバル。」

「アイアイその通りだキャプテン！！」

「ああ。」

豹柄の帽子を被り、両腕と両手の甲に刺青と鐙に毛皮のついた刀を
携えてた男…ハートの海賊団船長『トラファルガー・ロー』通称『
死の外科医』も同じく映像が途切れるまで画面を見ており、白銀の
髪の方がもたらした成果を船員である人語を喋る熊…『ペボ』と人
間オークシヨン会場にてルフィが『世界貴族』の末裔である『天竜
人』を殴り飛ばした事件の際、その奴隷であつた元海賊団船長で新
しく加入した『ジャンバル』に声を掛けると、2人は返事を返し
た。

「まあ、あれだけ『白銀屋』の実力があれば滅多な事じゃあ負ける事は無いだろうが、あれだけ海軍の相手をするのは少々、厄介だろう……少し様子を見に行ってみるか。船を出すぞ！！ペポ！！ジャンバル！！」

「アイアイキャプテン！！」

「……………」

3人は船の中へと入って、船を動かす準備を始める……この行動がのちに重要な役目を果たす事になるとは誰も思わなかった。

その頃、マリンフォードでは海軍にとっては『白ひげ』達を一網打尽にするための作戦の要である『包囲壁』が崩された事により、その後の対応に追われていた。

「ほ、『包囲壁』が破られたぞーーーー！！！」

「急げ！！すぐに守りを固めるんだ！！！」

「ま、まさか『包囲壁』が突破されるなんて……！！！」

崩れた『包囲壁』を広場で見ていた海兵達の中には、未だにその事実が信じられずに呆然としている者もいた。一方、海賊達は……

「ウオオオ！！やってくれたぜ！！ジンドウ！！！」

「急げ！！ジンドウが開けた場所から広場へ突入するんだ！！オヤジに道を作れえーーーー！！！」

シシによって展開された『包囲壁』が脆くも崩れ去る様子を見ていた海賊達は広場へ突入するために猛然と攻めかかる。

「オヤジ！！ジンドウがやってくれたよい！！！」

その光景を見ていたマルコも驚きを隠せず、傍にいる『白ひげ』へと話しかけると『白ひげ』は頷き、即座に次の指示を出した。

「ああ！！……野郎共！！広場の近くにいる奴はそのまま突っ込み！！ジヨズ！！『切り札』の準備を始めろ！！！」

「おう！！！」

「いいか！！これから広場へ突入する！！シシの奴が言うには、奴らは次にこの足場を狙ってくる！！全員、準備だけはしておけ！！！」

「……………！！！」

「「「おう！！！」」」

活気づく海賊達を見ていた『白ひげ』は突然、胸に軽い痛みを感じて誰にも見えない様に、その部分を手で押さえた。

「（ちつ……こんな時に来るとはなァ。だが、ここで倒れるわけにはいかねエな……『息子』の救出と仇を討つまでは……）」

押さえていた手を退かしながら、『白ひげ』は処刑台にいるエースへと視線を向けた。

「よし！これで広場への道が出来たな。これならあの時よりは容易く、突入できるだろう。」

『包囲壁』の破片を見ながら、俺は腕を組んでボソツと独り言を言うかのように呟いた……そこへ……

「シシ！……おい！シシ！！」

「ん？」

子供の様な甲高い声と共に足に何かがぶつかってくる様な感覚に俺は視線を下に向けると、身長が小さな子供と変わらない姿のルフィ……俺はちびルフィと呼んでいるが、そいつが必死に俺のズボンの裾を足で蹴っていた。

「どうした？ルフィ」

「どうしたじゃねエ！！何でお前は体縮んでないんだよ！？『3』はすっげえ強エんだけど、その反動が厄介で体が縮んじゃうんだ！」

「何でって……俺はうまくコントロールしてんだ。お前もちゃんとコントロールすれば、俺の様に縮まないようになるさ。」

チートの俺にはそんな事は関係ないんだが……と思いつつも、それっぽい理由を言いながらルフィを見る……ゴムだから出来る技である『ギア2』や『ギア3』……特に『ギア3』はパワーにおいてはCP9のルッチやスリラーバークのオーズやモリア、シャボンディ諸島でのパシフィスタと名だたる強敵にも対抗できるが、その代償として『ギア2』の様なスピードは出すことが出来ない上に『骨風船』の名の通り、膨らませた状態の時は大きくなるが、それが抜けた状態では普通に状態よりも遙かに小さくなってしまふ。

さらに厄介なのが膨らんでいた時間だけ、その間縮んでしまう事なのである。これが一撃で決まるような戦いならそれほど問題ではないのだが、これが長時間となると話は変わってくる。ルッチとの戦いがいい事例だ……空気が抜けた後の1分はゴムの特性は無くなり、殆ど戦闘不能となっている。あの時はギリギリで間にあったが、もし間に合わなければ確実にルフィの命はあそこで終わっていただろう。

なら、ルフィがそれを克服するにはどうすればいいか？答えは簡単だ……空気の出ていく量をコントロールすればいい。原作でのルッチとの戦いの時、ルフィは空気を全て抜いたのを見て、俺が思っていた事だ。確かにあの時の空気が抜ける勢いはすごいが、あれを少しずつ……なおかつ体に負担がかからないように抜くようコントロールすればそれも可能だろう。但し、それを行うには相当な訓練が必要となるが……

「お……戻った！！シシ！エースを助けたら、俺にもそのやり方教えてくれ！！おれはまだまだ強くならなきゃいけないーんだ！！」

「そりゃあ構わないが、相当難しいぞ？それでもいいのか？」

「ああ！！かまわねエー！！」

「………わかった。」

体が元に戻るやいなや、俺に向かって『ギア3』の反動を克服するためのやり方を頼んできたルフィに俺は念を押すが、ルフィの強く頷く姿にこれ以上言っても無駄だなと思ひ、頷いた……そこへ……

「シシ君！！ルフィ君！！」

「ジンベエ!!」

「無事だったか…助かったよ、ジンベエ。そっちの様子はどうか？」
同じく壁を破壊したジンベエが2人の名を呼びながら、こちらへ向かってくる姿を確認した俺達は安堵の表情を浮かべた。

「わしが壊した壁の所から次々と海賊達が広場へと突入しておる。
じゃが、海軍の連中も必死にそれを阻止しようとしておる。シシ君、ルフィ君!!今が絶好のチャンスじゃ!!このまま、わしらも広場へと急ごう!!」

「おう!!んじゃ、さつさと……」

「ウオオオオオ!!ここから先へは行かせない!!」

ルフィが先へ進もうとした時に1人の海兵が傷を負いながらも、ルフィに斬りかかるようにするが……

「『DEATH・WINK』!!ヒーハー!!」

「ぐお!!」

バチヨーン!!

独特な音と共に衝撃が海兵を襲い、そのまま吹っ飛ばされていくのを見た後に後ろから声を掛けられる。

「麦わらボーイ!!油断は禁物ダツチャブル!!」

「イワちゃん!!」

「アンタも無事じゃったか…しかし、今までどこで何をしていたんじゃない?」

俺達が振り返ると、多少だが傷を負いながらも元気そうなイワンコフの姿にルフィは名前を呼び、ジンベエはここまでの行動を聞いたでした。

「遅れて悪かつチャブル!!ちよつと、くまの奴にヴァターシの恐さを体にタタキ込んでたら、つい時間を忘れっチャブル!」

「いや、別に構わねーよ……それでくまは?」

「あいつならお仕置きをした後に、そのまま置いて来てやつチャブル!!ヴァターシの顔を忘れた事を後悔させてやつチャブルよ!!」

「そ、そうか……」

俺の質問にイワさんは鬼気迫るような表情で答える姿にさすがの俺も少しだけ後退った……そりゃあ、1度会った人間の顔…しかも、イワさんのような忘れたくても忘れられない顔を忘れられたんじゃ、頭にもくるよな。他の奴らも全員が『ああ…うんうん…』って納得してたし……

「イワさん、それよりもせつかく広場への道を開けたんだ。そろそろ行くでしょう。」

「そうだよイワちゃん!!壁が崩れたんだ!!早くエースの所へ急

「うー！」

「ハッ！ヴァターシとした事が…つい…まあ、くまの事はこれぐらいにしておいて、分かっチャブルよ！麦わらボーイ！！シシボーイ！！」

「それじゃあ、行くとするかのう。」

俺とルフィはイワさんを宥めると、広場へと突入する。するとそこには……

「あらら……ついに来ちゃったな。悪いけど、ここを通すわけにはいかないよ。」

「ドラゴンの息子オ……！！こつから先は1歩も通さんけえ。」

「……ここからはわっしらが相手だよ。」

海軍大将である3人が俺達の前に悠然と立つ姿に俺以外の3人は驚きや苦い表情を浮かべる。

「くそオ…あと少しだって時に！！…だけど、やるしかねエ！！」

「まさか、3大将全員がここに来てるとは…こりゃあ、厄介じゃのう……」

「正に絶体絶命ダツチャブルね！！」

そう言いながら構えを取る3人だが、その前にスツと俺は歩み出た。

「シシ（ボーイ、君）？」

「3人共、ここは俺に任せて先に行ってくれ。」

「な！？」

「！！！」

突然の俺の行動に疑問を浮かべる3人だったが、次の俺の言葉に驚きの声を出し、3大将もその発言にやや驚きの表情を見せた。

「何言つてんだよ！！おれも戦うぞ！！」

「無茶じゃ！！大将1人でさえ、相当な実力を持つとる！！それを3人同時に相手にするなんて……！！」

「いくらヴァナタに実力があっても、さすがに無理ダツチャブル！！」

俺は頭の中で『やっぱり、反対するか……』と思う。それもそうだろう……1人で大将3人を相手をするなど、『白ひげ』でも望んでする事ではない……自殺行為に等しい行為なのだ。しかし、俺は……

「大丈夫……この3人程度なら俺1人でも充分だ。それにその『赤犬』の野郎にはちょっとした『借り』があるんでな。」

「……………」

俺の言葉に『赤犬』は無言で睨みつけるが、それに対して俺も睨み返す。

「それに……ここで大将達を抑えておけば、あとは処刑台までの厄介な敵は中将達だけだ。もちろんルフィ、お前のじいちゃんもな？」

「……………でもよー！！」

そう言つてルフィに俺は笑いながら話しかけるが、納得できない様子でルフィは食い下がる。

「それに約束したろ？ 『エースを救出した後には仲間になるか返事をする』……………その約束を果たすまでは俺は誰にも負ける気はねーよ。だから、ここは俺に任せて行け！！ここにはエースを救うために来たんだろ！？なら、こんな所で立ち止まつてる暇はねえ！！」

「！！……………分かった。イワちゃん！ジンベエ！先に行こうー！！」

「ルフィ君！？」

「麦わらボーイ！？」

俺の言葉に気迫を感じ取つたのだろう……ルフィは黙り込んだ後に決意したかのように頷くと、それに驚いた2人がルフィの名を叫んだ。

「シシの言うとおりで。ここで大将達と争つても、エースは救えねえー！！なら、おれはシシを信じて、この場を任せる！！大丈夫だ！シシならきつとやってくれるー！！」

「ルフィ君……………分かった。シシ君とルフィ君の言葉を信じよう。」

「麦わらボーイ……ヴァターシはヴァナタを死なせない事だっキャブルが使命。シシボーイも心配だっキャブルけど、ヴァナタが先に進むと言っのならヴァターシもヴァナタを援護をするわ。」

「すまねエ！2人とも……『ギア2』！！」

2人も同じように洩っていたが、ルフィの力強い言葉に根負けして納得するのを俺が確認すると、ルフィが足をポンプにして血流を加速させると俺に話しかけてきた。

「シシ！！絶対、こいつらをぶっ飛ばしてこい！！約束だからな！！」

「ああ、必ずな……行け！！」

俺がそう言っつと3大将の間を抜けるルフィだが……

「んんん、遅いねエ……それじゃあ、ダメだよオ」

「！！」

「ルフィ君！！」

「麦わらボーイ！！」

『黄猿』がルフィの正面に回り込み、光の速度で蹴りを放つ……いくら身体能力が向上しても、あくまで使っているのは肉体の力であり、『光』の速度には到底、叶わないだろう……それ以上の力を持つシシ以外には……

ドン……!

「……邪魔をするんじゃないよオ……ジンドウ・シシ。」

「言っただけ？お前らの相手は俺だつてな！！イワさん！ジンベエ！！ルフィの援護を頼んだぞ！！」

「分かった！！シシ君も必ず生きるんじゃぞ！！」

「任せナツキャブル！！ヴァナタこそ、油断するんじゃナツシブルよ……！」

「ありがとな！！シシ……！」

『黄猿』の蹴りに対して、覇気を纏った蹴りで防ぐとその横をルフィ達が通り抜けていく……俺はその背中を見送ると3大将達を見据える。

「おーおー、えらい自信だねえ……若気の至りつてやつかい？」

「いいのかい？加勢してもらっても良かったんだよオ……？」

『青キジ』が軽い感じで話しかけてくるが、その眼光は鋭いまま手を凍らせながら戦闘態勢に入っており、『黄猿』も足に力を込める。

「言っただけ？お前ら程度なら俺1人で充分だつてな……そつちこそ、3人同時にかかって来い。じゃないと、こつちも少しは楽しめないから……なっ……！」

そう言つと『黄猿』の足を弾き、一旦距離を取ると同時に左側面から……

「『冥狗』（めいこう）！！」

バクン！！

「！！……………」

『赤犬』が左腕をマグマに変えて襲いかかり、俺の腹を貫通させる……原作では『白ひげ』の地震攻撃を受けた後の反撃時に頭部半分を焼き切った技である。

「油断しちよるのう……でかい口を叩く割には随分と呆気なく終わったな。じゃが、念には念を入れておかんのう……」

『赤犬』が左腕を抜くと同時に俺は膝を付く……そこへ、とどめを刺そうと再びマグマに変えて、腕を振り上げる。

ブウ……ン

「残念！普通の奴ならこれで終わりだろうが、俺には効かねーよ！！」

ドン！！

「！？ぐうウツ！！ゲホ！！」

俺は右手に地震の力を付加させて『赤犬』の腹を殴りつけると、『赤犬』は口から血を吐き出しながら、その衝撃で後ろへ倒れそうに

なるのを必死に堪えるが、立っていることは出来ずに四つん這いになった。

「ハア……ハア……！！……おんどれエ！何故、わしの攻撃を……」

「ん？何でお前の攻撃を受けて無事なのかってか？…特別に教えてやるよ。見てな……」

忌々しく俺を睨みつけながら、自分の攻撃が通じない事に混乱する『赤犬』の目の前で、俺は立ち上がると貫かれた腹を見せると力を込める。

ドロリ……

俺の体の表面をマグマが流れ出し、俺の腹を元通りにしていく様子に3大將は驚きの表情を見せる。

「おいおい、マジかよ……」

「ん〜、やっぱり持っていたねエ〜。」

「！！その能力は……！！」

「驚いた様だな？そうだ『赤犬』……アンタの能力だ。アンタがマグマならこっちもマグマになるまで……どうだ？自分の能力で攻撃を防がれる感想は？……油断したのはそっちだったな？それと……よくも俺を『白ひげ』を仕留めるために利用してくれたなあ？その礼はたっぷりとしてやるよ！」

俺は『白ひげ』を討ち取るために、俺の存在を利用した作戦の『借

り』を返すために赤犬に攻撃を仕掛けようとする。背後から……

「驚いたねえ……だけど、やらせはしないよ。『アイス塊』（アイスブロック）……『両棘矛』（パルチザン）……！」

『青キジ』が空気中の水分を凍らせて、矛型の氷塊を俺に目がけて飛ばしてくるのを感じ取った俺はもう一つ面白いモノを見せてやる事にした。

「なら、もつと驚いてもらおうか……！ 『陽炎』（かげろう）……！」

振り向きざまに両手から炎を飛ばして氷塊を溶かしていくと、『青キジ』は手をクロスにしたまま警戒していた。

「……！ そいつは『火拳』の……！」

「ああ、その通りだ。ホントは『赤犬』の能力でも良かったんだが、俺はコイツが嫌いだな？ さて、ここで質問だ。俺は『火』でお前は『氷』……相性的にはどっちが有利なんだろうな？……『火銃』（ひがん）……！」

右手を拳銃の形に作り、『青キジ』の方へ向けると指先から火の玉を弾丸の様に発射する。

「ぐっ……！」

体を音を立てて撃ち抜かれて、思わず膝を付く『青キジ』の姿を見た俺は攻撃を止めると、その隙をついて『黄猿』が至近距離からレーザーを発射しようとしていた。

「お〜…こりゃあ、まいったねエ〜。だけど、この距離じゃあ
躲せないよオ〜〜?」

「どうかな? 『闇水』 (くろろづ) ー!」

ギョオオンー!

俺の左手を中心に黒い渦が発生し、『黄猿』の体を掴むと発射され
ようとしていたレーザーがプツリと消えた事に『黄猿』は驚く。

「!?!…こりゃあ、何だい?」

「なーに、ちよつと『光』から生身に戻ってもらったのさ。どうだ
? 久々に生身になった気分…そして、その状態で殴られようとして
いる感想は?」

「!?!」

俺の言葉に僅かに顔を歪める『黄猿』に俺は再び右手に地震の力を
付加させて、『黄猿』ごと地面へ殴りつけると、『赤犬』と同じく口
から血を吐いて倒れ込んだ姿を見下ろしながら、ニヤリと笑いなが
ら言った。

「だから言つたる? お前ら如き、俺一人で充分だつて。」

第11話「シシ対3大将」（後書き）

皆様、長らくお待たせいたしました。最新話完成いたしました。

ゴールデンウィークが終わって、その翌日に仕事で腰を怪我してしまい、今まで療養していました。ホントはもっと早く更新するつもりでしたが、なかなか怪我が治らず、今日にまで至ってしまいました。以後、体調管理には気をつけたいと思います。

今回の話では億超えのルーキー達の反応と3大将との戦いを描いてみました。いやー、人数分の描写を書くのは骨が折れますね。恐らく、これで全員出ていると思います。

3大将との戦いはもうシシ最強（笑）といった感じで派手にやっちゃいました。これぞ、チート主人公といった感じです。まずは第1戦が終わりましたが、この後も3大将達との話になります。

最後にこの作品を読んでくださっている方や感想をくれる方に改めてお礼を述べたいと思います。本当にありがとうございます。> m)

——) m ^

第12話「独壇場」(修正)(前書き)

お待たせしました。最新話完成しました。

仕事+大スランプで思うように執筆が出来ずにここまで掛かってしまいました。楽しみにしてください方、本当に申し訳ありません。

感想を見て、自分がしたことを反省して最後の部分を修正します。

第12話「独壇場」(修正)

「た、大将達が負けた————!!!???」

「最高戦力がああも簡単に!?!」

シシ達の戦闘を近くで見っていた海兵達は膝をついている大将達の姿に釘付けとなっており、その中には膝から崩れ落ちる者もいる。

「『赤犬』!!!『黄猿』!!!『青キジ』!!!」

処刑台にてシシと3大将の戦闘を見ていたセンゴクも思わず声を張り上げた。まさか、あの3人が敗れるとは夢にも思わなかったのだらう。

「センゴク…!!!こりゃあ、本気でマズイのう…!!!アイツら3人でさえ、あの男は軽くあしらいおつた。わしやお前が行ったとしても、勝てるかどうか分からんぞ!?!」

同じように戦闘を見ていたガープもこの状況にはさすがに焦ったらしく、その額からは冷や汗が流れている。

「そんな事は分かっている!!!だが、ここであの男1人に屈すれば世間は海軍に対しての信頼を失うのもお前は分かっているだらう!それだけは避けなければならん!!!ここは世界のほぼ中心にある島『マリノフォード』!!!ここに我々がいる事の意思を考えろ!!!」

ガープの言葉にセンゴクは怒声にも近い声で答えた……最初にエースの存在を発表した時も言っていたが、エースの処刑は必ず成功さ

せなければならぬ。もし失敗すれば、次世代において海賊の頂点に立つ資質を發揮し、いずれは『海賊王』になる可能性もある…それと同時に海軍は『海賊王の息子』を野に放したとして、信賴が皆無となるのは当然の事となるだろう。

「センゴク元帥！報告します！！」

そんなセンゴクとガープの元に海兵から報告が入った。

「くっ、こんな時に……どうした！？」

「はっ！！ジンドウ・シシによって破壊された『包囲壁』から続々と『白ひげ』傘下の海賊達が進入してきております！！また、広場の中を『麦わらのルフィ』、ジンベエ、イワンコフの3名が猛然とこちらへ向かって来ております！！」

「ぬう……全部隊に連絡しろ！！『白ひげ』とその傘下の海賊達、『麦わらのルフィ』、ジンドウ・シシに戦力を分散して応戦させる！！とくに、ジンドウ・シシは注意しろ！！あの男は最悪、足止めでも構わん！！」

「りよ、了解しました！！」

「これからエースの処刑を行う！！すぐに準備するんだ！！」

「はっ！！！！」

海兵は慌てて返事をして、すぐさま命令通りに行動をし始めると同時にセンゴクは処刑人にも指示を下した。

「こんにやるー!!」

同じ頃、広場の中を走りながら立ちはだかる海兵達をなぎ倒していくルフィ、ジンベエ、イワンコフの3人だが、ジンベエとイワンコフはシシと別かれた後に少しだけだが不安に感じていた…あの時はルフィ達の言葉を信じたが、いくらシシが実力があるうとも、あの3人を1人で相手にするにはやはり無理があつたのではないかと思つていたが……

「……いくらシシ君でもあの3人を相手にするのは無理じゃと思つたが……心配は無用じゃのう。」

「そうダッチャブルね。いくらシシボーイでも思つてイブルけど、やるじゃなーい……」

「ハア……ハア……！さっすが！シシはすっげーなあ……おれももっと強くならねーと……！」

後方から聞こえてくる海兵の叫びに後ろを振り返る3人……と、その時……

「隙あり……！」

спан……！

「うわあああ……！」

そんな言葉と共にモヒカン頭の海兵がルフィの足に刀の鋭い一撃を見舞い、その攻撃で前に倒れ込みそうになるのを必死に堪えるルフィだが……

「『指銃』……！」

ドスッ……！

「ぐぶう……！」

それに合わせるかのように今度は獣のような姿をした海兵がルフィの腹へと指を突き立てるとその衝撃で後ろへと吹っ飛ばされた。

「大丈夫か！？ルフィ君……！」

「しっかりおし……！」

「ハア……ハア……！だ、大丈夫だ……これくらい何ともねえ……！」

突然の出来事に驚く2人は飛ばされたルフィの元へと駆け寄り、体を抱き起こして前を見るとそこには2人の男……1人は刀を逆手に持ったまま、こちらを睨みつけており、もう1人は腰を低くして両手を広げ、今にも飛びかかりそうな体勢で立ちはだかっていた。

「あれはモモンガ中将!!それにダルメシアン中将も……!!」

「やった!!『海軍本部』の中将達だ!!」

周りの海兵達はその姿を見ると、喜びと安堵の表情を浮かべる……大将に次ぐ地位を持つ彼らの実力は敵味方関係なく知れ渡っている。特にモモンガ中将は刀で海王類をも仕留めるほどの実力者であり、もう1人のダルメシアン中将に関してもそれと同等の力を持っていた。

「悪いが、ここを通す訳にはいかん!!」

「又ハハハハ!!大人しく観念するんだな!!」

そう言うと2人は再びルフィに攻撃を仕掛けようと『剃』を使って、近づき攻撃しようとするが……

「そうはさせん!!『魚人空手』……『鮫肌掌底』!!」

「近づくんじゃなツキャブル!!『DEATH・WINK』!!」

「むっ!!」

「ぬっ!?!『鉄塊』!!」

モモンガの攻撃を弾くジンベエと同時にイワンコフがダルメシアンに向かつて、まばたきを放つが、咄嗟に防御して、一旦距離を取る2人。

「『海軍本部』の中将か……こりゃあ、手強いのうー！」

「だけど、こんな所で時間は取ってられナッシブル！！麦わらボーイ！！ここはヴァタシ達が何とかするから、ヴァナタは先にお行き！！！」

「分かった！！すまねえ！！ジンベエ、イワちゃん！！……『ギア2』！！！」

ルフィは再び血流を加速させて、中将の隙について突破するとそのまま一直線に処刑台へと向かっていく。

「！！……逃がしはせん！！！」

「そうはさせるか！！！」

ルフィの行く手を阻もうと再び『剃』を使おうとする2人だが……

「『魚人空手』……『五千枚瓦正拳』！！！」

「ニューカマー拳法44のエステ奥義……『夢打撃処裏拳』！！！」

「！！！！」

ジンベエがアップパーカットのモーションで正拳突きを放つと同時に

イワンコフも残像が見えるほどの超高速でチョップを放つと、それに気付いた2人は即座に防御や回避行動を取る。

「お主らの相手はわしらじゃー!」

「ヴァナタ達には悪いけど、麦わらボーイの邪魔はさせナッシブルよ!」

「おし!これで『白ひげ』ヤルフィ達にとって、厄介な大将達は封じたな。」

俺は目の前で苦悶の表情を浮かべる3大将の姿を見つめながら、軽

く溜息をついた。

「まあ、中將や七武海の奴らがまだいるかもしれんが、そこは何とかなるだろう。他の中將達は『白ひげ』傘下の海賊や隊長達の相手をしてたし、七武海もハンコック以外はそれぞれ相手を見つけていたからな。」

そう言いながら俺は手を顎にあてて、これからの行動を考える事にした。

「（しかし、よくよく考えてみると他の2人はともかく『赤犬』をぶっ飛ばしたのは、少々まずかったな。これじゃあ、海底に潜ませた『外輪船』が出てこれない……）」

俺は後ろを振り返り、未だに氷の海となっている湾内を見つめながら頭を掻いた。原作では『赤犬』が湾内の氷を溶かし、それを利用して『白ひげ』が海底に潜ませた『外輪船』とリトルオーズJr.を使って広場へと突入していたが、今回はそれをやる前に倒してしまった。

「（こうなりゃ、ジヨズにでも氷塊をぶっこ抜いてもらうか？開戦し始めた時にも同じ事やってたし……）」

原作でジヨズが氷塊を腕力でぶち抜いた時の場面が頭に浮かぶ……改めて考えると、非常識にも程があるよな……俺が言うのは間違いだけだ。

首を横に振りながら、そんな風に考えていると……

「撃てー！！大將達を救出するんだー！！」

「負傷していない者は援護に回れ!!」

ドンドンドン!!

大将達の危機に周りにいた海兵とその隊長らしき人物が俺に目掛けて、一斉に銃を発砲する。

「おいおい。人が考え込んでいるのに邪魔するんじゃないよ。」

ポポポツ!!

放たれた銃弾は俺の体を貫通するも、次の瞬間には音を立てて燃え上がり、元の状態へと戻っていく。

「なっ!? あいつも『自然系』…!? しかも、『火拳』のエースと同じ『火』だと!!」

「そんなバカな…!!」

「怯むな!! どんどん撃てー!!」

エースと同じ能力を使う俺に驚く者もいたが、それでも大半の海兵は俺に向けて銃を発砲する。

「攻撃を仕掛けなきゃ、このまま素通りしたんだが…: 仕掛けてくるなら話は別だ!! 悪いが、反撃させてもらう…: 『火拳』!!」

俺は大きく右手を振りかぶると、炎と化した拳を発砲する海兵に向けて殴りつけるが、その瞬間…:

「『九尾・銀幕』（きゅうび・ぎんまく）！！」

ジュウツ！！

「え！？これは……壁？」

海兵達の目の前に銀色の液体が壁の様に立ちはだかり、思わず見たままの感想を口にする。

「？……これは一体。」

「『九尾・銀槍』（きゅうび・ぎんそう）！！」

「！！」

ポポポツ！！

突然現れた壁に俺は疑問を抱く間もなく、今度は別の場所から同じく銀色の液体が槍の形となって、俺の体を貫くがさつきと同じように音を立てながら、元に戻っていった。

「ほう、なかなか厄介な能力を持つてるな……『白銀街道』（はくぎんかいどう）！！」

シユルルル！！

海兵達の守っていた銀色の壁の上から、銀色の細長い道が出来上がり、その上を滑るように1人の男が降りてくる。

「あ、あれは……」

「銀色の壁と槍は…間違いない!!」

周りの海兵達が自分達を守ってくれた銀色の液体の正体とその使用者に気づき、徐々に活気づいていく。

「それにサカズキ大将やクザン大将、ボルサリーノ大将の3人を倒したとなると、実力はあるようだな。」

銀色の道から降り立つと、すぐさま俺を睨みつける…海軍の支給品である『正義』と書かれたコートを羽織っており、身長は俺より少し高めで黒髪に整った顔立ちだが、そのオーラは歴戦の強者にも勝らぬものであった。

「あ、アスラ中将!!」

「お前みたいな奴が何故、今まで頭角を現さなかったのかは分からないが…俺達の邪魔をするなら、容赦はしない!!」

海兵達が男の名を叫ぶと同時に男が威圧を出すと、俺はニヤリと笑いながら男を睨み返した。

「!…へえ、面白そーな奴だ（しかし、あの男…アスラと言っていたか。俺の知る限りじゃあ、聞いた事はないな）。」

現在、判明している海軍本部所属の中将は10名、海軍支部には1名だけだ。俺は出来る限り、原作を思い出してみるが、どこにもアスラという名の海兵は登場していない。

確か、海軍本部に駐留する中将の規定は16名…まだ登場していない残り6人の中、あるいは支部つて事もあるだろうが、それだと実力は本部と比べて3段階降格…つまり、『大佐』相当……まあ、『大佐』でも相当な実力は持っているが…あの男は別だな。

「どうした？そつちが動かないなら、こちらから仕掛けさせてもらう…！」九尾・銀鞭』（きゅうび・ぎんべん）…！」

俺が思考していると、アスラの背中から先程と同じ銀色の液体が流れ出しはじめ、巨大な獣の尻尾の様な形となっていき、俺に向かって振り下ろされる。

「なるほど。『九尾の狐』をイメージとしているのか…こつちにもそんなのがいるとはな？『剃』…！」

アスラからの攻撃を難なく避けて、俺は間合いを詰めると両手を握り拳にして、アスラの体へと押しつける。

「…！」

「それじゃ、アンタの実力…確かめさせてもらうぜ…！」『六王銃』…！」

俺の行動にやや驚いたアスラに『六式』を極限以上に極めた者だけが使うことが出来る最終奥義の衝撃が送り込まれる。

ドパン…！」

強烈な衝撃でアスラの体から銀色の液体がはじき飛ばされるが…

「驚いたな、この技を使う奴がいるとは…だが、甘い!!」指銃・黄蓮『!!』」

六式最終奥義である攻撃を受けたアスラは感心した様子でこちらを見ながら、右手で『指銃』を連射させる。

「!?!」

ポポポツ!!

俺は驚きながら相手の攻撃を防ぎ、『月歩』で空中へと舞い上がるが……

「逃がしはしない!!」九尾・銀枷『(きゅうび・ぎんかせ)!!』

「うおっと!!」

再びアスラの後ろにある尻尾が勢いよく伸び、俺の体に巻き付くとそのまま地面に叩きつけようとする。

「やらせるか!」火鼠『(ひねずみ)!!』

そう言うと同時に俺の体全体を炎が包み込み、その熱によって巻き付いた尻尾がドロリと溶けると即座に反撃に移る。

「『火拳』!!』」

「ちっ!!』」

ジュウツ!!

俺の攻撃に他の尻尾で防御をすると、先程と同じく音を立てて防がれる。その間に俺は炎を消しながら、ゆっくりと地面に降り立つと、これまでの相手の攻撃や行動を元に予想を立てていた。

「（なかなかの実力だな。そして、あの能力……）」

『動物系』や『自然系』の可能性はないな…『動物系』はあくまで『身体能力』が強化される系統で格闘戦などに向いているが、いくら動物特有の箇所が強化されるといっても、あそこまでする動物など存在しない。マルコもあの炎は傷を再生し、攻撃を無効にするための炎であり、それ自体を攻撃に使用してはいないしな。

『自然系』に関しても俺の攻撃を受けても『自然系』の『物理攻撃を無効にする』という特性はあったが、あれを自然現象とするのは無理があったし、なおかつ『自然系』にしては他の能力に比べて攻撃能力が低いように感じられる。まあ、並の実力者なら十分に脅威なのだが、『白ひげ』クラスの实力者となると少し疑問が出てくる。それにあの尻尾だが、なぜか攻撃・防御共に能力の性質なのか切り離して使おうとしなかった。

となると残るは『超人系』だが、これが1番可能性が高いだろう。ゴムゴムやバラバラ、グラグラなど特殊な体質になったり、その他に作用する能力が付与される。さらにゴムゴムは打撃や電撃等が無効になるし、バラバラなら斬撃は無効になるから俺の攻撃を無効にできるのも説明できる。ドルドルやドクドクと同じく自ら発生させた物なら、自在に操ることも出来るから条件にほぼ近いだろう。

「（となると、あの男の能力だが……）」

さっきの攻撃で液体を操る能力だというのは判明したが、水ではないな。見た目はもちろんの事だが、仮にそうだとしたら俺なら海水や体内の水分を操って攻撃等の手段に使う。しかし、見たところそれらを使用しているとは思えないし、何より俺の攻撃で蒸発したのではなく溶けるといふことは水の性質からは考えられない。そう考えると、残るのは……

「（アレか……一度試してみるか）『剃』!!」

俺は自分の考えが合っているかを確かめる為に、真っ正面から相手に突っ込んでいく。

「…真っ向から勝負を挑むとは……何か策でもあるのか？」

突然の俺の行動にアスラはやや驚くが、手を振り上げると尻尾を攻撃態勢に移らせる。

「策があるなら、それごと対処するまで…『九尾・鋭貫銀槍』（きゆうび・えいかんぎんそう）……!!」

「!!『鉄か……』」

「甘い!!」

グサツ!!

アスラが手を下ろすと同時に尻尾が先程より鋭く尖った形となり、それが突っ込んできた俺の腹へと突き刺さる。

「見る!! 奴を仕留めたぞ!!」

「ウオオオ！！さすがはアスラ中将だ！！」

その光景に周りの海兵達も歓喜の声を上げる。

「『鋭貫銀槍』は『銀槍』の貫通力を強化したもの…お前が六式を使う事はさっきの『六王銃』で分かっていた。いくら『鉄塊』とはいえども、防ぐことは出来ない…恐らく、接近戦で何かするつもりだったのだろうが…勝負あつたな。」

そう言つて俺の腹に刺さつた槍を引き抜こうとするが……

ガシッ！！

「！…何の真似だ？」

引き抜かれる前に俺はその槍を強く掴んで抜かせないようにする行動にアスラは疑問を投げかけると俺はニヤリと笑つた。

「やっぱりな……分かつたぜ？アンタの能力。」

「！ほう…面白い。なら聞かせてもらおうか？」

「まずはアンタが『動物系』『自然系』『超人系』のどれかつて事だが、『動物系』や『自然系』はまずない。それぞれ当てはまる条件にばらつきがあるからな……となると必然的に『超人系』という事になるが俺は最初、水を操る能力かと思つた。それなら、海水や相手の体内の水分を操れるし、わざわざこんな尻尾を作る必要など無い…まあ、カモフラージュにはなるかもしれないがな。」

「ただ単に使わなかっただけ……とは考えなかったのか？」

俺の言葉にアスラは単純な答えを示すが、俺はそれを否定するかのようには首を振った。

「それはないな。それに、何より水ではないと判断したのは俺の攻撃で蒸発ではなく、溶けたいう事だ。『水が蒸発する』なら分かるが、『水が溶ける』なんて事はあり得ない。そう考えると強度があり、なおかつ溶けるといふ言葉を使うとなると……『金属』しか俺は思い浮かばなかった。」

「……………」

俺の回答に黙りこむアスラだが、そんな事は気にせず俺は言葉を続けた。

「『金属』でもいろいろ種類があるが、基本はどれも常温・常圧では固体だ。しかし、たった1つだけ例外がある。その金属は常温・常圧でも『液体』だから、いろいろな形に変形させることは容易だ……今、アンタが使ったようにな？その『金属』とは……『水銀』だ。」

「……………」

「『水銀』はその名の通り『銀』のような光沢を放つことからその名前がついている。アンタの使っている能力も同じ『銀』色だ……どうだ？俺の言っていることは間違ってるか？」

俺は反論はあるかと言わんばかりに聞き返すと、アスラは……

「ふっ……まさか俺の能力があつさり見破られるとはな。お前の言うとおり、俺は超人系悪魔の実『メタメタの実 モデル水銀^{マーキュリー}』を食べた『金属人間』だ。だが、それが分かった所で何になる？お前が何を企んでいるのかは知らないが、このまま……!!！」

アスラはさらに別の尻尾を同じく槍に変形させようとしたとき、何かに気付いき、口元を緩ませた。

「いや、少しやり方を変えよう。」

そう言うとアスラは尻尾を操作して、俺を動けないように巻き付けていく。

「何をやって…?」

突然のアスラの行動に俺は首を傾げるが、巻き付いた水銀はなおも強く締め上げられていく。

「お前の力は確かに大した物だ。『火拳』だけではなく、3大将の能力まで使えるとはな？今の現状では俺1人では手に負えない……だから!!！」

アスラがそう言った同時に俺の背後から……

「『アイスBALL』!!！」

「なっ!?!」

そんな声と共に巨大な氷塊が投げつけられ、シシの体が凍り付いた。

「連携して、お前の相手をさせてもらおう…そうですね？クザン大将。」

「あー…まあ、そういう事だな。」

口から血を流しながらも、やれやれといった感じで『青キジ』が溜息をつきながら、こちらへと歩いてきていた。

「でも、まあ…よくやったな？」

「クザン大将を見つけた時、奴に気付かせないように自分は注意をそらしただけです。あとはそちらがやってくれと信じていましたから…」

「……何とも嬉しい言葉だねえ。聞いたかい？」

「ふん！お前に言われんでも、聞こえとるわい！」

「聞こえてるよお〜〜〜」

『青キジ』は背後の2人…『黄猿』と『赤犬』に振り返りながら、声を掛ける…つい先程、アスラがとどめではなく、シシの動きを封じ込めたのはシシの背後に大将達がゆつくりと立ち上がる姿が目に映ったからだだった。そこでアスラはそれに気付かせないために注意をそらしながら、大将達が動くまで時間を稼いでいたのだった。

「ところで、大丈夫なのか？一緒にお前の水銀も凍らせたが……」

「凍り付く前に切り離したので心配いりません。そのくらいの事が出来なければ、大将達にはついていけませんから。」

そう言いながら少し口元を緩めるアスラ…その時……

「『赤犬』！！今すぐ作戦の続きを実行しろ！！」

3大将の姿を確認したセンゴクが処刑台から『赤犬』に対して、即座に作戦の続きを行うよう指示を出した。

「センゴクさんも相当、ご立腹のようだな。サカズキ…それじゃあ、頼んだよ。」

「お前に言われんでも、やるつもりじゃあ！！黙って見ちよれ！！」

クザンの言葉に不機嫌な様子で前に出ると、両腕をマグマに変化させる。

「こりゃ相当機嫌が悪いな。」

「海賊に…それも無名の海賊に自分が遅れをとった事が許せないんでしょう。」

「気持ちは分かるけどねエ〜〜。」

その背後で『赤犬』の言動について話す3人だが、それに構わずマグマに変えた両腕を空に向けると、そのまま噴出させる。

「『流星火山』！！」

拳の形をした火山弾が複数打ち出されると、それは湾内の『白ひげ』達の方へと落ちていった。

第12話「独壇場」(修正)(後書き)

最新話完成しました。

前書きの通り、仕事と大スランプで執筆が伸びに伸びてしまいました。思った通りに書きたいことが書けずにへこみました…感想にも楽しみにしています等のコメントを見る度に余計、不甲斐ないと思っ
てしまいました。

今回は以前に雷帝さまの作品に登場するアスラ中将とシシとの戦いを描いてみました。まずは友情出演の許可をくださりありがとうございました。ございました。そして、申し訳ありません。出演の許可を取った際はちよい役でのお願いだったのですが、話を考えているときにメインに使う事になってしまいました。

しかも、やられ役として……言い訳がましくなるかもしれませんがあくまで、この話に登場するアスラは似て非なるキャラクターです。雷帝様の作品のアスラではないということをご理解願えますでしょうか？

もし、気に入らないと思われるのなら即刻修正いたします。

最後にこの作品を見ている方、この話は最後まで書き上げたいと思っております。ですので、不測の事態が起こらない限りは放置ということにはしませんので、応援よろしくお願いいたします。

オリジナルの技を紹介。

名前：『九尾・銀幕』（きゅうび・ぎんまく）

説明：アスラの能力によって作られた尻尾によって形成される防衛技。その強度は大砲などの攻撃を軽く防ぐ。今回は海兵達を救うに使われた。

名前：『九尾・銀槍』（きゅうび・ぎんそう）

説明：アスラの能力によって作られた尻尾を槍に形成する攻撃技。
なお応用技である『鋭貫銀槍』（えいかんぎんそう）はこの槍の貫
通力を強化させたもの。

名前：『九尾・銀鞭』（きゅうび・ぎんべん）

説明：アスラの能力によって作られた尻尾を鞭に形成する攻撃技。
シシには避けられたが、本来は複数の敵をまとめて薙ぎ払うことが
できる。

名前：『九尾・銀枷』（きゅうび・ぎんかせ）

説明：アスラの能力によって作られた尻尾を枷に形成する捕縛技。
元が水銀であるため、その強度は非常に高いがあっさりとししに破
られた。

名前：『火鼠』（ひねずみ）

説明：シシが使った『メラメラ』の実際のオリジナル技。全身を炎で
纏うことでアスラの攻撃を防いだ。元は竹取物語の『火鼠の皮衣』。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3682k/>

ONE PIECE NOVEL -SHISHI BREAK STORY-

2010年10月9日13時13分発行